盛岡市内遺跡群

－平成14年度発掘調査概報－

落合遺跡	第14・15次発掘調査
大館町遺跡	第75次発掘調査
繋Ⅳ遺跡	第24次発掘調査
上畑遺跡	第５次発掘調査

２００３．３

盛岡市教育委員会

盛岡市内遺跡群

－平成14年度発掘調査概報－

落合遺跡	第14・15次発掘調査
大館町遺跡	第75次発掘調査
繋Ⅳ遺跡	第24次発掘調査
上畑遺跡	第５次発掘調査

２００３．３

盛岡市教育委員会

序　言

盛岡市には，今から約10,000年以上前の縄文時代草創期の遺跡から，新しくは盛岡城跡に代表される江戸時代の遺跡まで517箇所の遺跡が確認されています。

これらの遺跡の大半は，地下に埋もれているため「埋蔵文化財」として扱われ，文字資料だけでは知ることのできない先人の生活・文化など盛岡の成り立ちとあゆみを考える上で，現代に生きる私たちに多くの情報を与えてくれる貴重な財産であります。しかし，近年の各種開発により，遺跡やその周辺の環境は急激な変化を遂げつつあることも事実であります。

当市では，文化財保護の立場から国の補助を得て，今年度は落合遺跡をはじめとして，市内各地の個人住宅新築にともなう事前の緊急調査や県指定史跡大館町遺跡の保存・整備に向けた学術調査を実施しました。その結果，盛岡の歴史をひもとく上で大変貴重な成果をあげることができました。

本書は，その調査概報として今後の文化財の保護ならびに地域史の研究の一助として，市民をはじめ，学校や各関係機関に活用していただければ幸いと存じます。

最後になりましたが，調査を実施するにあたり，指導や助言をくださった文化庁記念物課ならびに岩手県教育委員会生涯学習文化課に対して，深く感謝を申し上げるとともに，御理解と御協力を頂いた地権者各位ならびに地元関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成１５年３月

盛岡市教育委員会

教育長　石　川　悌　司

例　言

1　本書は，平成14年度国庫補助事業「盛岡市内遺跡群」の発掘調査概報である。

2　本書は遺構および遺物の実測など多くの資料の呈示を意図して，編集執筆に花井　正香，神原 雄一郎，藤村 茂克，今野 公顕があたり，千田 和文，似内 啓邦，室野 秀文，津嶋 知弘，三浦 陽一，佐々木 亮二，佐々木 紀子，岩城 志麻が協議して編集した。尚，各編章の執筆者は文末に記した。

3　遺構平面位置は，日本測地系（旧測地系）を用い，平面直角座標Ｘ系を座標変換した調査座標で表示した。

落合遺跡　　調査座標原点　Ｘ－31,800・Ｙ＋30,000

大館町遺跡　調査座標原点　Ｘ－32,000・Ｙ＋24,500

繋Ⅳ遺跡　　調査座標原点　Ｘ－32,200・Ｙ＋24,000

上畑遺跡　　調査座標原点　Ｘ－40,500・Ｙ＋29,100

4　高さは標高値をそのまま使用している。

5　土層図は堆積のしかたを重視し，線の太さを使い分けた。土層注記は層理ごとに本分でふれ，個々の層位については割愛した。層相の観察にあたっては『新版標準土色帖』（1997小山正忠・竹原秀雄）を参考にした。

6　各遺跡における遺構記号は次のとおりである。

遺　構	記号	遺　構	記号	遺　構	記号
竪穴住居跡	ＲＡ	土　坑	ＲＤ	溝　跡	ＲＧ
建　物　跡	ＲＢ	竪　穴	ＲＥ	配石・集石	ＲＨ
柱　列　跡	ＲＣ	焼土遺構	ＲＦ		

7　使用した地図は建設省国土地理院発行の２万５千分の１「盛岡」「小岩井農場」「南昌山」「矢幅」「鶯宿」「雫石」の地形図である。

8　発掘調査にともなう出土遺物および諸記録は，盛岡市教育委員会で保管してある。

9　調査体制

［調査主体］盛岡市教育委員会

	教育長	石川 悌司
［調査総括］	文化課長	大崎 琢夫
	課長補佐	川村 昇子
	副主幹	高橋 清明
	副主幹兼文化財係長	千田 和文
［調　　査］	文化財主査	似内 啓邦，室野 秀文
	文化財主任	津嶋 知弘
	文化財主事	三浦 陽一，神原 雄一郎，藤村 茂克，今野 公顕，花井 正香，佐々木 亮二
	文化財調査員	佐々木 紀子，岩城 志麻
［事　　務］	事務嘱託	阿部 徳乃
	文化財調査員	野口 律子，仁杉 幸子，北田 公子，松川 光海

［発掘調査および整理作業］

阿部 祝世，阿部 良子，天沼 芳子，五十嵐 奈保美，泉山 紀代子，井上 勝子，岩根 陽子，内山 陽子，大宮 安子，大森 キヌ子，小川 真美，長内 理恵，加藤 高太郎，金沢 達也，嘉糠 和男，鎌田 久美子，川村 昭三，菊池 武，菊地 泰乃，久慈 玲子，工藤 繁子，工藤 淳子，工藤 則子，熊谷 あさ子，小松 愛子，斎藤 幸恵，斉藤 三郎，斎藤 静子，斎藤 正二，佐藤 公一，佐藤 孝子，佐藤 麻衣子，四戸 孝丸，白澤 和子，杉田 真樹子，鈴木 賢治，鈴木 ユウ子，駿河 チヨ，堰合 賢吉，高橋 ツヤ，高橋 弘子，竹花 栄子，立花 武良，館野 民子，谷藤 貴子，種子 幸三郎，玉井 真由美，栃澤 等，中島 京子，長沼 有紀子，中野 英行，沼田 浩美，野中 蕃，引木 宇吉，樋口 泰子，日野杉 節子，平野 淑子，深野 章，福田 香乃，藤田 友子，藤田 ひろみ，藤原 壮一，藤原 美知子，藤原 亮子，前島 多栄子，松田 昭夫，三浦 亮太，南幅 千代，南幅 洋子，武蔵 照子，村山 伊津子，女鹿 麗子，百岡 峰子，山下 摩由美

［地権者・調査協力］

天沼 安五郎，岩手県教育委員会，岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター，佐々木 巌，三浦 喜美男，村上 吉春，菱和産業株式会社，吉田 雅和

［御指導・御助言］

井上 雅孝（滝沢村教育委員会），日下 和寿（岩手県教育委員会），工藤 雅樹（福島大学），高瀬 克範（東京都立大学），高橋 憲太郎（宮古市教育委員会），竹下 将男（宮古市教育委員会），武田 良夫（日本考古学協会会員）

（敬称略）

10　遺物の表現について

（1）土器・・・出土土器の土器区分は，縄文土器・土師器・あかやき土器・須恵器に大別した。

a　縄文時代早期・前期初頭に属する土器の実測図・拓本は１／２スケールとし，ほかは１／３スケールとした。

b　挿図の土器配列については，モチーフおよび施文技法でまとめた。

c　縄文時代の土器で隆線・沈線の表現は上端・下端の実線・破線で表し，陰影は表現していない。

d　土師器の黒色処理をされたものはスクリーントーンで表現した。

（2）石器

a　剥片石器は２／３スケールとし、礫石器は１／３スケールとした。ただし長大な礫石器は１／６スケールとした。

b　石器の展開順序は、基本的には左に表面（本文では背面とする），中央に右側縁，右に裏面（本文中では腹面とする―主要剥離面）を並べ，必要に応じて側縁および縦断面下に横断面を付け加えた。

c　挿図の配列は出土した層位順に配列し，さらに器種ごとにまとめた。

d　剥片石器の摩滅痕は網目スクリーントーンで示し，礫石器の自然面はドットで示した。

（3）土製品・石製品

a　いずれも２／３スケールとした。

b　挿図の配列は出土した層位順とし，さらに器種ごとにまとめた。

（4）挿図中の記号番号は遺物の出土地点および出土層位を表している。

（例）　ＲＡ８７１　Ｃ層　　→ＲＡ８７１竪穴住居跡内埋土Ｃ層より出土

（例）　Ｈ７－Ｔ５　Ⅳ層

↓　↓　↓

※１　※２　※３

※１　遺跡全体を５０ｍメッシュで区切り，大グリッドを設定し，北西から西－東をA・B・C・・・のアルファベット，北－南は１・２・３・・・の数字を付し，グリッドの呼称名はその組み合わせとした。

※２　さらに５０ｍメッシュを２ｍメッシュに分割し，小グリッドとした。北西から西－東をＡ～Ｙのアルファベット，北－南を１～２５の数字を付し，グリッドの呼称名はその組み合わせとした。

※３　遺物の出土層位を表している。

11　遺構の表現について

遺構の挿図中，説明する当該遺構については，実線で表現した。なお，説明遺構と切り合った遺構については二点鎖点で表現した。

12　遺跡の範囲については推定である。

目　次

序言
例言
目次
挿図目次・図版目次・表目次・写真図版目次

Ⅰ　平成14年度発掘調査の概要・・・・・・・1
Ⅱ　落合遺跡（第14・15次調査）・・・・・・・5
Ⅲ　大館町遺跡（第75次調査）・・・・・・・・39
Ⅳ　繋Ⅳ遺跡（第24次調査）・・・・・・・・・69
Ⅴ　上畑遺跡（第５次調査）・・・・・・・・・78

写真図版
報告書抄録

挿図目次

Ⅰ．平成14年度発掘調査の概要
第１図　地形分類と周辺の遺跡分布・・・・・2
Ⅱ．落合遺跡（第14・15次調査）
第２図　落合遺跡の位置（1:50,000）・・・・5
第３図　落合遺跡全体図（1:2,000）・・・・・7
第４図　落合遺跡第14・15次調査区全体図・・11
第５図　RD206・207・208・209土坑,
埋設土器1・2・・・・・・・・・・・・14
第６図　RD207・209土坑出土遺物,
埋設土器1・2,・・・・・・・・・・・・15
第７図　RB512掘立柱建物跡，RG519溝跡・・・17
第８図　RE501竪穴建物跡，RD510土坑・・・・19
第９図　RD511土坑・・・・・・・・・・・・・20
第10図　ピット土層断面・・・・・・・・・・・20
第11図　遺物包含層出土土器（1）・・・・・22
第12図　遺物包含層出土土器（2）・・・・・23
第13図　遺物包含層出土土器（3）・・・・・24
第14図　遺物包含層出土土器（4）・・・・・25
第15図　遺物包含層出土土器（5）・・・・・26
第16図　遺物包含層出土土器（6）・・・・・27
第17図　遺物包含層出土石器（1）・・・・・29
第18図　遺物包含層出土石器（2）・・・・・30
第19図　遺物包含層出土石器（3）・・・・・31
第20図　遺物包含層出土石器（4）・・・・・32
第21図　遺物包含層出土土製品（1）・・・・33
第22図　遺物包含層出土土製品（2）・・・・34
第23図　遺物包含層出土石製品（1）・・・・35
第24図　遺物包含層出土石製品（2）・・・・36
第25図　遺物包含層出土石製品（3）・・・・37
第26図　遺物包含層出土中世遺物・・・・・・38
Ⅲ．大館町遺跡（第75次調査）
第27図　大館町遺跡の位置（1：50,000）・・・39
第28図　大館遺跡群調査全体図（1：1,000）・・41
第29図　大館町遺跡第75次調査区全体図・・・43
第30図　RE2232竪穴跡・・・・・・・・・・・46
第31図　RE2232竪穴跡出土土器（1）・・・・48
第32図　RE2232竪穴跡出土土器（2）・・・・49
第33図　RE2232竪穴跡出土石器（1）・・・・50
第34図　RE2232竪穴跡出土石器（2）・・・・51
第35図　RE2232竪穴跡出土石器（3）・・・・52
第36図　RE2232竪穴跡出土石器（4）・・・・53
第37図　RE2232竪穴跡出土石器（5）・・・・54
第38図　RE2232竪穴跡出土土製品・・・・・・55
第39図　RD6638土坑・・・・・・・・・・・・56
第40図　RD6638土坑出土遺物・・・・・・・・57
第41図　RG505溝跡・・・・・・・・・・・・58
第42図　遺物包含層出土土器（1）・・・・・60
第43図　遺物包含層出土土器（2）・・・・・61

第44図　遺物包含層出土土器（3）・・・・・62
第45図　遺物包含層出土土器（4）・・・・・63
第46図　遺物包含層出土土器（5）・・・・・64
第47図　遺物包含層出土土器（6）・・・・・65
第48図　遺物包含層出土土器（7）・・・・・66
第49図　遺物包含層出土土製品・・・・・・・67
Ⅳ．繋Ⅳ遺跡（第24次調査）
第50図　繋遺跡の位置（1：50,000）・・・・・69
第51図　繋遺跡全体図（1：2,000）・・・・・71
第52図　繋Ⅳ遺跡第24次調査区全体図・・・・73
第53図　遺物包含層出土土器・・・・・・・・75
第54図　遺物包含層出土石器・・・・・・・・76
Ⅴ．上畑遺跡（第５次調査）
第55図　上畑遺跡の位置（1：50,000）・・・・78
第56図　上畑遺跡全体図（1：2,000）・・・・80
第57図　上畑遺跡第５次調査全体図（東区）・・81
第58図　RA042竪穴住居跡（1）・・・・・・・82
第59図　RA042竪穴住居跡（2）・・・・・・・83
第60図　RA042竪穴住居跡出土遺物・・・・・85
第61図　RA043・044竪穴住居跡・・・・・・・87
第62図　RA043竪穴住居跡出土遺物・・・・・88
第63図　RA044竪穴住居跡出土遺物・・・・・88
第64図　RA046・047竪穴住居跡・・・・・・・89
第65図　RA046竪穴住居跡出土遺物・・・・・89
第66図　RD003・004土坑，出土遺物・・・・・90
第67図　RD005土坑，RG007溝跡，出土遺物・・92
第68図　西区全体図，RA045竪穴住居跡，
　　ピット・・・・・・・・・・・・・・・93
第69図　RA045竪穴住居跡出土遺物・・・・・94
第70図　西区ピット，遺構外出土遺物・・・・94

表　目　次

第１表　平成14年度盛岡市内遺跡群
　　発掘調査遺跡一覧・・・・・・・・・・1
第２表　落合遺跡調査成果・・・・・・・・・9
第３表　平成14年度繋遺跡調査成果・・・・・70
第４表　上畑遺跡調査成果・・・・・・・・・79

写真図版目次

第１図版　落合遺跡第15次調査区全景，大館町遺跡第75次調査区全景
第２図版　繋Ⅳ遺跡第24次調査区全景，上畑遺跡第５次調査区（東区）全景

Ⅰ．平成14年度発掘調査の概要

1．平成14年度事業の概要

市内遺跡群　盛岡市内には，現在517箇所の遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されている。近年では，周知の遺跡内における大規模公共事業（区画整理，道路など），各種民間開発，個人住宅建築等の土地開発等にともなう事前の発掘調査や試掘調査を毎年100件前後実施しており，今年度は発掘調査・試掘調査（公共事業・各種民間開発・個人住宅等）をあわせて70件実施した。

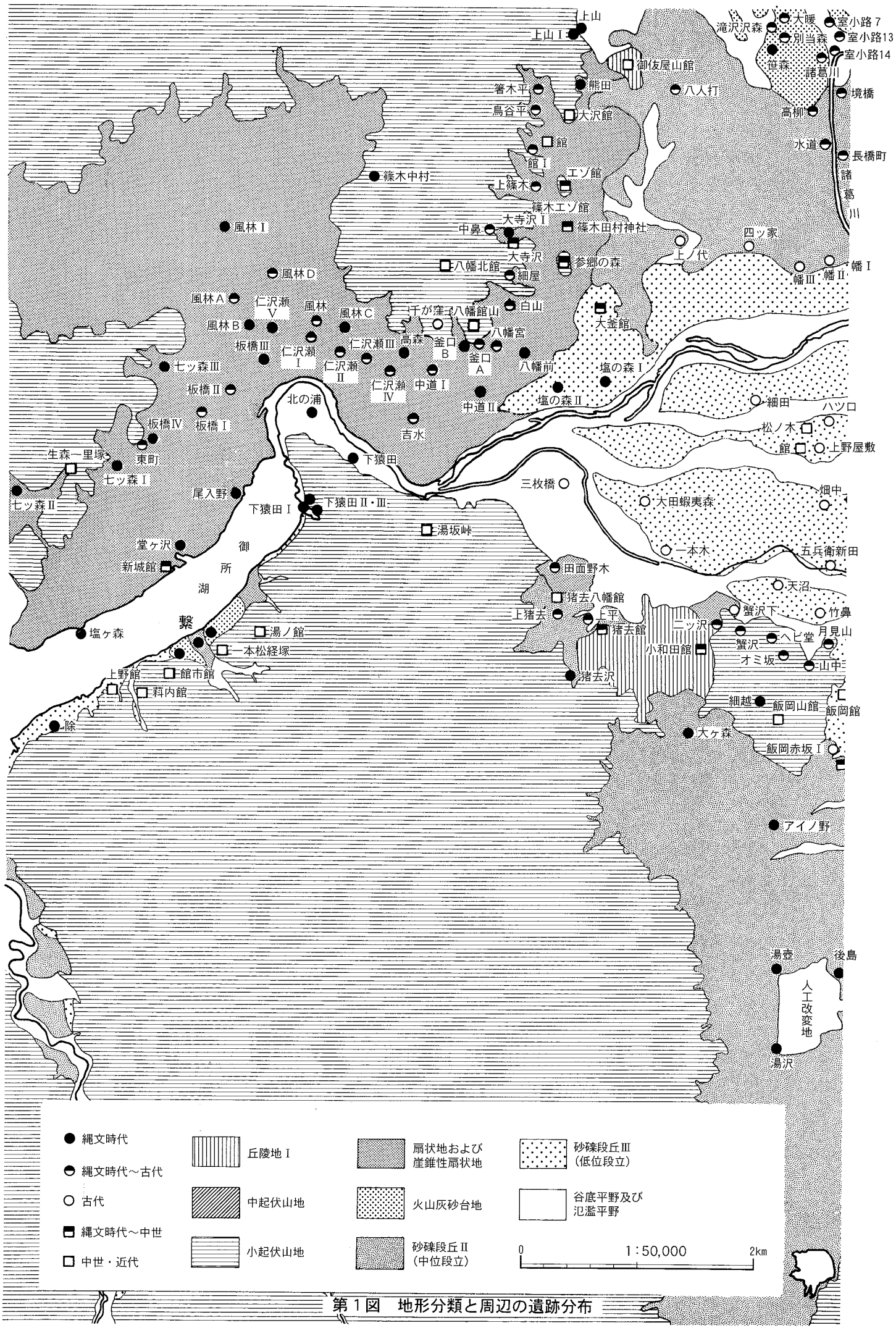
発掘調査　平成14年度の国庫補助事業（盛岡市内遺跡群発掘調査事業）で実施した発掘調査は，落合遺跡第14・15次調査，大館町遺跡第75次調査，繋Ⅳ遺跡第24次調査，上畑遺跡第５次調査，志波城跡第93次調査の５件である。このうち，個人住宅建築にともなう事前調査は，落合遺跡，繋Ⅳ遺跡，上畑遺跡の３件を実施した。

大館町遺跡は盛岡周辺部における縄文時代中期の拠点集落遺跡として，平成12年11月に県指定史跡に指定され，現在，集落の規模や内容を確認する範囲確認調査を継続して実施している。今年度の第75次調査では，遺跡の集落東縁部の状況を確認するため，遺跡の北東部を調査した。

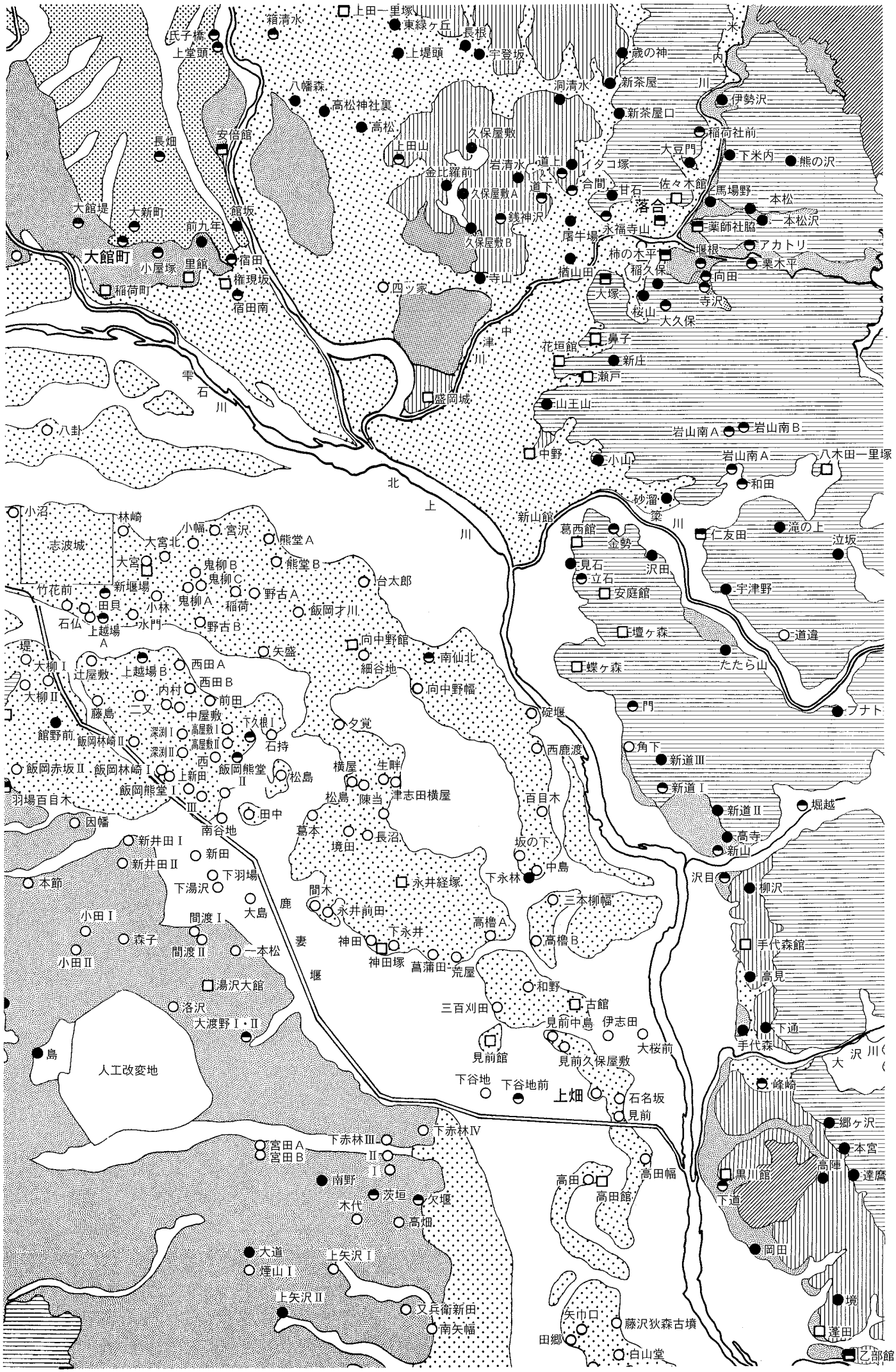
国指定史跡志波城跡の第93次調査は，史跡現状変更（個人住宅建て替え）にともなう事前調査で，調査区は政庁の北西部に位置する。調査を実施した結果，調査区北寄りに東西に走る平安時代以降の溝跡１条を検出した。その報告については，本書では割愛し，平成14年度刊行予定の志波城跡平成11～14年度調査報告書にあわせて掲載するものとした。

遺　跡　名	所　在　地	調 査 期 間	調査面積	調査原因
落合遺跡（第14･15次）	盛岡市下米内一丁目142-2，6	平成14年４月22日～５月27日	270.9㎡	個人住宅建築
大館町遺跡（第75次）	盛岡市大新町207-2，209-3の一部	平成14年５月８日～12月20日	477.9㎡	範囲確認学術調査
繋Ⅳ遺跡（第24次）	盛岡市繋字舘市79-50	平成14年７月30日～８月９日	158.5㎡	個人住宅建築
上畑遺跡（第５次）	盛岡市西見前11地割65-4，65-6	平成14年５月16日，５月27日～６月17日	54.0㎡	個人住宅建築
志波城跡（第93次）	盛岡市中太田方八丁86番2	平成14年10月７日～10月11日	168.5㎡	史跡現状変更（個人住宅建築）

第１表　平成14年度　盛岡市内遺跡群発掘調査事業調査遺跡一覧



第１図　地形分類と周辺の遺跡分布


上田一里塚
東緑ヶ丘
長根
箱清水
氏子橋
上堂頭
上堤頭
宇登坂
歳の神
米内川
八幡森
高松神社叟
高松
洞清水
新茶屋
伊勢沢
新茶屋口
稲荷社前
長畑
安倍館
上田山
久保屋敷
大豆門
下米内
熊の沢
金比羅前
岩清水
道上
イタコ塚
道下
合間
甘石
佐々木館
馬場野
落合
一本松
久保屋敷A
銭神沢
大館堤
大新町
館坂
前九年
久保屋敷B
屠牛場
永福寺山
薬師社脇
一本松沢
大館町
小屋塚
里館
宿田
柿の木平
堰根
アカトリ
栗木平
稲荷町
権現坂
寺山
稲久保
向田
四ツ家
宿田南
大塚
桜山
寺沢
大久保
鼻子
花垣館
新庄
瀬戸
雫石川
盛岡城
山王山
八卦
岩山南A
岩山南B
中野
小山
岩山南A
八木田一里塚
和田
北上川
砂溜
簗川
新山館
小沼
林崎
志波城
小幅
宮沢
大宮北
熊堂A
葛西館
金勢
仁友田
滝の上
泣坂
大宮
鬼柳B
熊堂B
見石
沢田
竹花前
新堰場
鬼柳C
立石
安庭館
宇津野
田貝
小林
鬼柳A
稲荷
野古A
台太郎
石仏
上越場A
水門
野古B
飯岡才川
壇ヶ森
道違
堤
矢盛
向中野館
南仙北
大柳I
辻屋敷
上越場B
西田A
細谷地
蝶ヶ森
たたら山
大柳II
西田B
向中野幅
内村
前田
藤島
二又
中屋敷
門
フナト
館野前
飯岡林崎II
深渕I
高屋敷I
下久根I
石持
夕覚
碇堰
深渕II
高屋敷II
西
飯岡熊堂II
西鹿渡
角下
飯岡赤坂II
飯岡林崎I
上新田
松島
横屋
生畔
新道III
飯岡熊堂I
陳当
津志田横屋
新道I
羽場百目木
III
田中
百目木
堀越
因幡
南谷地
葛本
長沼
新道II
新井田I
境田
坂の下
高寺
新田
新山
新井田II
下羽場
中島
本節
下湯沢
永井経塚
下永林
沢目
柳沢
間木
三本柳幅
大島
永井前田
鹿
小田I
間渡I
高櫓A
下永井
高櫓B
森子
神田
手代森館
間渡II
一本松
小田II
神田塚
菖蒲田
荒屋
高見
湯沢大館
和野
洛沢
三百刈田
古館
大渡野I・II
見前中島
伊志田
下通
島
見前館
大桜前
手代森
見前久保屋敷
人工改変地
大沢川
下谷地
下谷地前
上畑
峰崎
石名坂
見前
郷ヶ沢
下赤林IV
下赤林III
宮田A
宮田B
II
I
本宮
高田幅
高陣
黒川館
達磨
南野
高田
高田館
下道
茨垣
欠堰
木代
高畑
岡田
大道
上矢沢I
煙山I
上矢沢II
境
又兵衛新田
矢巾口
藤沢狄森古墳
南矢幅
田郷
蓬田
白山堂
乙部館

2．盛岡市の地形・地質

北上山地　盛岡市は地質構造上，北上川東方に発達する先第三紀系の基盤岩からなる北上山地，西方の新第三紀系基盤岩からなる奥羽山脈に挟まれた北上平野北部に位置している。盛岡市東部は，北上山地の主要な境界である早池峰構造帯の西縁部にあり，北部北上山地と南部北上山地の双方を含む地域となっている。これらの山地縁辺には中津川・簗川・乙部川などの北上川水系の河川やその支流などにより浸食された丘陵地や中位・低位の段丘が発達する。

遺跡は主に，中津川・簗川・乙部川流域で多く確認されている。盛岡市北東部を流れる中津川は最大支流である米内川と合流して水量を増し，市街地を抜け合流点より下流約２㎞で北上川と合流する。遺跡は米内川との合流点付近に発達する中位・低位段丘面に多く立地しており，代表的な遺跡として本概報に掲載した縄文時代後～晩期，中世の落合遺跡，縄文時代中期の集落遺跡である柿ノ木平遺跡，縄文時代早期・平安時代の集落や古墳時代の土壙墓が発見された薬師社脇遺跡，９～10世紀の古代集落をはじめ，12・13世紀の村落が確認された堰根遺跡などがある。

簗川は盛岡市東部，北上山地の分水嶺となる桐ノ木沢山（1,209m）北西支陵より流れ，最大支流である根田茂川と合流して水量を増し，盛岡市安庭付近で北上川と合流する。簗川は急流で知られ，その流れは丘陵地や高位段丘面を開析して流域沿いに中・小規模な低位段丘面を形成する。これらの低位段丘面上には川目Ａ遺跡，沢田遺跡など縄文時代後期以降の遺跡が立地する。また，簗川を望む丘陵・高位段丘面には縄文時代早期以降の遺跡が多数立地しており，縄文時代中期の集落遺跡である川目Ｃ遺跡・小山遺跡，中世城館である仁反田遺跡が立地する。

奥羽山脈　盛岡市西方には沼森山（581m）を中心とする沼森山山地・篠木山地が連なっており，さらに西方には岩手山（2,038m）をはじめとする岩手火山群が連なる。岩手山の東麓，滝沢村大石渡付近より大石渡岩屑なだれ堆積物を基盤とした滝沢台地が盛岡市北部にかけて発達しており，台地上には県指定史跡大館町遺跡をはじめ大新町遺跡など多数の遺跡が立地する。

沼森山山地・篠木山地の南端は烏泊山（389m）で，雫石川を挟み烏泊山の対岸には南昌山（848m），赤林山（856m），箱ヶ森（865m）を含む箱ヶ森山地が南北に連なる。箱ヶ森山地の西麓では若干の低位段丘や扇状地が雫石川沿いに広がり，縄文時代中期の繋Ｖ遺跡などが立地する。

雫石川は奥羽山脈より東流し雫石盆地を形成するが，前記した烏泊山と箱ヶ森に挟まれた北ノ浦付近で急激に流路が狭められる。北ノ浦以東は沖積地が広がり，その地形は北上川流域に発達する北上平野とつながる。雫石川は盛岡駅南方約500m付近で北上川に合流し，同地点でさらに前述した中津川が合流する。雫石川が北上川と合流するまでの南岸では，雫石川の流路の転換によって形成された幾筋もの沖積段丘が発達し，段丘上からは主に古代（７～10世紀）から江戸時代にかけての遺跡が多数確認されている。太田蝦夷森古墳群や国指定史跡志波城跡をはじめ古代の遺跡の多くは雫石川南岸に発達する沖積段丘上に立地し，上畑遺跡は合流点より下流約６㎞付近の北上川西岸に発達する沖積段丘上に立地する。

※引用・参考文献　土井宣夫2000.3『岩手山の地質－火山灰が語る噴火史－』滝沢村教育委員会

Ⅱ．落合遺跡　（第14・15次調査）

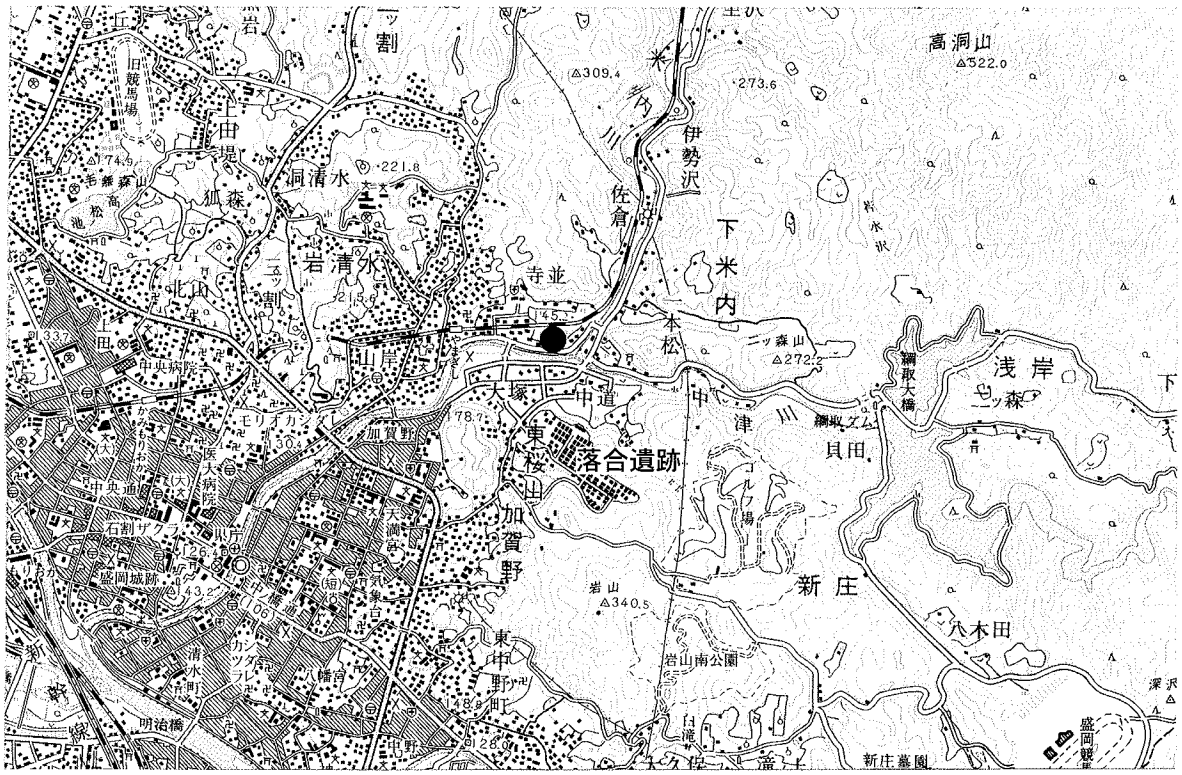
１．遺跡の概要

（１）地理的環境

位　　置（第２図）　落合遺跡は，盛岡市街地より北東約2.0kmに位置し，中津川とその支流である米内川との合流点（落ち合い）にあたる盛岡市下米内一丁目・二丁目地内に所在する。

地　　形（第３図）　盛岡市東部は地質構造上，北上山地の主要な境界となる早池峰構造体の西縁部にあたり，早池峰構造体に属する山地は，高森山（626m）を中心とする高森山山地と，朝島山（607m）を中心とする朝島山山地の中起伏山地，さらに西に続く大日向山山地，岩山（341m）や大森山（381m）を含む建石山山地などの小起伏山地および四十四田丘陵で構成される。

遺跡は大日向山山地南縁部，中津川と米内川の合流点右岸に立地しており，その範囲は南北350m，東西400mほどと推定される。この付近においては両河川の流路が幾度となく移動したため，形成されていた沖積段丘は削られ，中州状に残存した微高地上に遺跡は立地する。遺跡推定範囲の地形を区分すると，中央部を米内川の大きな旧河道が東西に走っていることから，遺跡内は旧河道の北域と南域及び北側丘陵の南裾域の３区域に大別は可能であろう。



第２図　落合遺跡の位置（1:50,000）

（2）歴史的環境

縄文時代　中津川と米内川の合流点付近には多くの遺跡が立地している。縄文時代早期では，中津川右岸の薬師山南裾部に立地する薬師社脇遺跡から寺ノ沢式や大寺式の貝殻文系土器群が出土している。これは対岸に立地する堰根遺跡にも散見される。中期では，合流点を望む左岸中位段丘上の柿ノ木平遺跡に大木8ｂ～10式期に至る集落跡が確認されている。後期～晩期になると，柿ノ木平遺跡から土坑群，左岸低位段丘上の大塚遺跡からは大洞Ｃ2～Ａ式期の小規模集落跡が確認されている。

弥生～古墳時代　弥生時代では，岩山北西斜面に形成された小規模な扇状地上に立地する向田遺跡から前期（砂沢式期）の竪穴住居跡や土坑が確認されている。また，これに隣接する堰根遺跡から終末期（赤穴式期）の竪穴住居跡が確認されている。後続する古墳時代にかけて，大日向山山地南西端の丘陵頂部に立地する永福寺山遺跡から土坑墓群が確認されており，遺構及び周辺トレンチから続縄文土器（後北C_2-Ｄ式期），土師器（塩釜式期），鉄製品（鎌・刀子），勾玉・管玉等が出土している。また，薬師社脇遺跡からは５世紀中葉～後葉の土坑墓群が確認され，土師器（南小泉式期），鉄製品（斧・鏃・鎌），ガラス小玉・管玉・臼玉等の副葬品と考えられる遺物が出土している。

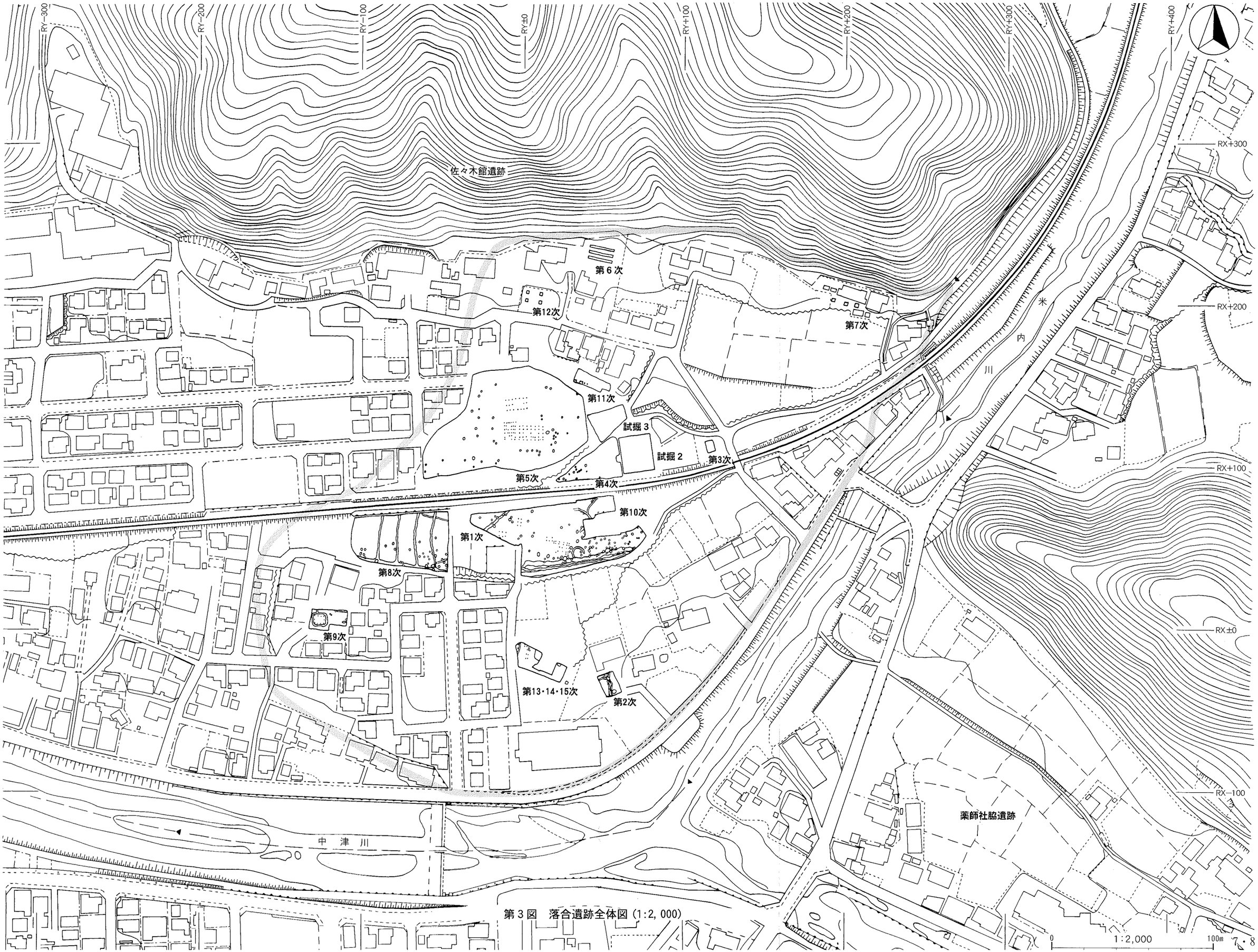
古　　代　奈良時代の遺構・遺物は中津川左岸の前野遺跡からのみ確認されている。その後，９世紀中頃～10世紀代には，前野遺跡・堰根遺跡・薬師社脇遺跡に集落が形成されるようになる。確認された竪穴住居跡は石と粘土の組み合わせによりかまどを構築しており，この形態は岩手県北部に確認例が多い。盛岡市内においては，北上川東岸部に多く見られる。

中・近世　中世においては，落合遺跡北側丘陵上に比高差約60mの佐々木館跡が存在する。年代は未調査のため不詳である。また，堰根遺跡・前野遺跡からは12世紀後半以降の竪穴建物跡や掘立柱建物跡等が確認されており，村落が形成されていたことがうかがわれる。なお，16世紀代には堰根遺跡西接の上村屋敷遺跡から，数条の大溝により囲郭された小規模城館跡が確認されている。同遺跡は江戸時代以降の遺構も多数確認されており，柿ノ木平遺跡を含めた区域で２～３戸の方形環濠屋敷が形成されていたと推定される。

2．調査の概要

（1）これまでの調査

落合遺跡の発掘調査は，1986年以降これまでに本調査11件，試掘調査７件が実施されている。旧河道の北域・南域において，縄文時代後期～晩期の土坑群が確認されているが（第１，４，５，８次），特に南域では円形あるいは同心円状に三重に円礫を並べた配石遺構，これに伴う土坑墓も確認され（第１次），その周辺から土偶・鐸型土製品・腕輪型土製品・耳栓など呪術的・祭祀的な遺物が出土している（第１，10次）。また，同時期の遺物包含層も広く形成されていることが確認されている（第１，10，13～15次）。



第3図　落合遺跡全体図（1:2, 000）

中世においては，遺跡中央を東から西へ12世紀代の開削と推定される大溝跡が確認されており（第１，８次），これは現在においても使用されている用水堰と半ば重複している。大溝跡の北側に身舎桁行３間×梁間２間の四面庇建物跡（第１次）や身舎桁行７間×梁間２間の二面庇建物跡（第５次）をそれぞれ主屋とするように配置された掘立柱建物跡群が確認されている。

大溝の南側でも，方形周溝を伴う桁行３間×梁間２間の掘立柱建物跡が確認されている（第９次）。これらの遺構からは，12～14世紀代のかわらけ，常滑産や須恵器系の甕あるいは壺，中国産青磁碗等の破片が出土している。

遺跡北側丘陵の南裾域では縄文後期以降，各時代の遺物は散見されるものの，遺構は確認されていない（第６，７，12次）。

次数	所在地	調査原因	面　積	期　間	検出遺構・遺物
試１	下米内字落合37-1	宅地造成	43㎡	86.11.08	縄文時代後～晩期土坑　ほか
試２	下米内字落合27-5	個人住宅建築	—	—	遺構・遺物なし
試３	下米内字落合29-2	個人住宅建築	30㎡	87.04.17 87.04.21	遺構なし 遺物僅少
1	下米内字落合37-1	宅地造成	2,638㎡	87.06.22 87.11.14	縄文時代後～晩期配石遺構，土坑 中世大溝跡，掘立柱建物跡　ほか
2	下米内字落合62	倉庫建築	57㎡	87.09.02 87.09.22	縄文時代後期配石遺構，土坑 平安時代溝跡
3	下米内字落合27-6	個人住宅建築	20㎡	90.09.17	遺構・遺物なし
4	下米内字落合28-1	宅地造成	552㎡	91.04.10 91.05.01	縄文時代晩期土坑　ほか
5	下米内二丁目29-1・232-1・233・234	宅地造成	6,057㎡	96.06.03 96.07.05	縄文時代後～晩期土坑 中世掘立柱建物跡　ほか
試６	下米内二丁目239	個人住宅建築	72㎡	96.09.06	遺構・遺物なし
試７	下米内二丁目266-3	個人住宅建築	12㎡	96.09.19	遺構・遺物なし
8	下米内一丁目135-6	宅地造成	2,193㎡	97.07.14 97.10.04	縄文時代後期土坑 中～近世溝跡　ほか
9	下米内一丁目150	個人住宅建築	245㎡	97.07.16 97.08.11	中世方形周溝，掘立柱建物跡　ほか
10	下米内一丁目128-7・137-4	共同住宅建築	238㎡	99.08.04 99.09.17	縄文時代後期土坑，遺物包含層 中世溝跡　ほか
11	下米内二丁目30-1	共同住宅建築	174㎡	99.08.09 99.08.10	中～近世柱穴
試12	下米内二丁目238-3	個人住宅建築	16㎡	01.10.17	遺構なし，遺物僅少
試13	下米内一丁目142-6	個人住宅建築	105㎡	01.11.05 01.11.07	縄文時代後～晩期遺物包含層　ほか
14	下米内一丁目142-6	個人住宅建築	120㎡	02.04.22 02.05.27	縄文時代後～晩期遺物包含層 中世土坑　ほか
15	下米内一丁目142-2	個人住宅建築	151㎡	02.04.22 02.05.27	縄文時代後～晩期土坑，遺物包含層 中世掘立柱建物跡，竪穴建物跡　ほか

第２表　落合遺跡調査成果

（２）平成14年度の調査

位　　置　第14次（東調査区）・15次調査（西調査区）は，下米内一丁目142-6に所在し，地形区分上において旧河道の南域に位置する。調査は２件の個人住宅建築に伴う事前調査であり，平成14年４月22日から５月27日，面積は271.0㎡において実施した。調査区内の標高値は143.5～143.0mをはかる。河岸段丘の縁辺部にあたり，北東から南西にかけて緩やかに傾斜している。

層　　位　確認された各層の堆積状況は，地形に沿うよう北東から南西に堆積している。各層とも冠水による水性堆積層であり，第Ⅲ・Ⅳ層は特にその状況が顕著に見られる。調査区内で確認された基本層位は次の５層に大別できる。

Ⅰ層―表土および耕作土

Ⅱ層―黒褐色土主体層（古代・中世以降の遺物が含まれる）

Ⅲ層―暗褐色土・褐色シルトの互層（縄文時代後期末葉～晩期中葉の遺物が出土する）

Ⅳ層―黒褐色土・褐色シルトの互層（縄文時代後期末葉～晩期中葉の遺物が多量に出土する）

Ⅴ層―砂礫層（遺物の出土なし）

検出遺構（第４図）　縄文時代の遺構は，第Ⅲ層の各層上面より後期～晩期の土坑10基，埋設土器３基を検出している。古代以降においては，第Ⅱ層上面あるいはⅡ層直下より掘立柱建物跡１棟，竪穴建物跡１棟，土坑２基，溝跡１条，ピット36口を検出した。また，遺物包含層も確認され，特に第Ⅳ層からは縄文時代後期末葉～晩期中葉にかけての遺物が多量に出土した。なお，住宅基礎等に係る掘削が及ばない深度の遺構等については確認調査にとどめ，砂で被覆し地下保存している。

３．調査成果

（１）縄文時代の遺構と遺物

ＲＤ２０６土坑（第５図）

位　　置　西調査区北部　　**平 面 形**　円形　　**重複関係**　なし

規　　模　上端1.08m・下端0.96m・深さ0.46～0.54m　　**検 出 面**　Ⅲｅ層上面

壁の状態　直立ぎみに外傾して立ち上がる。

底の状態　ほぼ平坦であるが，西壁際に小ピット状のくぼみがある。

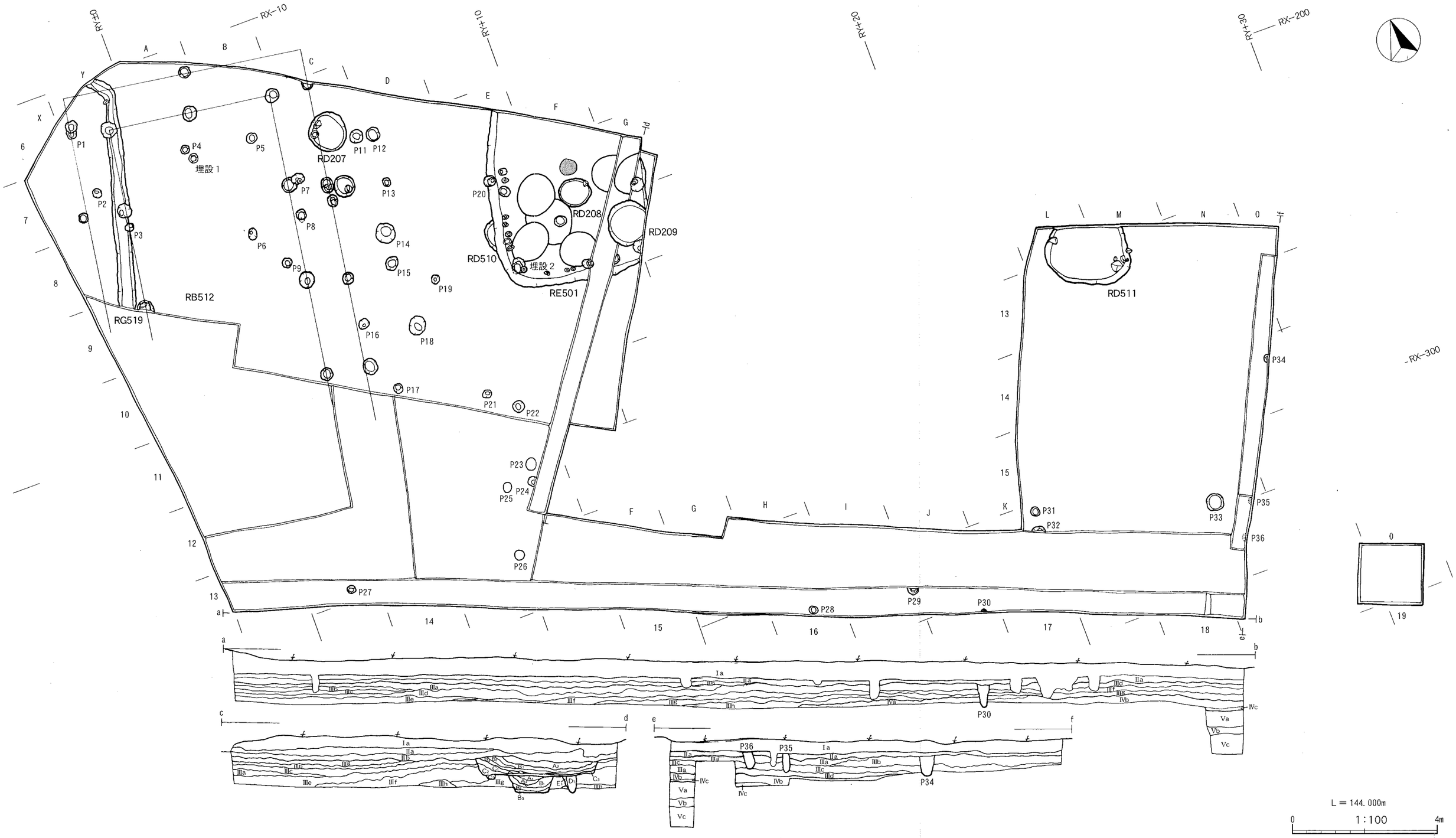
埋　　土　自然堆積によるものである。大きくＡ・Ｂ・Ｃ層に大別され，さらにＡ層は２層，Ｂ層は３層に細別される。

Ａ層―黒褐色土を主体に褐色シルトを粒状に含む。A1・A2層ともに炭化物が少量含まれ，A2層は褐色シルトの割合が若干少ない。

Ｂ層―黒褐色土を主体に褐色シルトを粒状に少量含む。下層ほど褐色シルトの割合が少なくなる。

Ｃ層―暗褐色土を主体に褐色シルトを塊状に多量に含む。他の層に比べしまりがない。

遺　　物　図示していないが，後期末葉～晩期前葉の深鉢・注口等の土器片等が出土している。



第４図　落合遺跡第14・15次調査区全体図

ＲＤ２０７土坑（第５図）

位　　置　西調査区北部　**平 面 形**　円形　**重複関係**　なし

規　　模　上端0.59m・下端0.45m・深さ0.24～0.37m　**検 出 面**　Ⅲｅ層上面

壁の状態　外傾して立ち上がる。

底の状態　南東壁際が一段深くピット状に掘り窪められ，深鉢形土器が正立の状態で埋設されている。

埋　　土　人為堆積によるものである。Ａ層は３層に細別される。

Ａ層―黒褐色土を主体に褐色シルトを含む。A1・A3層は塊状に，A2層は粒状に褐色シルトを含む。下層ほど褐色シルトの割合が多い。

遺　　物（第６図）　１は口縁部がやや内湾する深鉢である。口縁部から底部にかけて，２種類の原体を交互に使用して横位の羽状縄文（ＬＲ→ＲＬ）が施される。

ＲＤ２０８土坑（第５図）

位　　置　西調査区北東部　**平 面 形**　円形　**重複関係**　ＲＥ501に切られる。

規　　模　上端0.76～0.87m・下端0.68～0.76m・深さ0.06m

掘 込 面　削平　**検 出 面**　Ⅲｇ層

壁の状態　緩やかに外傾して立ち上がる。

底の状態　平坦

埋　　土　残存部が少ないため，堆積状況は不明である。褐色シルトを主体に黒褐色土を塊状に含む。拳大の川原石が含まれる。

遺　　物　なし

ＲＤ２０９土坑（第５図）

位　　置　西調査区北東部　**平 面 形**　円形　**重複関係**　ＲＥ501に切られる。

規　　模　上端1.25m・下端1.03m・深さ0.45m

掘 込 面　削平　**検 出 面**　Ⅲｇ層

壁の状態　直立ぎみに外傾して立ち上がる。

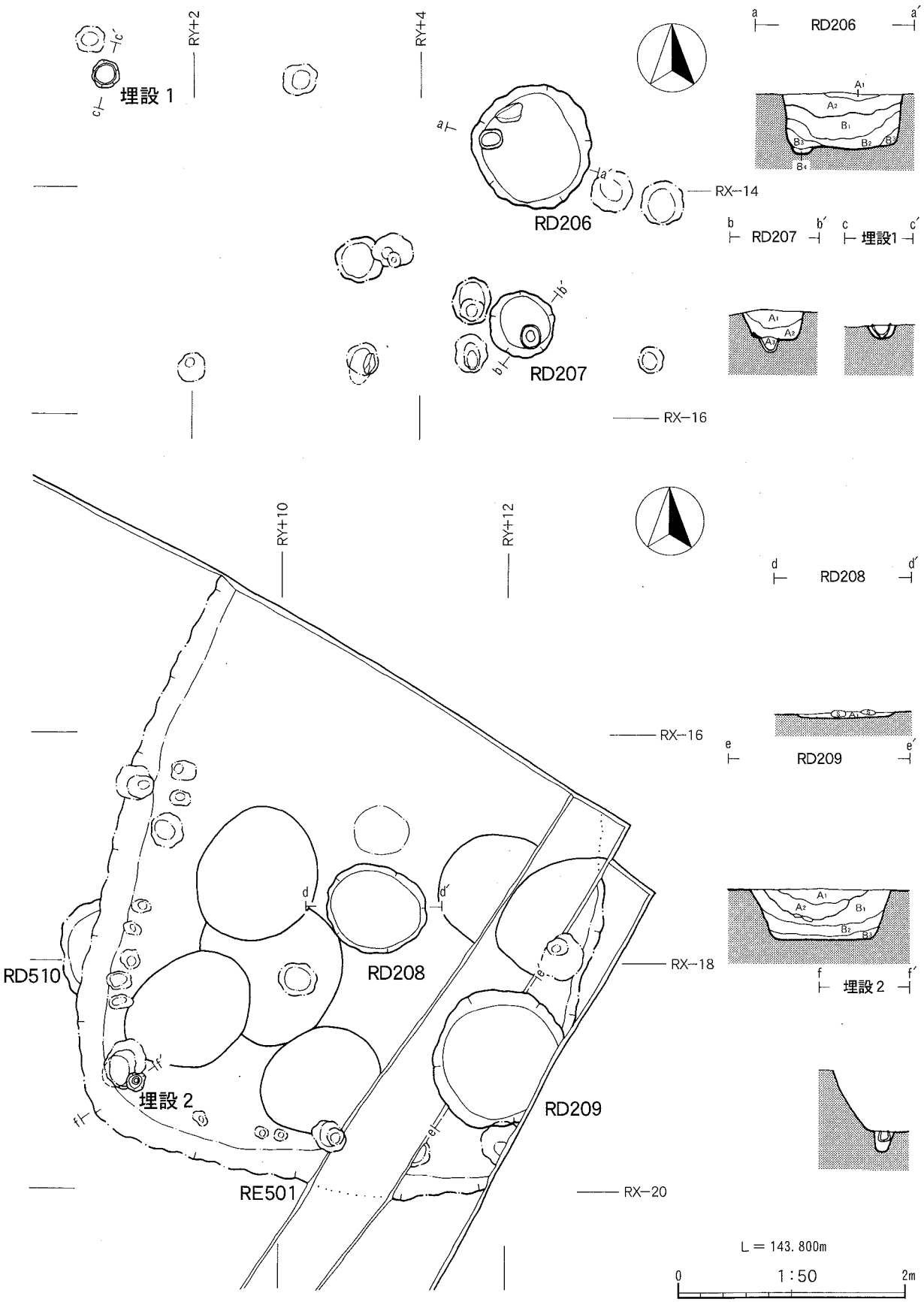
底の状態　平坦

埋　　土　人為堆積によるものである。大きくＡ・Ｂ層に大別され，さらにＡ層は２層，Ｂ層は３層に細別される。

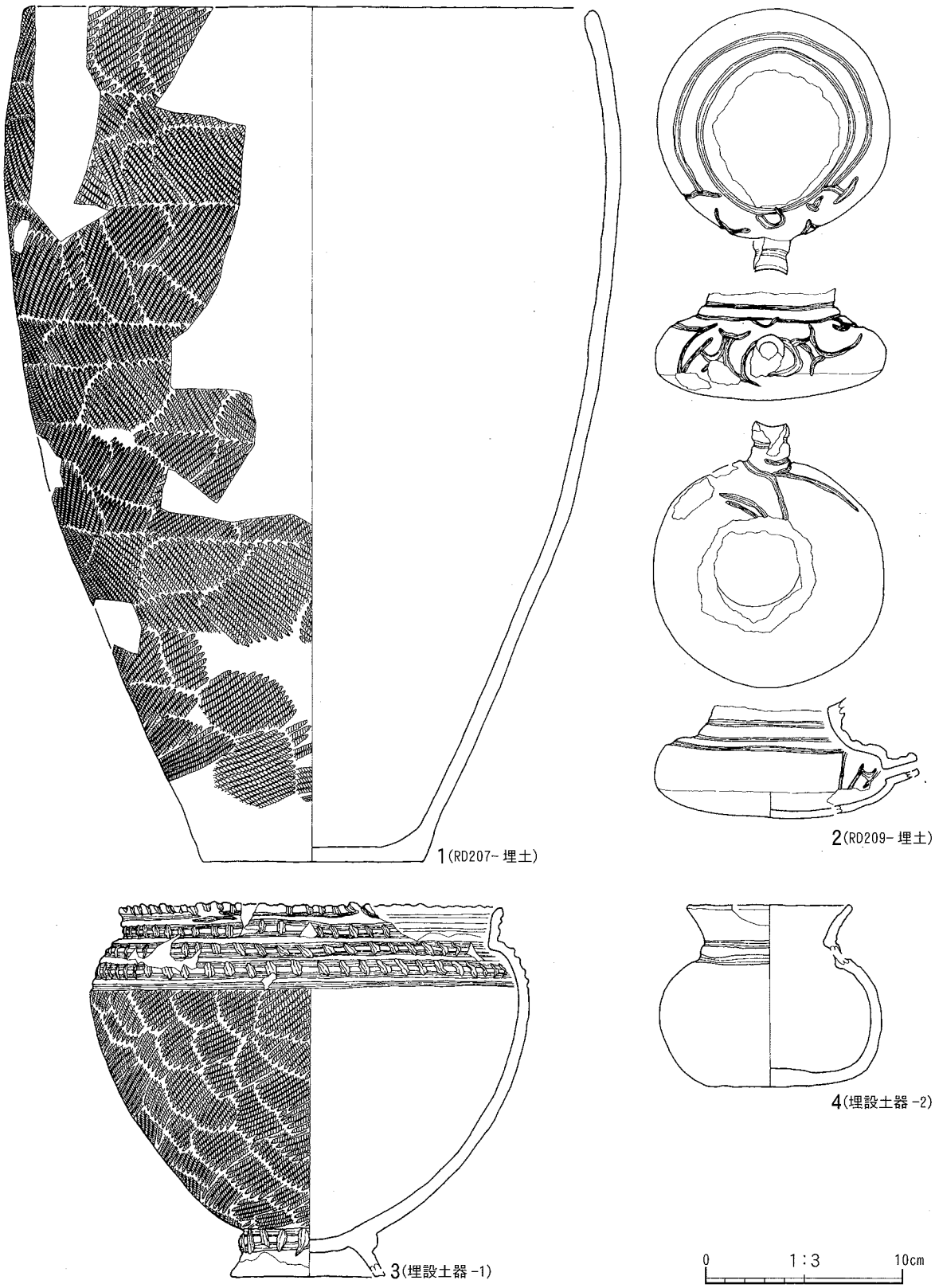
Ａ層―暗～黒褐色土を主体に褐色シルトを粒状に少量含む。A1・A2層ともに炭化物が少量含まれ，A2層は褐色シルトの割合が若干多い。

Ｂ層―暗～黒褐色土を主体に褐色シルトを塊状に含む。下層ほど褐色シルトの割合が少なくなる。

遺　　物（第６図）　２は晩期前葉（大洞Ｂ式期）と推定される注口土器である。口縁部から頸部にかけての全周及び底部中央部が焼成後に打ち欠かれている。頸部はやや内傾し，丸底を呈する。器面には全面に入念な磨きがかけられ，文様は頸部から肩部にかけて平行沈線文，体部には注口部の付く正面にのみ沈線による入組文が施される。



第５図　RD206・207・208・209 土坑，埋設土器１・２



第6図　RD207・209土坑出土遺物，埋設土器1・2

埋設土器１（第５図）

位　　置　西調査区北部　　**平 面 形**　掘方は円形を呈する。

規　　模　掘方上端0.25m・下端0.12m，検出面からの深さ0.13mを計る。

掘 込 面　削平　　**検 出 面**　Ⅲｅ層

埋　　土　褐色シルトを主体に暗褐色土を粒状に少量含む。土器内部も同様の埋土である。

出土状況　正立の状態で埋設されている。

土　　器（第６図）　３は晩期前葉（大洞ＢＣ式期）と推定される台付鉢である。体部は内湾気味に立ち上がり，口縁部は直立する。文様は口唇部から肩部にかけて４段の平行沈線文と刻目文とが組み合わされた歯列状羊歯状文，体部には横～斜位の単節縄文（ＬＲ），脚基部に１段の歯列状羊歯状文がそれぞれ施される。

埋設土器２（第５図）

位　　置　西調査区北東部　　**平 面 形**　掘方は円形，ピット状を呈する。

規　　模　掘方上端0.18m・下端0.11m，検出面からの深さ0.19mを計る。

掘 込 面　削平　　**検 出 面**　Ⅲｆ層

埋　　土　暗褐色土を主体に褐色シルトを塊状に含む単層である。

出土状況　堀方の埋土上位に正立の状態で埋設されている。

土　　器（第６図）　４は晩期前葉（大洞ＢＣ式期）と推定される壺である。口縁部はくの字に外反し，球胴を呈する。器面は入念な磨きがかけられ，頸部に平行沈線文が施される。

（２）古代以降の遺構と遺物

ＲＢ５１２掘立柱建物跡（第７図）

位　　置　西調査区北西部

平 面 形　四面庇建物跡？―梁間２間×桁行３間あるいはそれ以上の南北棟

重複関係　ＲＧ519を切る。　　**棟 方 向**　N10°Ｅ

規　　模　身舎東西２間（総長4.70m・15尺４寸），南北３間（総長7.87m・26尺）で南側は調査範囲外に延びる。

検 出 面　Ⅱｂ層直下―Ⅲ層上面

柱間寸法　身舎梁間はＰ１・Ｐ４間―2.33m，Ｐ４・Ｐ５間―2.33mである。桁行はＰ１・Ｐ２間―2.42m，Ｐ２・Ｐ３間―2.48m，Ｐ５・Ｐ６間―2.48m，Ｐ６・Ｐ７間―2.60m，Ｐ７・Ｐ８間―2.70mである。庇部はＰ９・Ｐ10間―2.48m，Ｐ12・Ｐ13間―2.79m，Ｐ13・Ｐ14間―2.48m，Ｐ14・Ｐ15間―2.48mである。

柱　　穴　明確な柱痕跡を確認できたものは，Ｐ３・７・８である。柱痕跡径は0.20m前後，掘方径は0.40～0.60mを計る。柱痕跡埋土は黒褐色土を主体に褐色シルトを少量含む。掘方埋土は柱痕跡部より若干褐色シルトの割合が多くしまりがある。各柱穴の深さは，Ｐ１―0.50m・Ｐ２―0.72m・Ｐ３―0.88m・Ｐ４―0.50m・Ｐ５―0.62m・Ｐ６―0.72m・Ｐ７―0.72m・Ｐ８―0.68m・Ｐ９―0.38m・Ｐ10―0.48m・Ｐ11―0.42m・Ｐ12―0.38m・Ｐ13―0.18m・Ｐ14―0.32m・Ｐ

15—0.68mである。身舎桁側を構成するＰ２・３・６・７・８において柱穴底面は標高値にして142.800m前後とほぼ一定しており，底部と比較して深い位置に柱が据えられている。

遺　　物　図示していないが，縄文時代後期～晩期の土器小片が出土している。

ＲＧ５１９溝跡（第７図）

位　　置　西調査区西端　　**平 面 形**　北端で屈曲を持ち，直線状に南北に延びる。

重複関係　ＲＢ512に切られる。

規　　模　検出した長さは総延長6.40m・上端0.38～0.50m・下端0.12～0.30m・深さ0.14～0.30mを計る。

検 出 面　Ⅱｂ層直下—Ⅲａ層上面

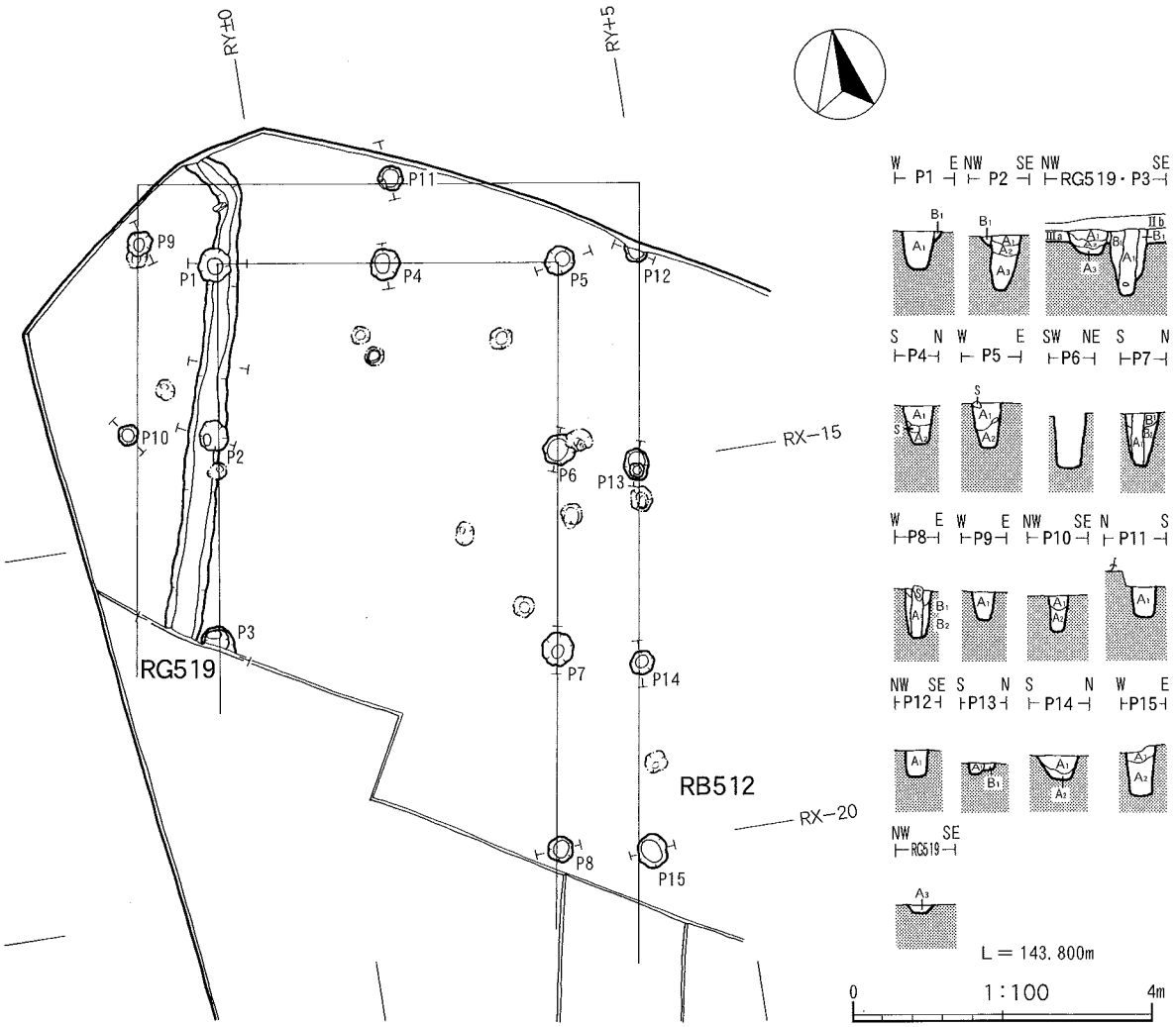
壁の状態　直立ぎみに外傾して立ち上がる。　**底の状態**　北から南へ緩やかな傾斜を持つ。

埋　　土　自然堆積によるものである。大きくＡ・Ｂ層に大別され，さらにＢ層は２層に細別される。

Ａ層—黒褐色土を主体に褐色シルトを粉状に少量含む。

Ｂ層—黒褐色土を主体に褐色シルトを粒～塊状に含む。Ｂ2層は褐色シルトの割合が多い。

遺　　物　図示していないが，縄文時代後期～晩期の土器小片が出土している。



第７図　RB512 掘立柱建物跡，RG519 溝跡

ＲＥ５０１竪穴建物跡（第８図）

位　　置　西調査区北東部　　**平 面 形**　方形？　東西２間×南北２間？

重複関係　ＲＤ510を切る。　**主軸方向**　Ｎ11°Ｅ

規　　模　東西上端4.32m・下端3.90m，南北上端4.80m・下端4.52m以上で北側は調査範囲外に延びる。深さは0.37～0.56mである。

検 出 面　Ⅱｂ層直下―Ⅲｃ層上面

埋　　土　自然堆積によるものである。大きくＡ・Ｂ・Ｃ層に大別され，さらにＡ層は２層，Ｂ層は４層，Ｃ層は３層に細別される。

Ａ層―黒褐色土を主体に褐色シルトを粒～塊状に含む。Ａ1はⅡｂ層と同一層である。Ａ1・Ａ2層ともに炭化物が含まれ，Ａ2層は褐色シルトの割合が若干少ない。

Ｂ層―黒褐色土を主体に褐色シルトを粉～粒状に少量含む。Ｂ1～Ｂ4層ともに炭化物が含まれるが，特にＢ4層は炭化物及び焼土粒を多量に含む。下層ほど褐色シルトの割合が少なくなる。

Ｃ層―黒褐色土を主体に褐色土を粒～塊状に含む。Ｃ1～Ｃ3層ともに炭化物が含まれ，下層ほど褐色シルトの割合が少なくなる。

壁の状態　外傾して立ち上がる。

床の状態　ほぼ全面を0.10m前後の構築土（Ｌ層）で床面をほぼ平坦している。構築土層は２層に細分され，褐色シルトを主体に黒～暗褐色土を少量含む混合土により硬くしまる層で，焼土及び炭化物を少量含む。中央に径0.42～0.48mの明赤褐色の焼土域が広がる火床面を確認している。

柱　　穴　Ｐ１～６が床面から検出されている。建物の隅に２口（Ｐ２・４），各辺中央部に３口（Ｐ１・３・５），建物内部に１口（Ｐ６）が建物を構成する主柱穴として配置されている。柱痕跡径は0.14～0.26m，掘方径は0.28～0.36mを計る。柱痕跡埋土（Ｄ層）は黒褐色土を主体に褐色シルトを少量含む。掘方埋土（Ｅ層）は黒褐色土と褐色シルトの混合土である。各柱穴の床面からの深さは，Ｐ１―0.48m，Ｐ２―0.50m，Ｐ３―0.74m，Ｐ４―0.50m，Ｐ５―0.50m，Ｐ６―0.30mである。また，壁材を据えた痕跡と見られる小ピットを東辺と南辺に数口検出している。深さは0.10m前後で埋土は黒褐色土を主体に褐色シルトを塊状に含む混合土である。

遺　　物　縄文時代後期～晩期の土器（第11図２・16図46），石器（第17図17・第18図36・第20図51），土製品（第22図３）等が出土している。

ＲＤ５１０土坑（第８図）

位　　置　西調査区北東部　　**平 面 形**　不明　　**重複関係**　ＲＥ501に切られる。

規　　模　上端―・下端―・深さ0.08～0.10mを計る。　**検 出 面**　Ⅱ層直下―Ⅲｃ層上面

埋　　土　自然堆積によるもので，黒褐色土を主体に褐色シルトを塊状に含む。

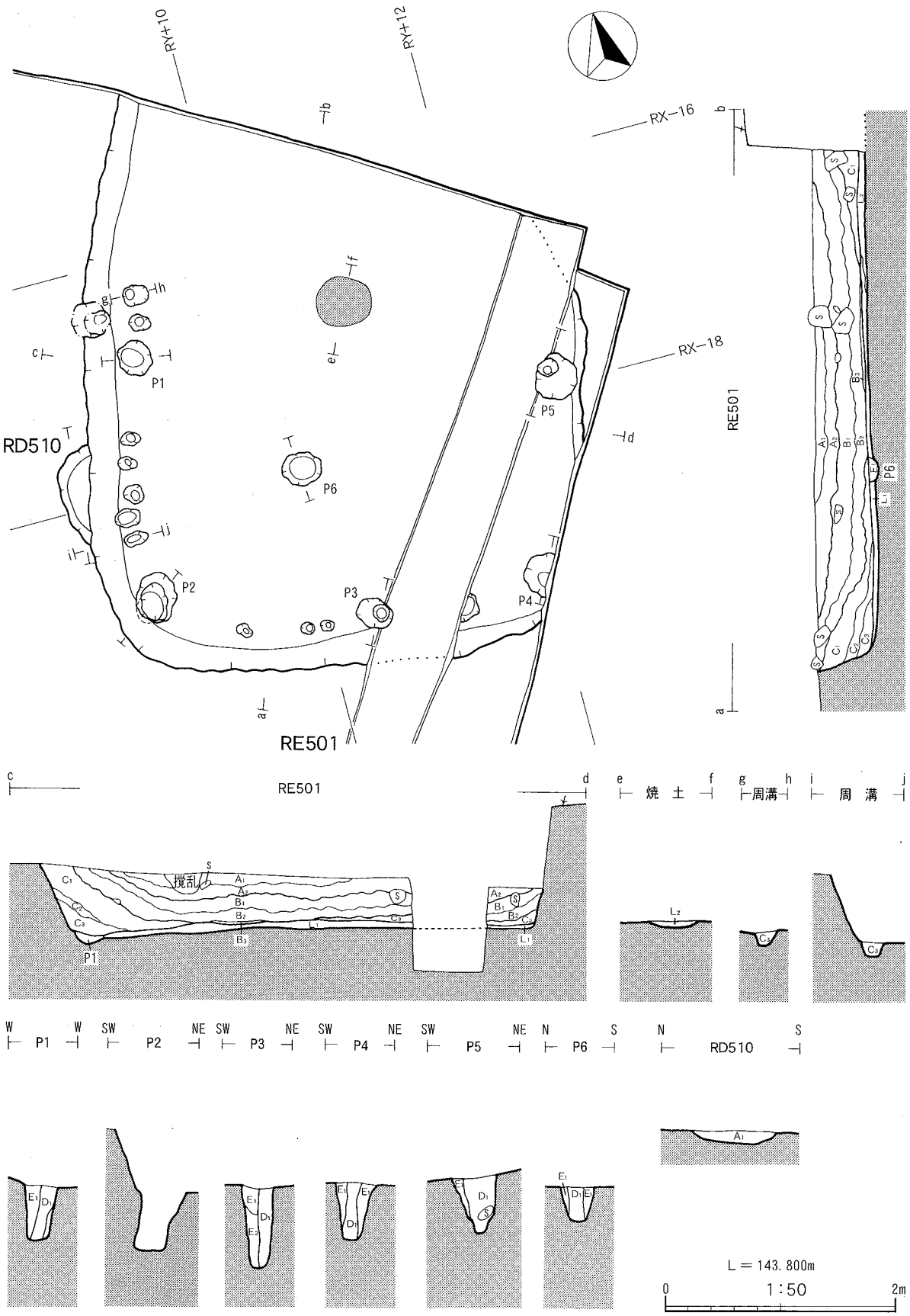
壁の状態　緩やかに外傾して立ち上がる。　**底の状態**　ほぼ平坦　**遺　　物**　なし

ＲＤ５１１土坑（第９図）

位　　置　東調査区北端　　**平 面 形**　方形？　　**重複関係**　なし

規　　模　上端2.42～1.94m・下端1.70～2.04m・深さ0.08～0.12mを計る。

掘 込 面　削平　　**検 出 面**　Ｉａ層直下―Ⅱｂ層上面



第８図　RE501 竪穴建物跡，RD510 土坑

埋　　土　自然堆積によるものである。黒褐色土を主体に褐色シルトを粉～粒状に少量含む。また，炭化物を少量含む。やや軟らかくしまりがない。

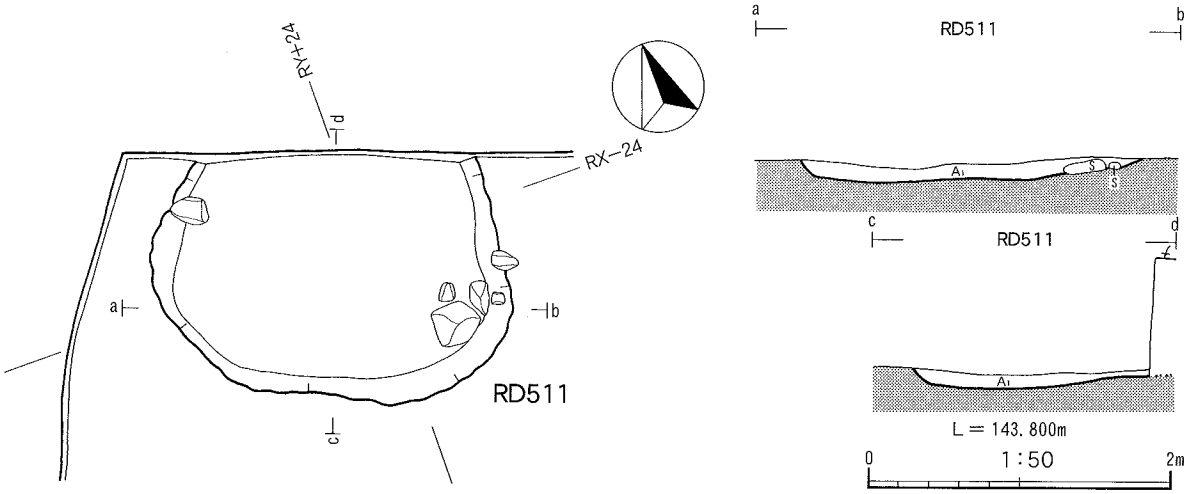
壁の状態　緩やかに外傾して立ち上がる。　**底の状態**　ほぼ平坦

遺　　物　縄文時代後期～晩期の土器（第14図24），石器（第18図28・35）等が出土している。

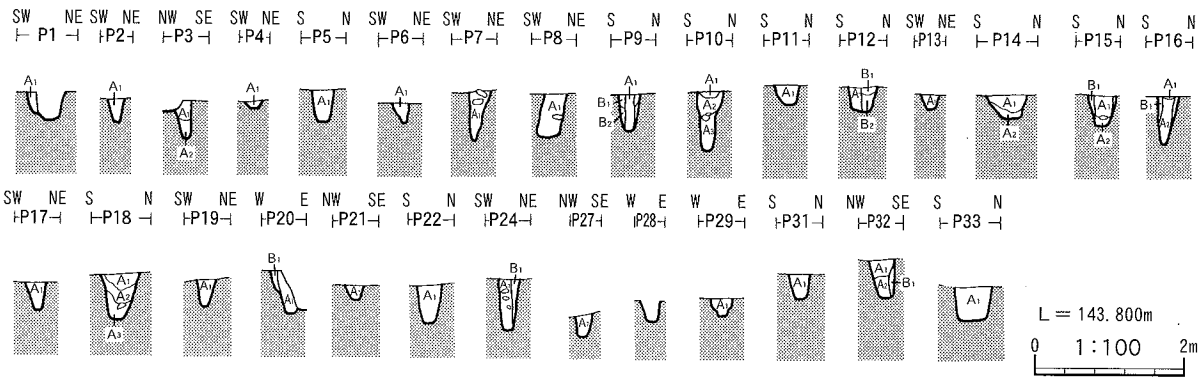
ピット群（第10図）

西調査区を中心に36口のピット（Ｐ１～36）が検出されている。検出面はＰ35・36のみⅡ層上面であり，その他はⅡ層直下である。柱痕跡を確認できたものは，Ｐ７・９・12・15・16・20・24・32である。柱痕跡径は0.15m前後を計り，埋土（Ａ層）は黒褐色土を主体に褐色シルトを粉～粒状に含む。掘方径は0.30～0.50mを計り，埋土（Ｂ層）は黒～暗褐色土を主体に褐色シルトを粒～塊状に含むものが多い。各ピットの検出面からの深さは以下のとおりである。

Ｐ１—0.28m・Ｐ２—0.32m・Ｐ３—0.50m・Ｐ４—0.08m・Ｐ５—0.40m・Ｐ６—0.28m・Ｐ７—0.70m・Ｐ８—0.58m・Ｐ９—0.50m・Ｐ10—0.80m・Ｐ11—0.28m・Ｐ12—0.32m・Ｐ13—0.20m・Ｐ14—0.32m・Ｐ15—0.42m・Ｐ16—0.66m・Ｐ17—0.58m・Ｐ18—0.62m・Ｐ19—0.38m・Ｐ20—0.58m・Ｐ21—0.20m・Ｐ22—0.50m・Ｐ23—検出のみ・Ｐ24—0.68m・Ｐ25—検出のみ・Ｐ26—検出のみ・Ｐ27—0.30m・Ｐ28—0.28m・Ｐ29—0.24m・Ｐ30—0.62m・Ｐ31—0.32m・Ｐ32—0.50m・Ｐ33—0.44m・Ｐ34—0.54m・Ｐ35—0.52m・Ｐ36—0.48m。



第９図　RD511 土坑



第10図　ピット土層断面

（3）遺物包含層・遺構外出土遺物

遺物包含層は調査区内全域において形成されており，各層は地形に沿うよう北東から南西に緩やかに傾斜して堆積している。前述した基本層位のうち，第Ⅱ～Ⅳ層が遺物包含層であり，各層はさらに細分される。

Ⅱ層―黒褐色土主体で褐色シルトを粉～粒状に少量含む。Ⅱａ・Ⅱｂ層の２層に細分され，ともに炭化物が多量に含まれる。また，灰白色火山灰を少量含む。Ⅱｂ層はⅡａ層と比較すると，若干褐色シルトの割合が少ない。縄文時代後～晩期・古代及び中世の遺物が混在して出土することから，中世以降の堆積と推定される。

Ⅲ層―暗褐色土主体・褐色シルト主体の互層で，Ⅲａ～Ⅲｈ層の８層に細分される。Ⅲａ・Ⅲｂ層には炭化物が少量含まれる。縄文時代後期末葉～晩期中葉の遺物が含まれる。

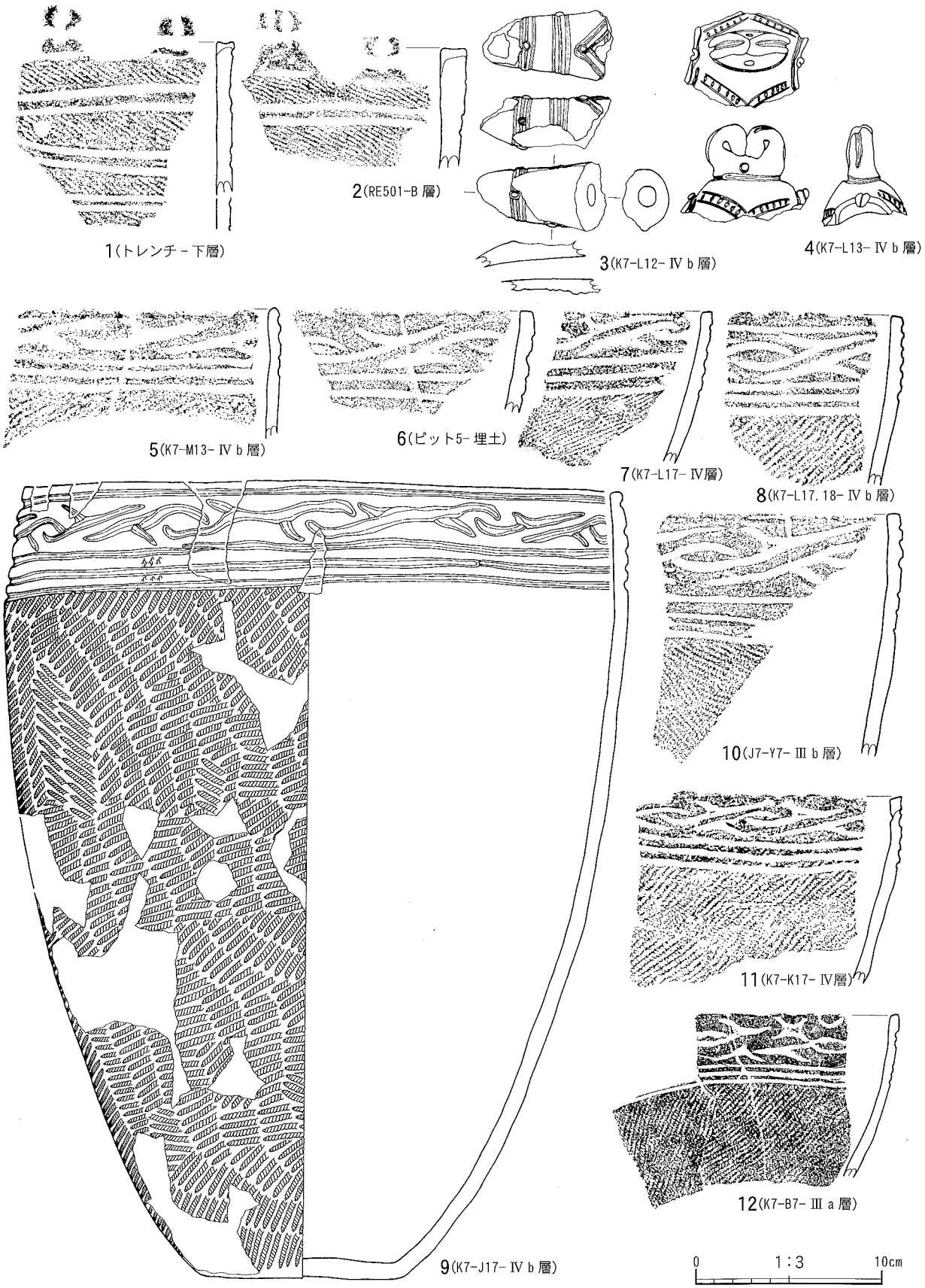
Ⅳ層―黒褐色土主体・褐色シルト主体の互層で，小礫を多く含む。Ⅳａ～Ⅳｃ層の３層に細分され，炭化物が少量含まれる。縄文時代後期末葉～晩期中葉の遺物が多量に含まれる。今回の調査では東調査区でのみ確認された。西調査区では調査深度よりも下層に堆積していると推定される。

縄文時代の遺物

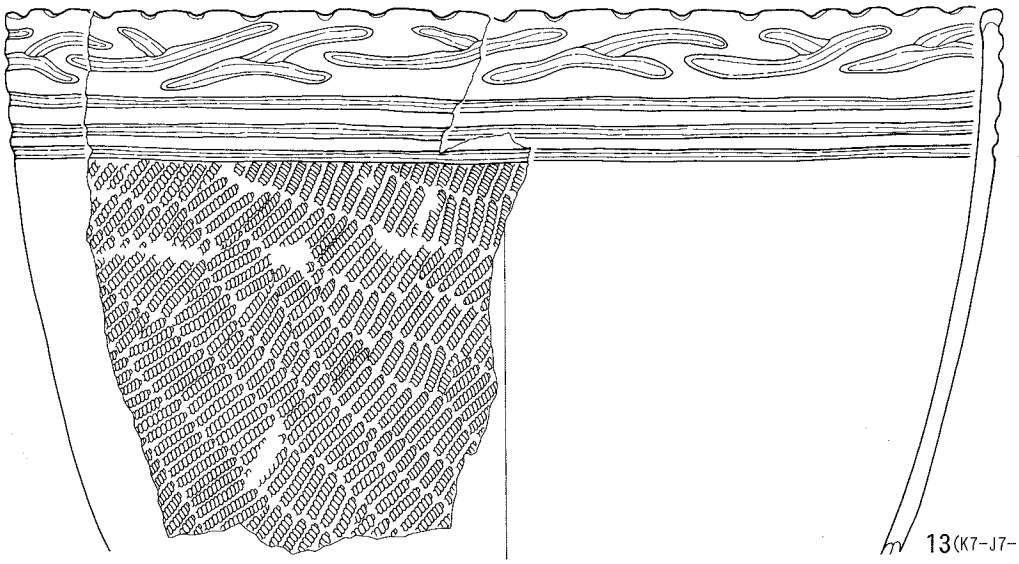
土　器（第11図１～第16図48）　１～４は後期末葉に属する土器である。１・２は口唇部にやや肥厚する山形状の突起を持ち，その頂部に１～２ヶの刻目を有する深鉢である。文様は，弧線あるいは平行沈線内に横～斜位の単節縄文（ＲＬ）を伴う帯状文が施される。３は注口土器の注口部である。２～３本１組の平行沈線を有し，小粘土粒が張付けられる。４は香炉形土器の頂部か。Ｖ字平行沈線内に縦位刻目文が施され，左右開口部の上部に小粘土粒が貼り付けられる。

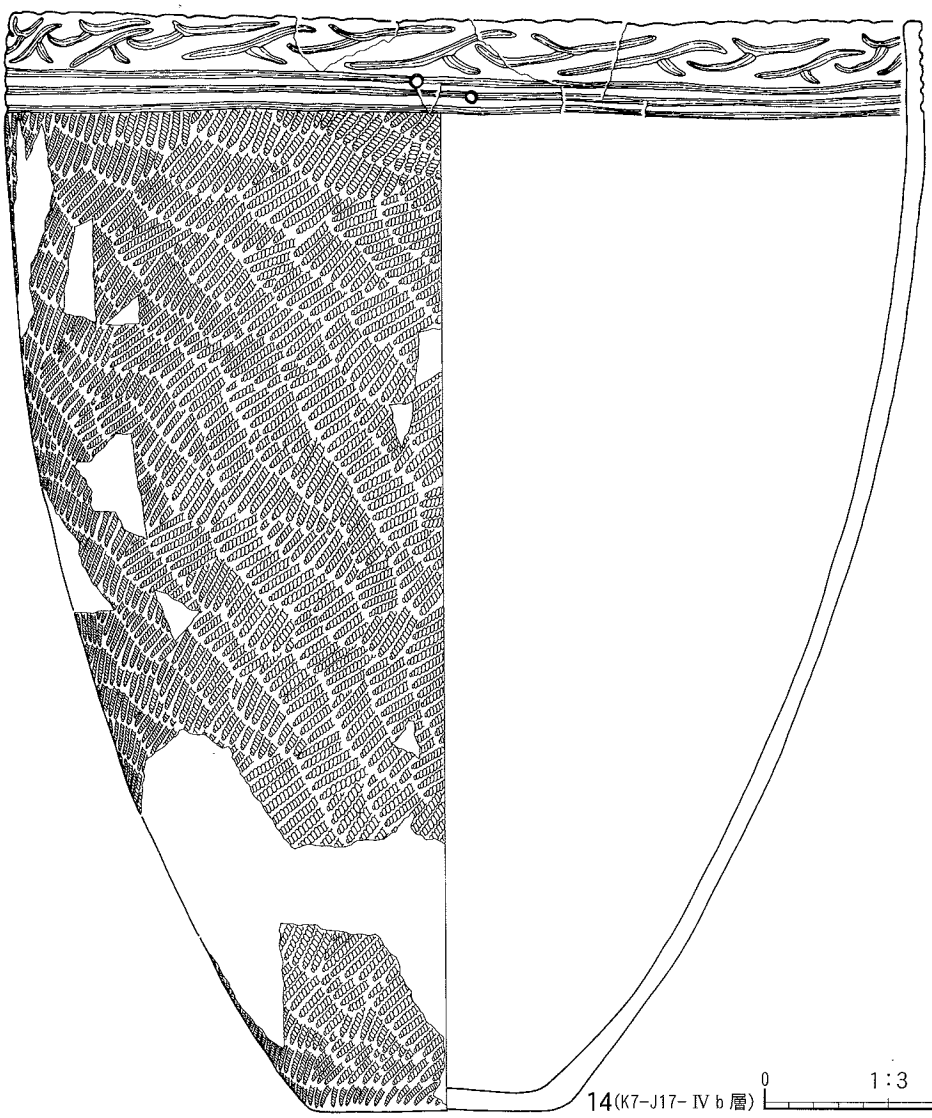
５～27は晩期前葉（大洞Ｂ式・ＢＣ式期）に属する土器である。５～17は口縁部文様帯に入組三叉文が施される深鉢である。９は口唇部の形状が平縁，17は口唇部にＢの字を横倒しにしたようなＢ字状突起を持つ。その他は刻目が施される。体部には16のみが横～斜位の無節縄文（Ｌ），その他は単節縄文（ＬＲ）が施される。また，14・17には補修孔が見られる。18～23は鉢あるいは台付鉢である。18は口縁部が直立し，入組三叉文が施される。体部には横～斜位の単節縄文（ＬＲ）が施され，底部は無文帯となる。また，内外面に炭化物の付着が認められる。19は体部上半がやや内湾気味に立ち上がり，口縁部がわずかに外反する。体部に入組三叉文が施され，頸部と底部を除く箇所に横～斜位の単節縄文（ＬＲ）が施される。20は口縁部は直立し，入組三叉文が施される。体部には横～斜位の単節縄文（ＬＲ），台部には沈線のみが施される。21は体部～口縁部がＳ字状に屈曲して外反する。口縁部には三叉文を上下から彫りこみ，Ｘ字状の浮文が施され，口唇部に突起を持つ。体部には縦～斜位の単節縄文（ＬＲ）が施される。22は口縁部はやや外反気味に立ち上がり，口縁部～頸部に入組三叉文を基調とする渦巻文が施される。23は体部～口縁部がＳ字状に屈曲して外反する。口唇部に突起，口縁部及び体部上半に入組三叉文，頸部に結節沈線が施される。24・25は台付の台部である。24は玉抱三叉文状の透かし，25は入組三叉文状の透かしと下端に縄文（ＬＲ）帯が施される。26・27は壺である。26は体部上半に唐草風入組文が施される。27は頸部が内傾し，球胴を呈する。横位平行沈線内に平行撚糸文を伴う帯状文が施される。

28～48は晩期前葉～中葉（大洞ＢＣ式・Ｃ1式期）に属する土器である。28～37は口縁部文様

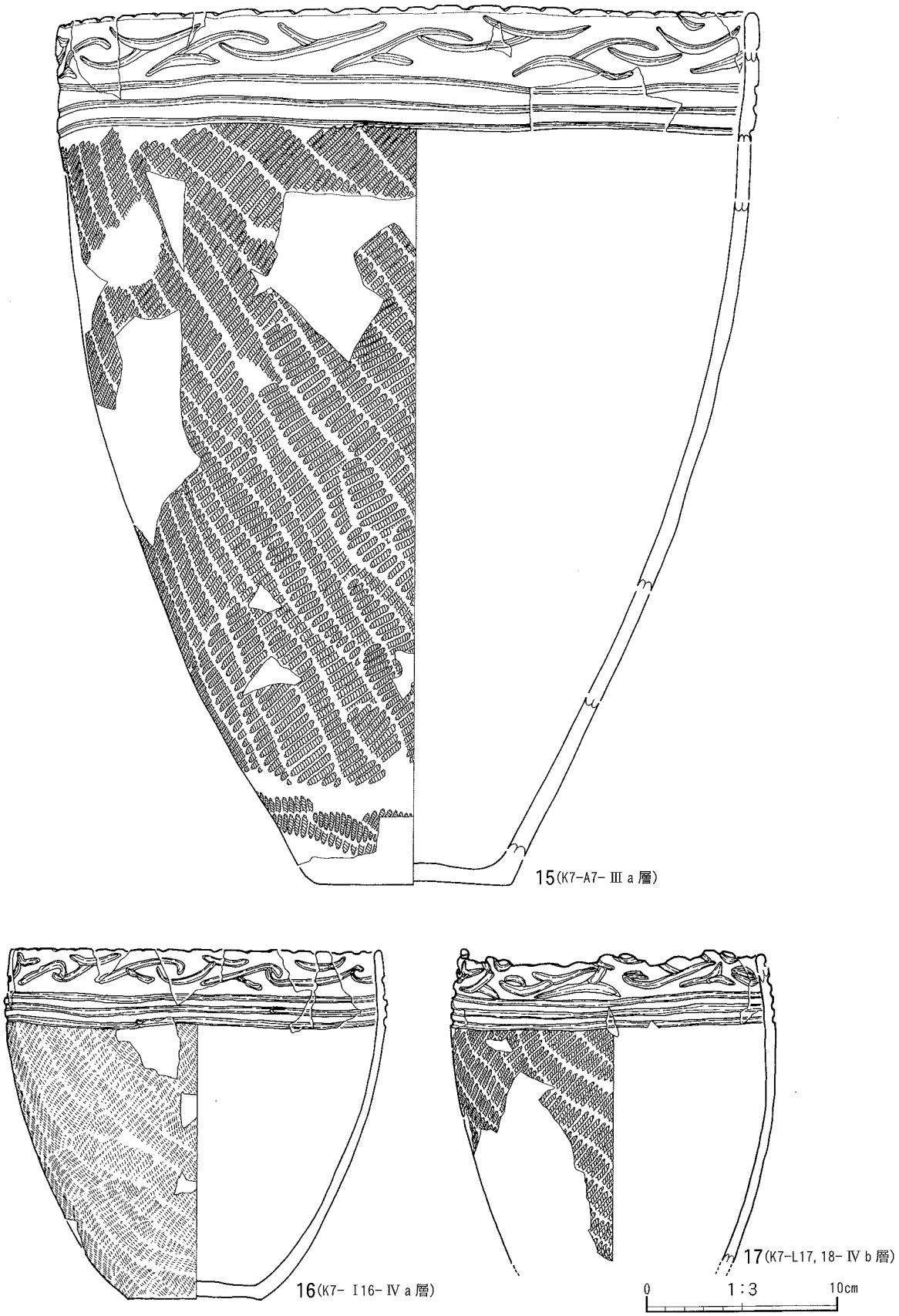


第 11 図　遺物包含層出土土器（1）

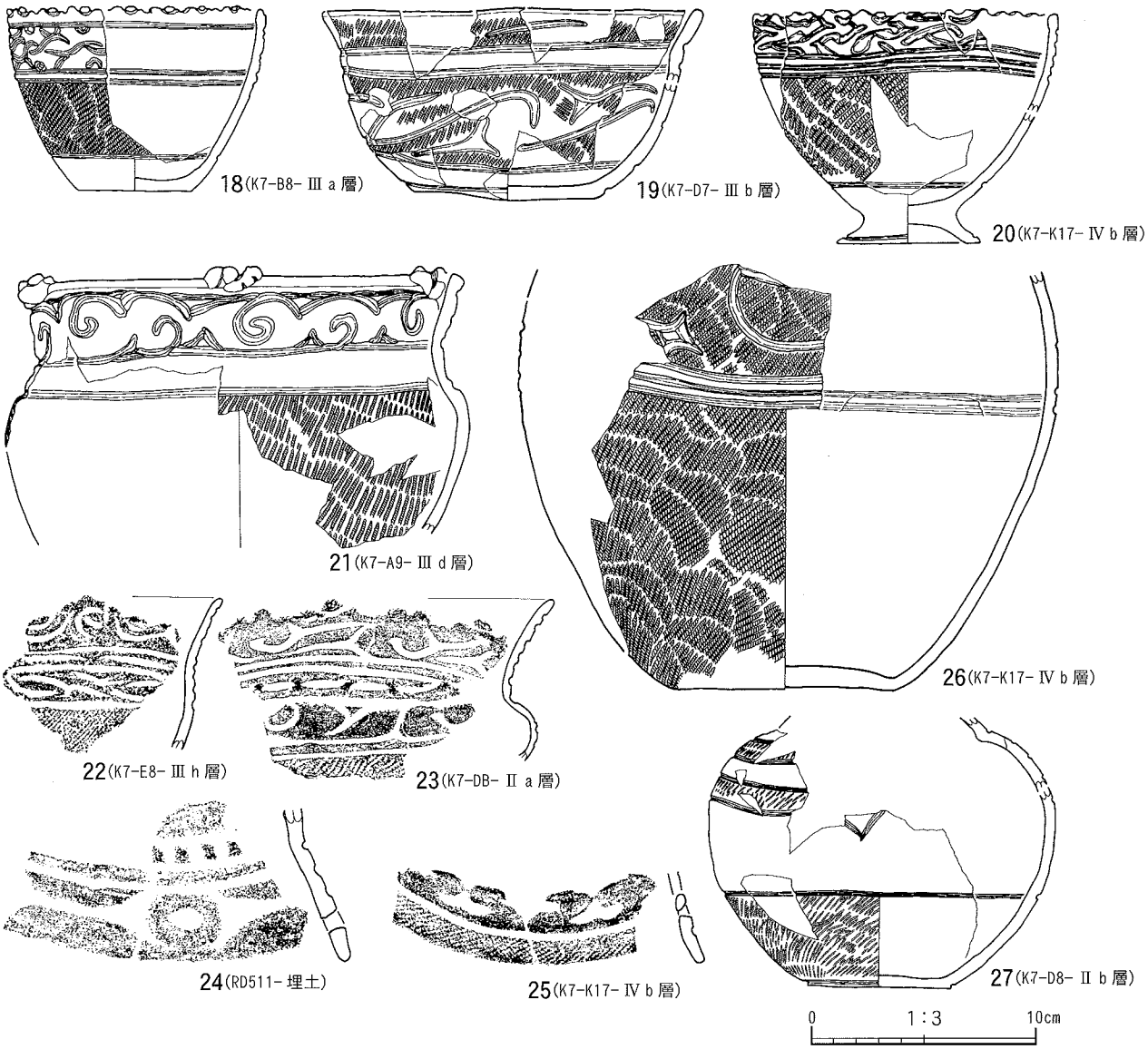




第12図　遺物包含層出土土器（2）

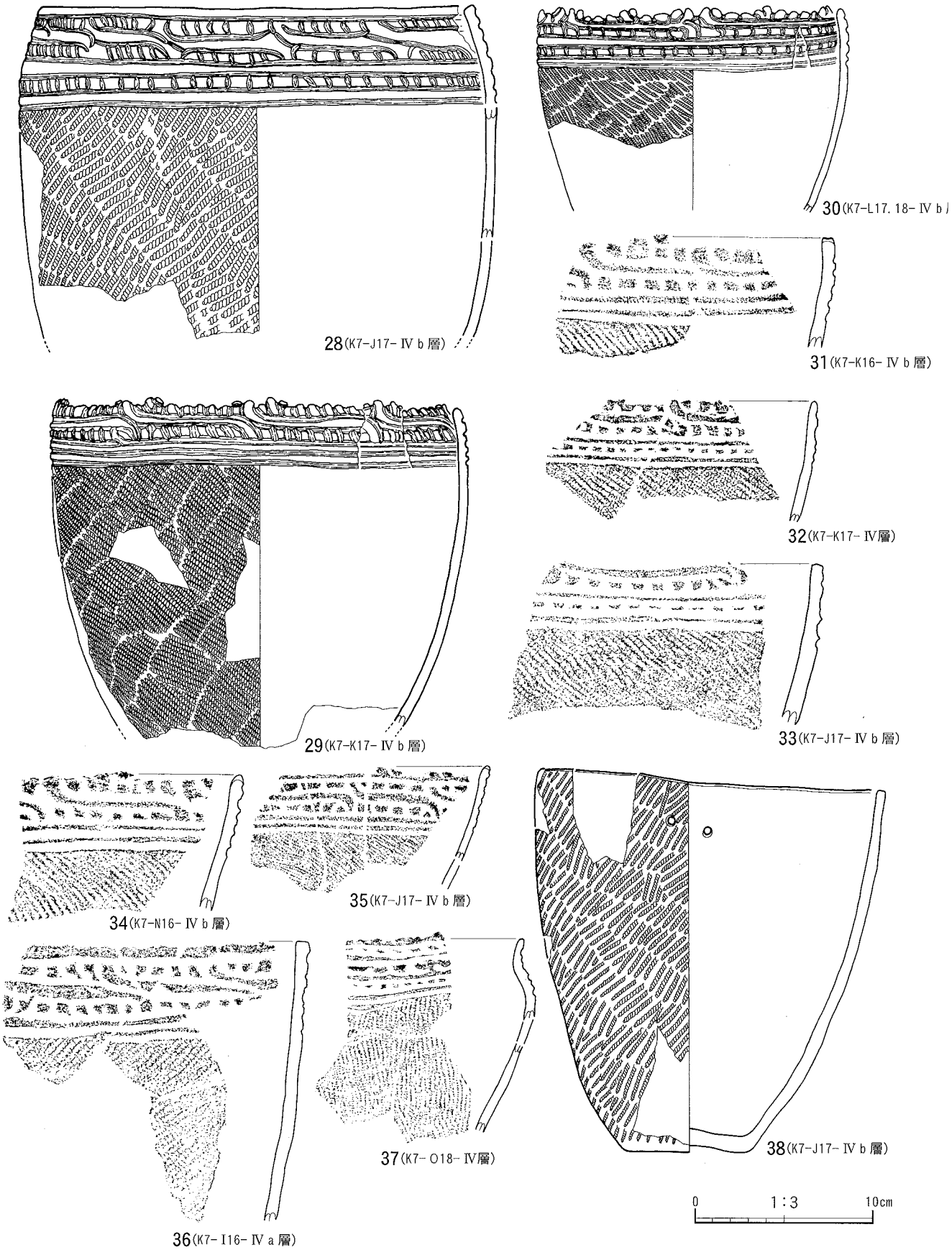


第13図　遺物包含層出土土器（3）

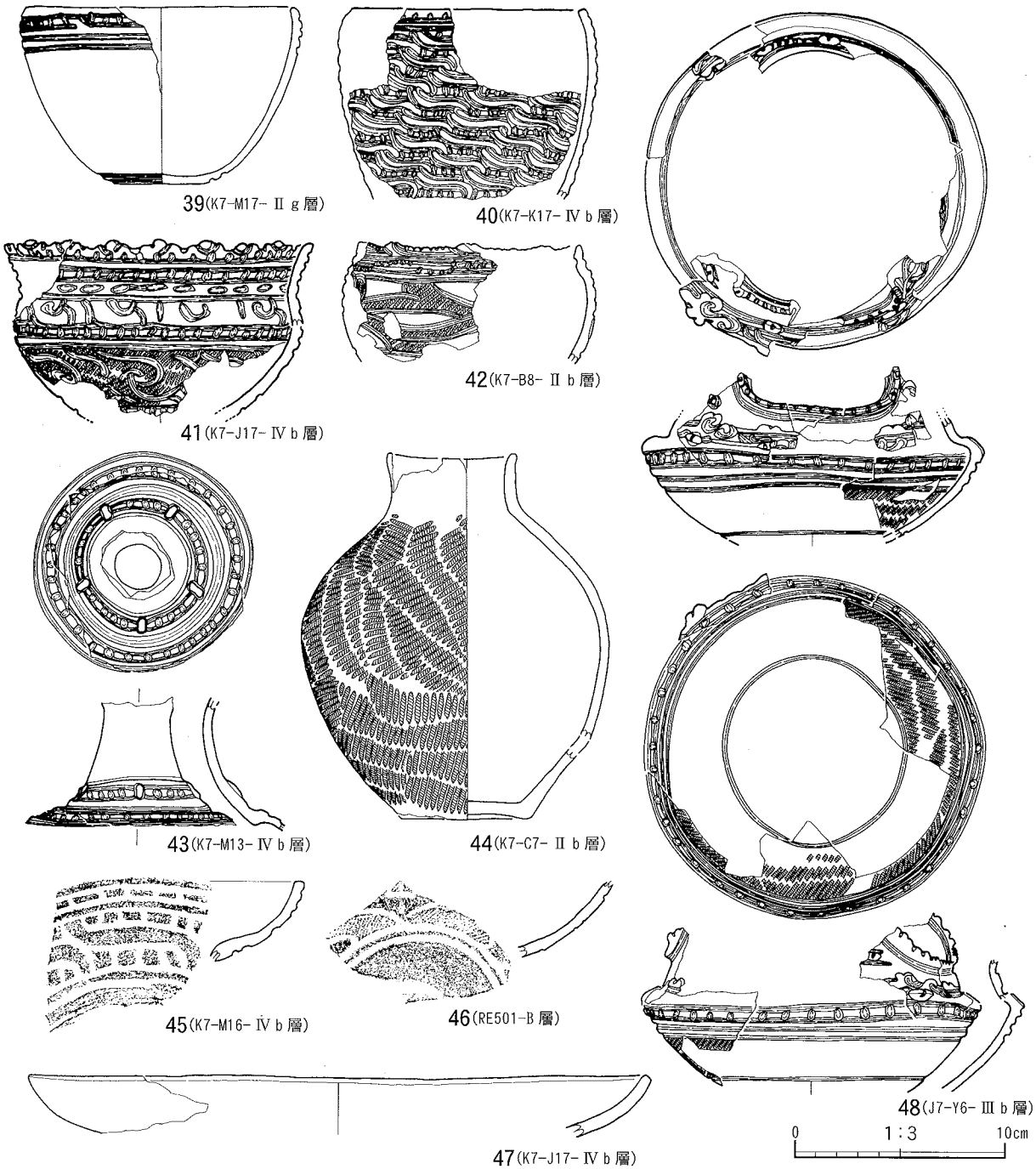


第14図　遺物包含層出土土器（4）

帯に羊歯状文が施される深鉢であり，28・30・32・37は直線状羊歯状文＋歯列状羊歯状文，29・31・34・35・36はクランク状羊歯状文＋平行沈線文，33は歯列状羊歯状文が施される。口唇部の形状は，28は平縁，32・35・37はＢ字状突起を有する。その他には刻目が施される。また，体部には28・30・36・37はＬＲ単節縄文，その他はＲＬ単節縄文が施される。38は斜位の平行撚糸文が施され，補修孔を有する深鉢である。39～42は鉢である。39は口縁部に直線状羊歯状文が施される。また，平行沈線が羊歯状文下部と底部にそれぞれ２条廻り，その間の体部には磨きが施される。40は口縁部が内湾ぎみに立ち上がる。文様は口縁上端部に刻目文＋沈線文，口縁部～体部はクランク状羊歯状文が施される。41は体部～口縁部がＳ字状に屈曲してやや外反する。口唇部には刻目を伴う連続した小突起が施される。口縁部～体部上半には歯列状羊歯状文＋Ｃ字状文，体部下半には横～斜位の単節縄文（ＬＲ）による施文後，唐草風入組文が施される。42は体部～口縁部が内湾ぎみに立ち上がり，口唇部には刻目と小突起を有する。口縁部には刻目文の上下交



第15図　遺物包含層出土土器（5）



第 16 図　遺物包含層出土土器（6）

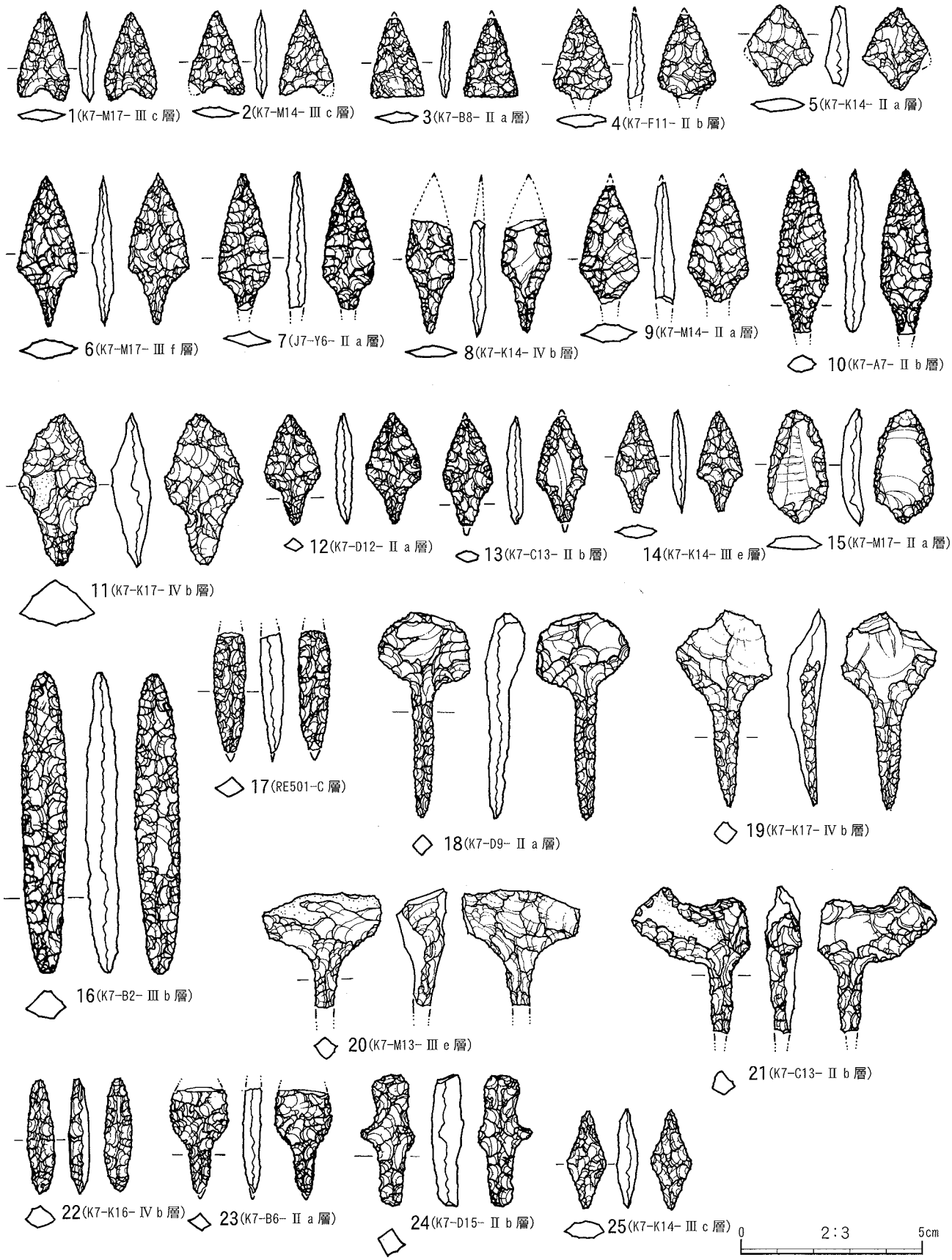
互配置と平行沈線により施文され，体部には磨消技法による雲形文が施される。43・44は壺である。43は頸部は長く直線的に内傾し，口縁部は外反する。平行沈線文と刻目文の組み合わせによる２段の歯列状羊歯状文が施され，上段にはボタン状の粘土粒の貼付が見られる。また，文様部に朱の付着が認められる。44は頸部が直立，口縁部はわずかに外反し，球胴を呈する。口縁部～頸部を除いて横～斜位の単節縄文（ＬＲ）が施される。45は注口土器である。口縁部が大きく埦～皿状を呈するもので，クランク状羊歯状文が施される。46は皿等の底部である。磨消技法による曲線的な入組文と平行沈線文が施される。47は無文の皿である。48は香炉形土器である。開口

部と肩部に平行沈線文と刻目文による歯列状文が施される。

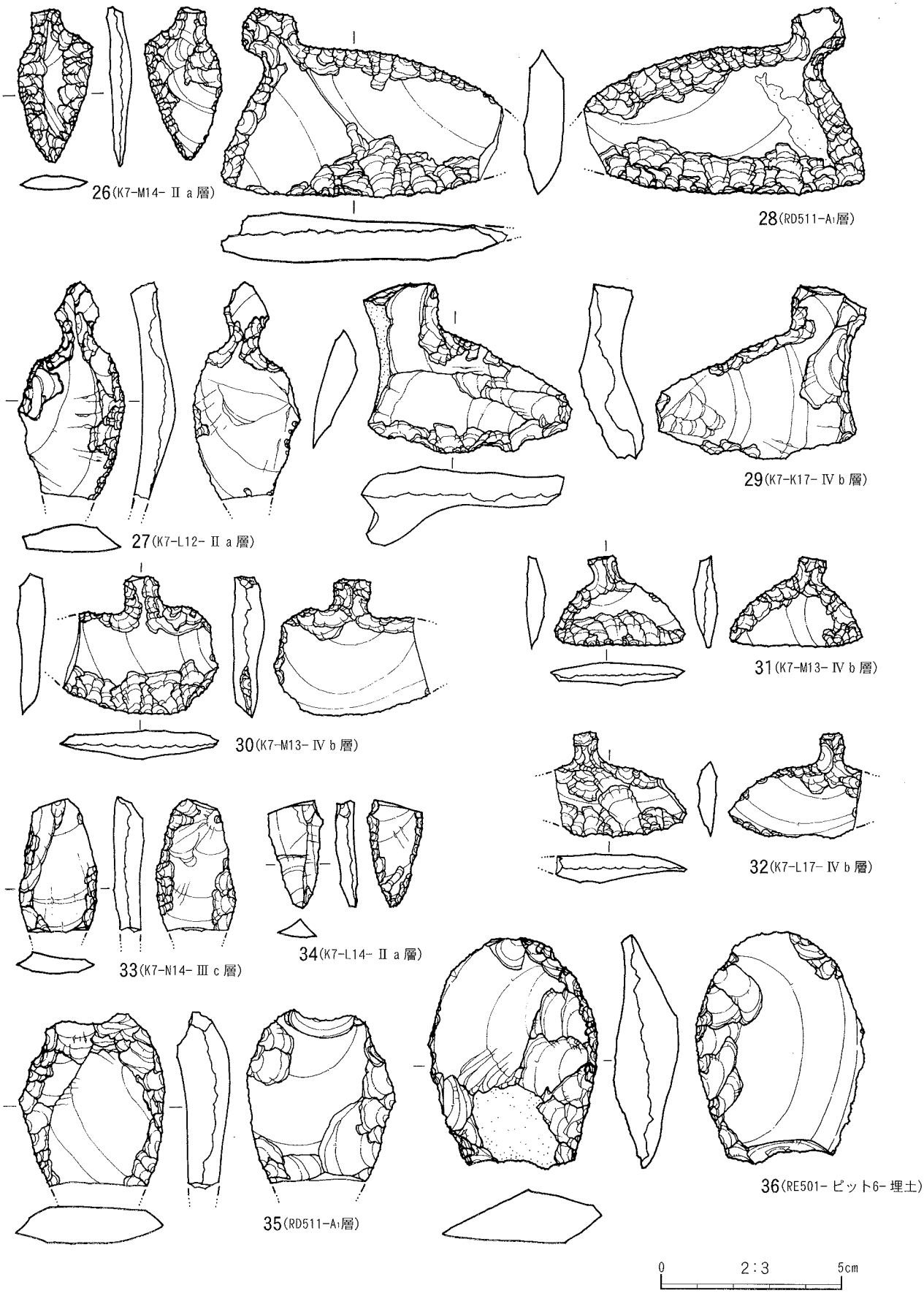
石　器（第17図１～第20図59）　落合遺跡第14・15次調査区において，出土した石器（剥片を含む）総点数は417点を数える。417点中，２次加工・使用を示す痕跡が認められた剥片石器は42点を数え，石材はその大半が頁岩であるが，玉髄，鉄石英なども見られる。礫石器は43点を数え，石材は安山岩，凝灰岩，蛇紋岩，粘板岩などが見られる。

１～15は石鏃である。１・２は凹基無茎鏃で，いづれも基部の抉りは浅い。１は脚部が丸状，２は脚先端が直線的である。３は平基無茎鏃である。４～15は凸基有茎鏃である。11は背面に礫皮面を残す。15は背腹両面に第１次剥離面を多く残し，木葉形を呈する。５・11・15は未完成品と見られる。16～25は石錐である。16･17･22･24は棒状を呈し，両面に入念な剥離調整が施される。24は基部付近の両側縁に突出部を有する。18～21は板状を呈し，錐部は棒状を呈する。20・21は基部が幅広く，錐部を欠損する。23は凸基有茎鏃の上半を折り取り，転用したと見られる。25は凸基有茎鏃に類似するが，断面形状が部厚で棒状を呈しており，ここでは石錐に分類した。26～32は石匙である。26・27は上方に柄を持ち，縦長剥片の側縁に刃部を有する。26は柄の方向に対し，刃部は斜めに位置し，両面に刃部の剥離調整加工が施される。27は背面右側縁に刃部調整加工が施される。28～32は上方に柄を持ち，その対辺に刃部を有する。28は両面全周縁に剥離調整が施される。30～32は背面にのみ刃部の剥離調整加工が施される。29はつまみ部の抉りはあまり顕著ではなく，つまみ部や刃部の剥離調整が粗く一部礫皮面を残す部分もあるため，未完成品と見られる。33～42は削器である。33は両面において二側縁に刃部剥離調整が施される。34は刃部は腹面において二側縁に剥離調整が施され，直線的である。35は背面において二側面に剥離調整が施され，弧を描く凸刃である。36は同一側縁を両面から剥離調整を施し，凸刃である。37は腹面において二側縁に刃部の剥離調整加工が施される。また，欠損した箇所にも剥離調整による再加工が施され，刃部を成形している。38は先端部が突出し，端部に剥離調整が見られる。また，背面右側縁に部分的な剥離調整が施される。39は両面に非連続的な剥離調整が施される。41・42は背面右側縁に凸刃の剥離調整加工が施される。43は掻器であり，背面下端と右側縁に剥離調整が施される。44・45は楔形石器である。44は階段状剥離を有する。いづれも下端部に剥離調整が施されることから，掻器として転用したものと見られる。40・46・47は用途及び形状が不確定なもので，両面あるいは片面調整石器と分類する。40は背面に多く礫皮面を残す片面（半両面）調整石器である。47は断面形状が部厚であり，石鏃の未完成品と見る可能性はある。48は石核である。周縁は小剥離し，背面に礫皮面を多く残す。

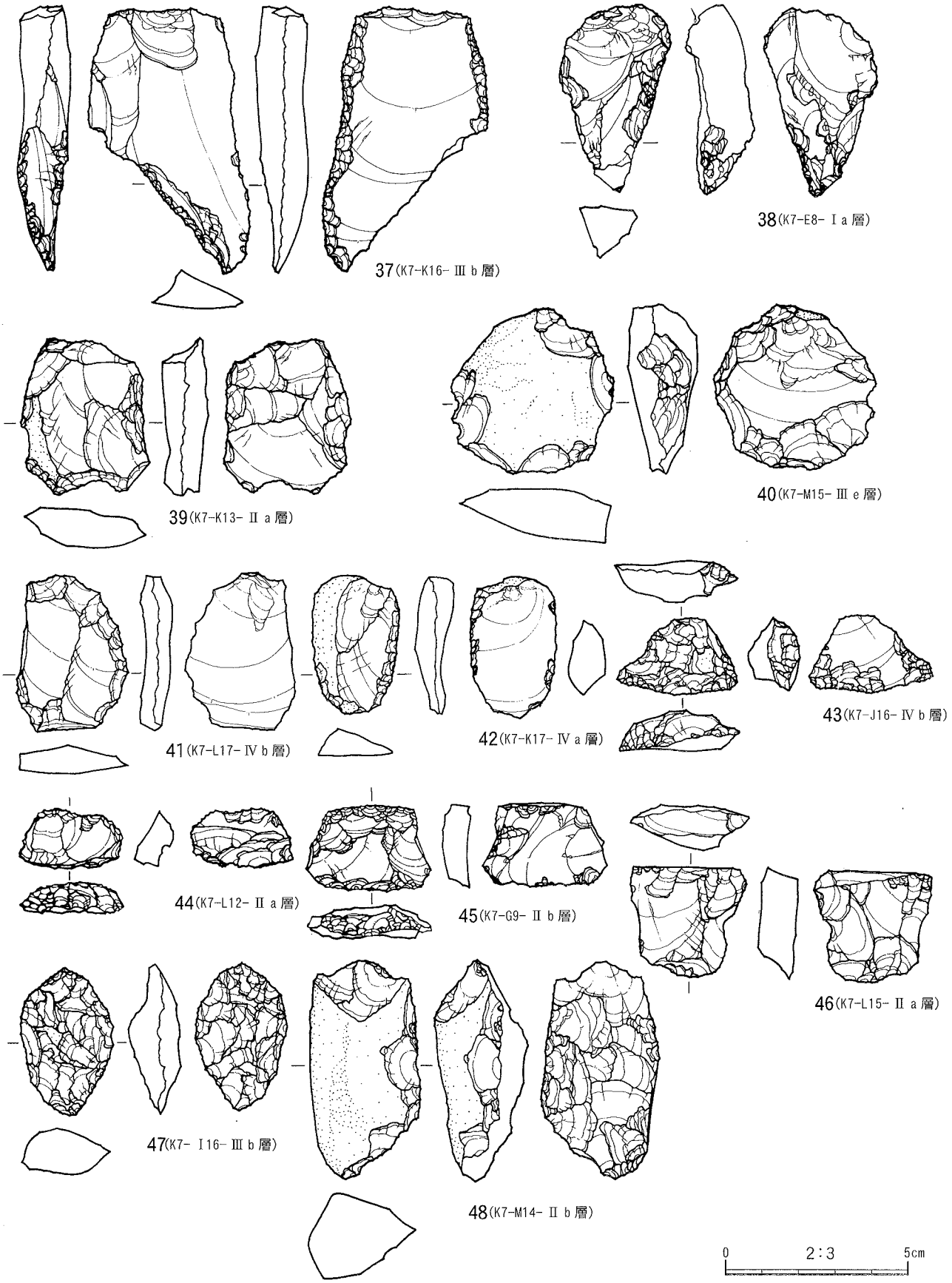
49～53は磨製石斧であり，49～51は刃部に使用による剥離，刃こぼれが認められる。54は基部を折損する粘板岩製の石鍬である。扁平剥片の周縁を剥離整形したもので，着柄あるいは握るための抉りを有する。55・56は細長礫を使用した敲石であり，端部に衝撃剥離を有する。57は立方体状を呈する凹石である。敲打による凹部が形成する。また，敲打磨面・敲打痕も認められることから，敲石および磨石としての機能を付属させるものである。一部被熱による剥落箇所が見られる。58は扁平円礫を加工した礫器である。59は縁を有する玄武岩質溶岩製の石皿片である。また，擦痕が認められるため，砥石として転用したものと見られる。



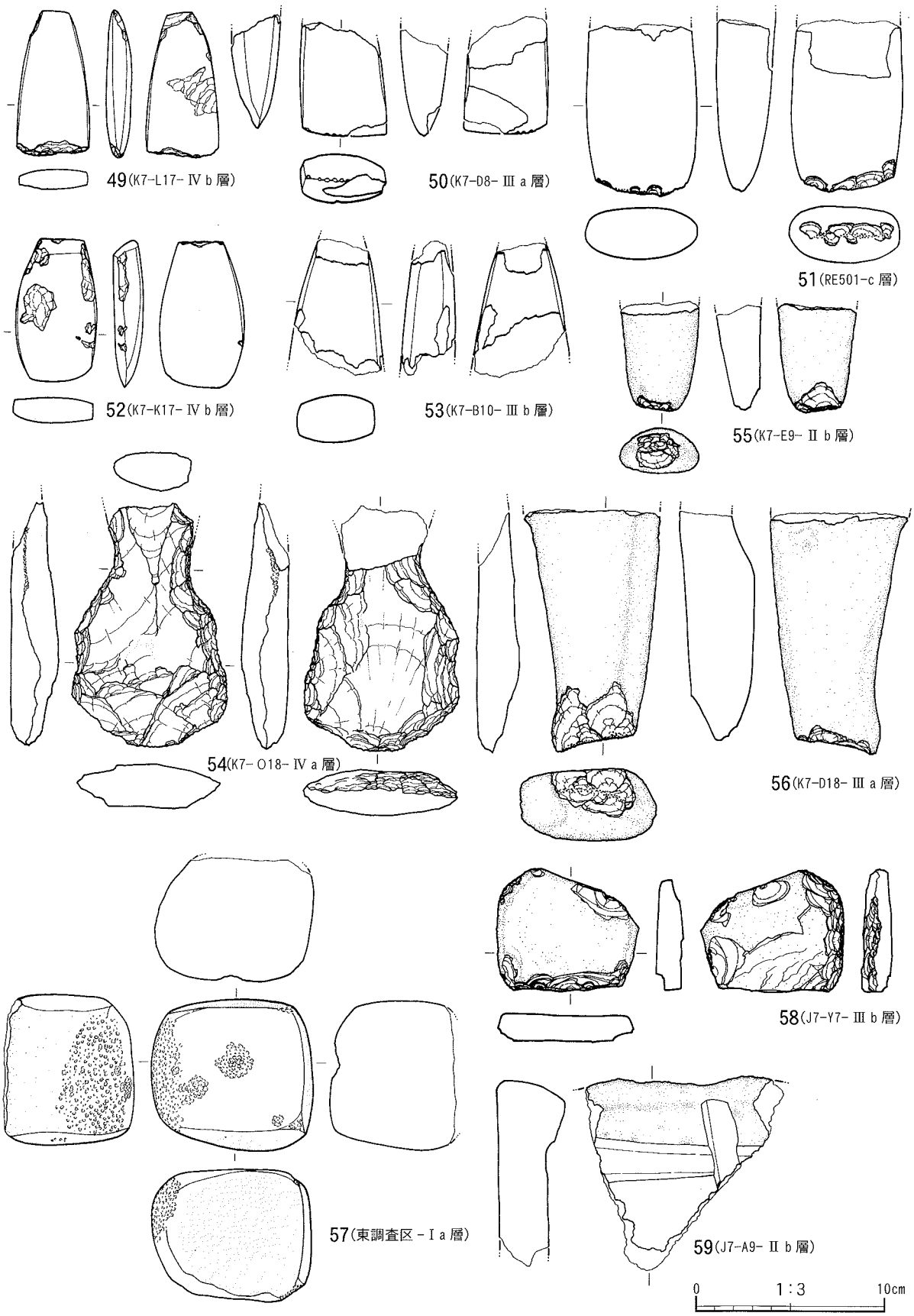
第17図　遺物包含層出土石器（1）



第 18 図　遺物包含層出土石器 (2)



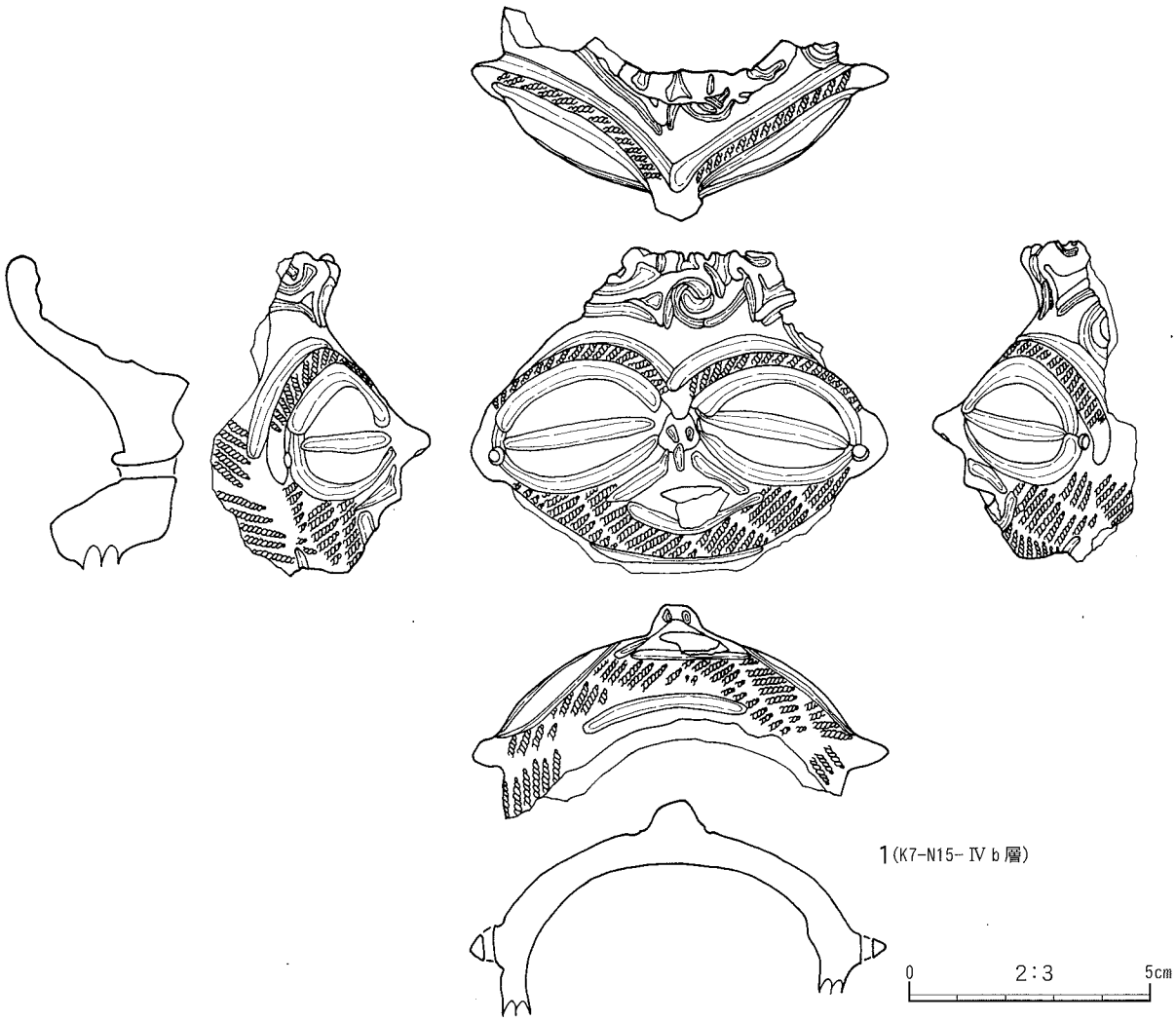
第19図　遺物包含層出土石器（3）



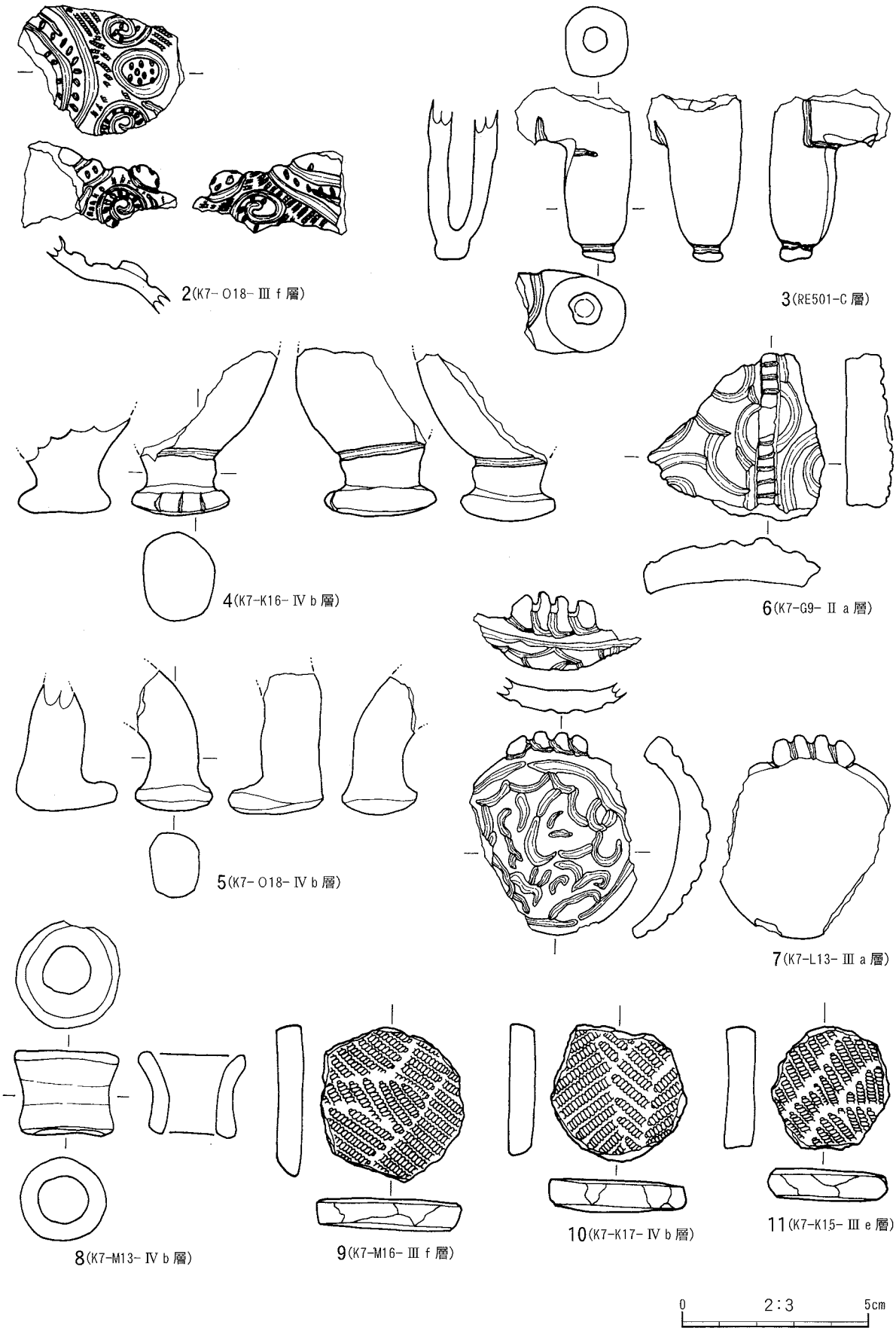
第20図　遺物包含層出土石器（4）

土　製　品（第21図１～第22図11）　１～５は土偶の破片であり，１～４が中空，５は中実である。１は遮光器土偶の頭部である。頭頂部の装飾に羊歯状文が施される。顔面部は横～斜位の単節縄文（ＬＲ）を磨消し，入念な磨きを加え，各パーツを描き出している。目は沈線で描かれ，鼻は隆起し鼻孔をともなう。両耳部に貫通孔を有し，口は内部に貫通する。２は左肩部であり，沈線と刺突により文様が施される。３は左腕部，４・５は左脚部である。６は三角形土製品である。線刻的手法による入組文が施され，刻目を伴う縦位の隆帯により正中線が表されている。７はミニチュアの皿形土器である。口唇部に突起を持ち，線刻的手法による入組文が施される。８は臼状を呈する耳栓である。９～11は地文のみの土器片の全周縁を剥離調整した土製円盤である。

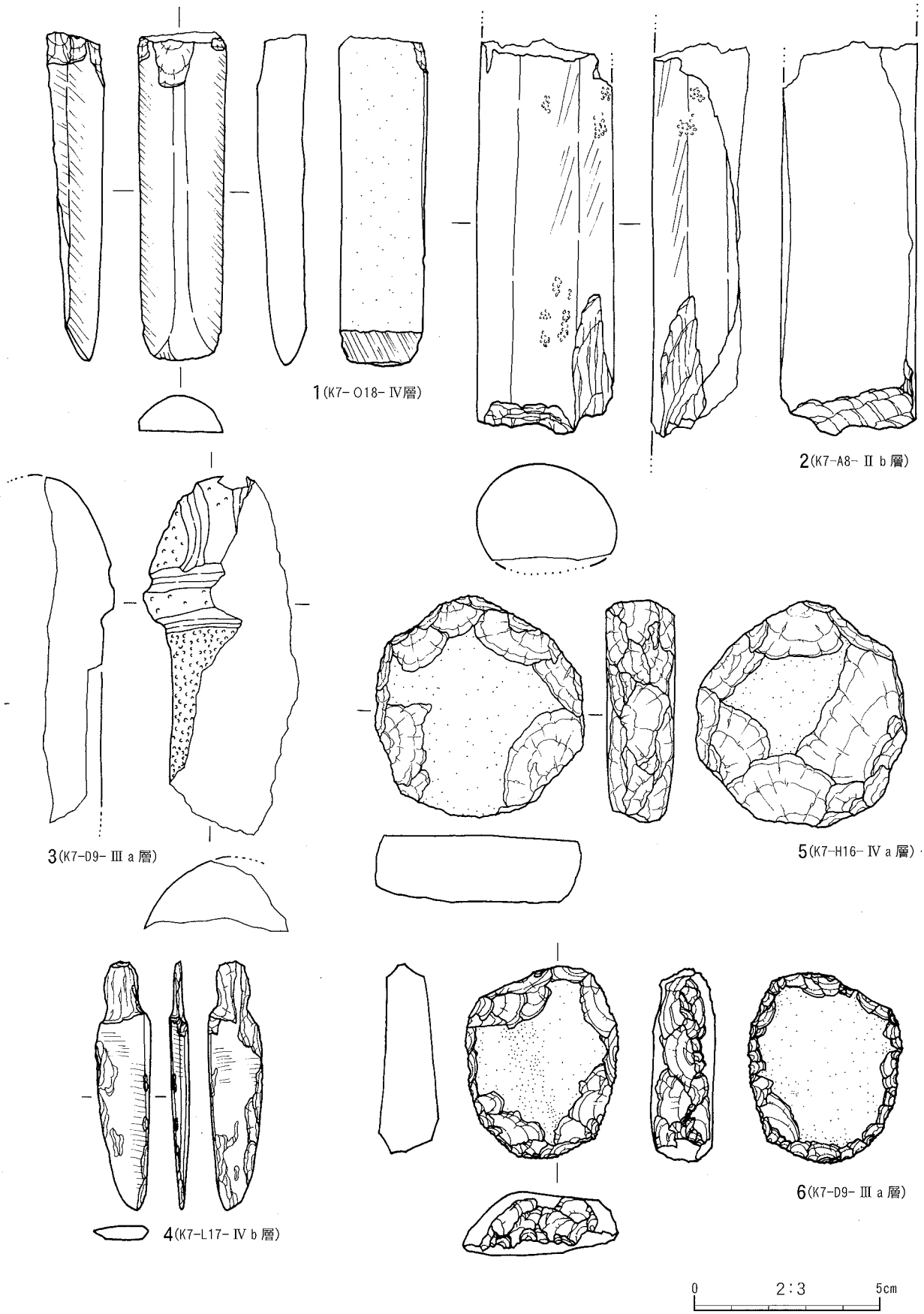
石　製　品（第23図１～第25図16）　１は石剣あるいは石棒を転用した石製品である。端部に磨面を有する。２・３は欠損した石棒である。３はくびれを持つ有溝亀頭状の頭部を有する。４は石刀状石製品である。剥離と研磨により整形された片刃を有し，若干刃反りとなる。５～15は石製円盤である。５・６・11・12・は全周縁を剥離調整するものである。７～10・13は全周縁に剥離調整及び敲打痕が認められる。９は表面にも敲打痕が認められ，14は3/4周縁に剥離調整が施される。15は全周縁に剥離調整及び敲打による調整が施される。表裏面にも敲打痕が認められ，凹石・敲石として併用されたと見られる。16は板状の長方形を呈し，１ヶの人工的な穿孔を有する石製品である。



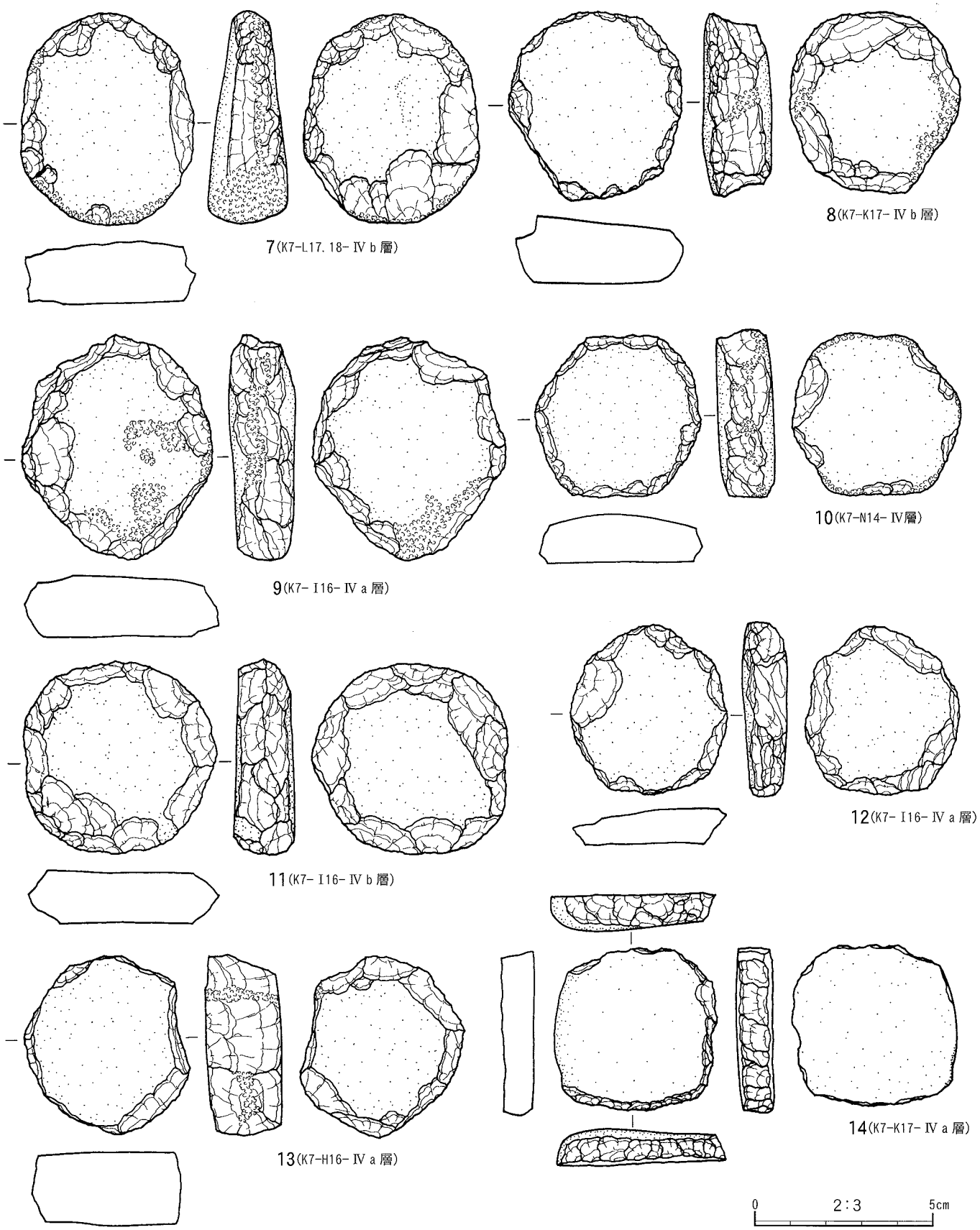
第21図　遺物包含層出土土製品（1）



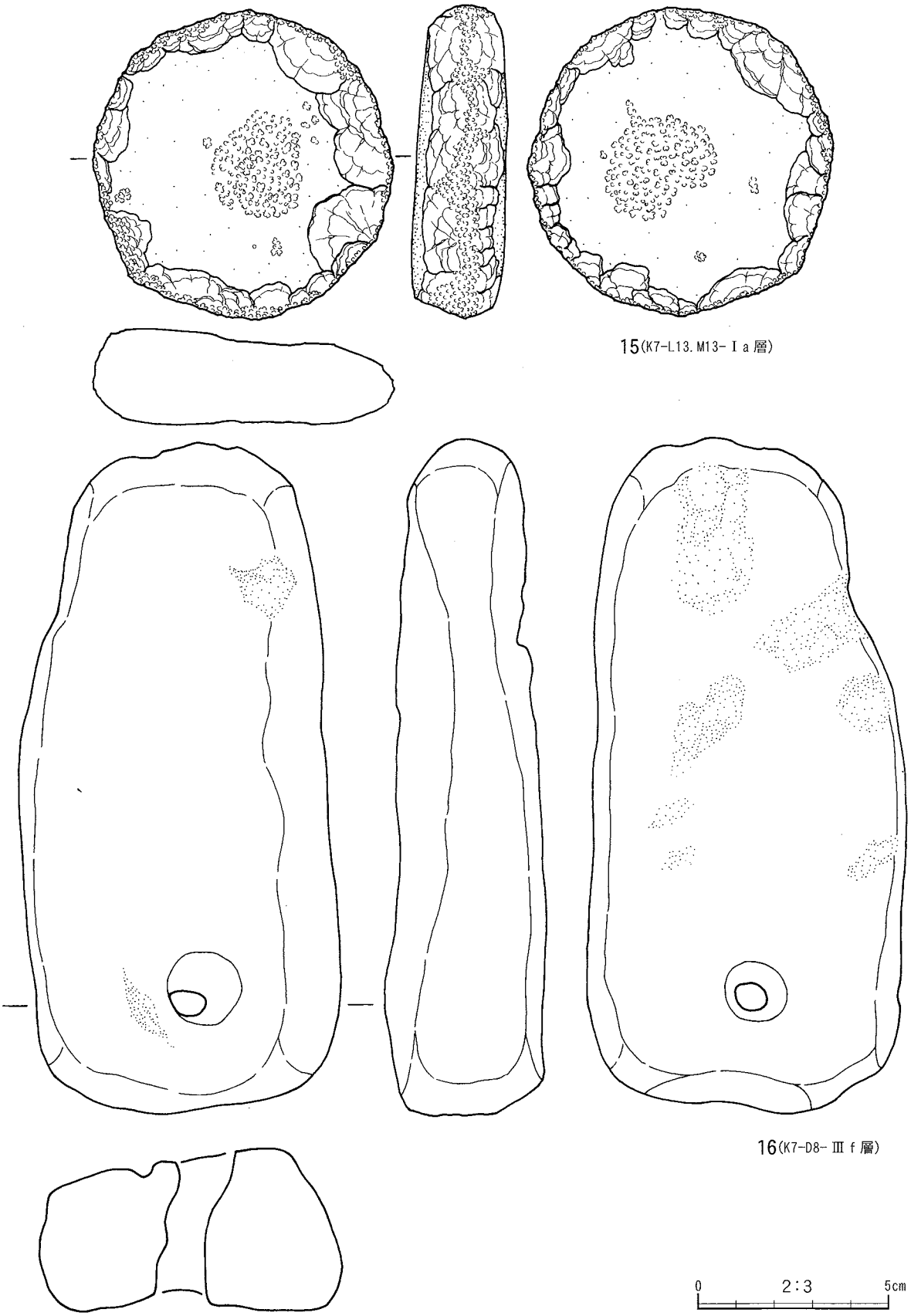
第22図　遺物包含層出土土製品（2）



第23図　遺物包含層出土石製品（1）



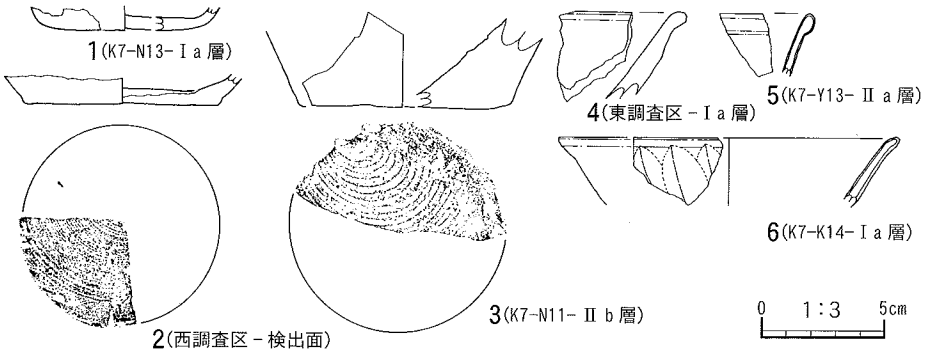
第24図　遺物包含層出土石製品（2）



第25図　遺物包含層出土石製品（3）

軽石製であり，漁撈具の浮子として使用されたものか。

中世遺物（第26図１～６）　１は手づくねによるかわらけである。２はロクロ成形によるかわらけである。推定底径は7.8cmを計り，切り離しは回転糸切り無調整である。３は須恵器系陶器の壺あるいは甕の底部である。推定底径は8.7cmを計り，切り離しは回転糸切り無調整である。４は常滑産こね鉢の口縁部である。５は龍泉窯系青磁碗である。口縁端部の断面形が丸みを持ち，緑味のやや強い釉が施釉される。14～15世紀代の所産と推定される。６は龍泉窯系青磁碗である。推定口径は13.8cmを計る。外面に広幅片切彫の鎬蓮弁文が施され，明緑青色の釉が施釉される。13世紀後半～14世紀前半の所産と推定される。



第 26 図　遺物包含層出土中世遺物

４．調査のまとめ

縄文時代　縄文時代後期～晩期と推定される土坑10基（ＲＤ206～209・検出のみ６基）・埋設土器３基・遺物包含層が確認された。土坑には埋土状況が人為堆積のものがあり，特にＲＤ209からは意図的に口縁部や底部等を打ち欠いた注口土器が出土し，土坑墓（墓域）の存在が考えられる。遺物包含層は北東から南西に緩やかな傾斜を持つ水性堆積によるもので，河川等の増水により幾度となく侵食・堆積を繰り返し形成されたと見られ，出土遺物の時期と層位の先後関係は一定していない。第Ⅳ層からは後期末葉から晩期中葉（大洞Ｂ～Ｃ1式期）の遺物が多量に出土している。

古代以降　中世と推定される掘立柱建物跡１棟（ＲＢ512)・土坑２基（ＲＤ510・511)・竪穴建物跡１棟（ＲＥ501)・溝跡１条（ＲＧ519)・柱穴及びピット36口が確認された。ＲＢ512とＲＥ501は建物の主軸方向がほぼ一致し，同時併存の可能性がある。構築時期については，第Ⅱ層出土遺物やこれまでの調査成果から12世紀後半～15世紀代の範疇に相当するであろう。また，確認されたピットには埋土状況が類似するものが数口認められ，別棟の掘立柱建物跡を構成する可能性がある。

今後，中世における近隣の佐々木館遺跡・前野遺跡・堰根遺跡・薬師社脇遺跡など各遺跡との関連を踏まえ，その城館あるいは村落としての性格を解明していくことが必要であろう。

（藤村　茂克）

Ⅲ．大館町遺跡　（第75次調査）

1．遺跡の環境

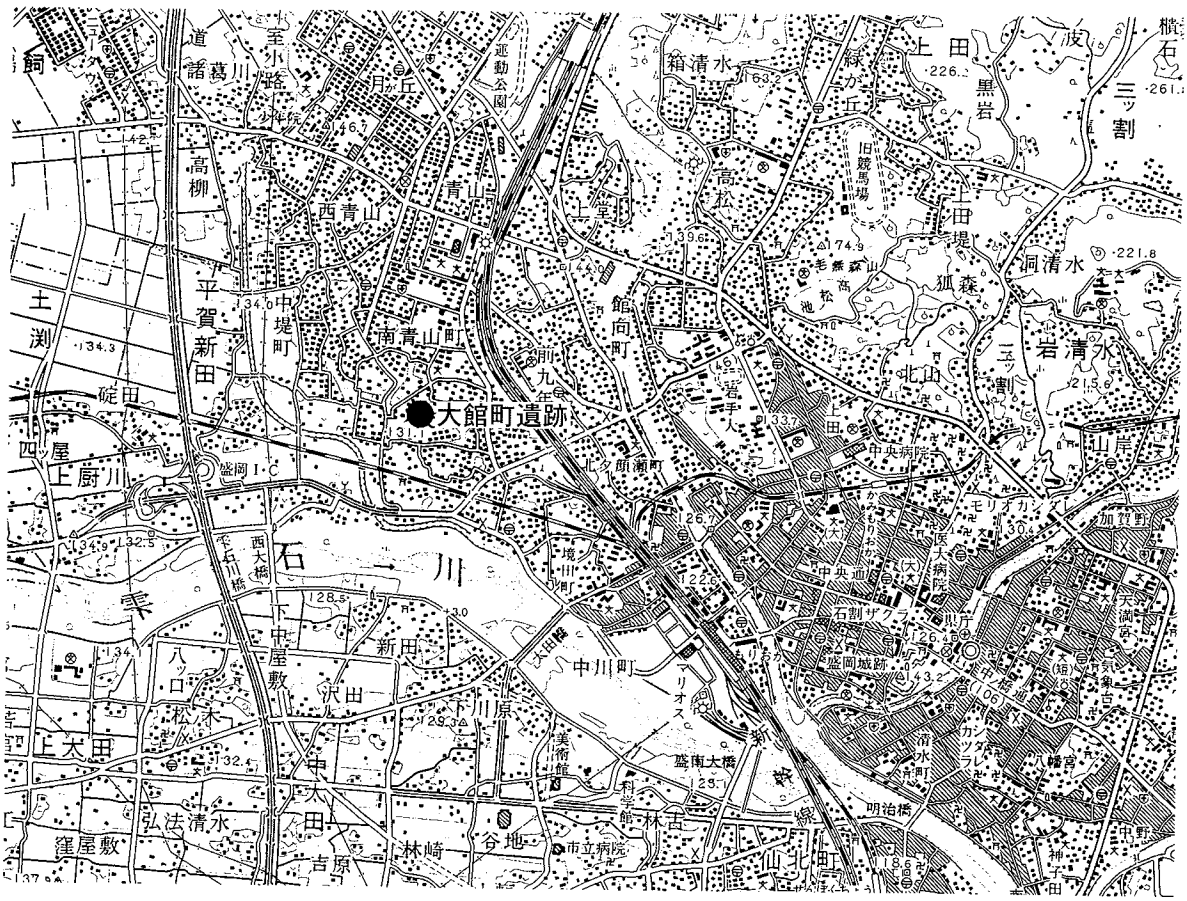
（1）遺跡の概要

遺跡の位置　大館町遺跡は，盛岡市の中心部より北西へ約3.5㎞の盛岡市大新町・大館町・北天昌寺地内に所在する，主に縄文時代中期の集落を中心とした遺跡で，遺跡の範囲は東西約220m，南北約250mと推定される。遺跡の標高は132～137mで，遺跡中央部は畑地・荒地として残されているが，遺跡北辺部・南辺部は宅地化している。

平成14年度調査区は大新町208番地内に所在し，今年度は，遺跡南東部における遺構の密度・遺物包含層の形成状況・基本となる堆積土層を把握するために範囲確認調査として477㎡を調査し，縄文時代中期の竪穴状遺構１棟，土坑１基，遺物包含層、古代の溝跡１条を確認した。

調査期間は平成14年５月７日から12月20日までである。

過去の調査　大館町遺跡は南に面する緩やかな傾斜地に立地しており，西は小諸葛川が蛇行しながら北西部から南流しており，遺跡の西端となっている。川の途中から遺跡南東部に向かって低地が入り込み，場所によっては南北の大きな段差となっている。遺跡東部は大新町遺跡と隣接しており，間に入り込む沢状の低地によって区分される。



第 27 図　大館町遺跡の位置（1:50,000）

大館町遺跡は，古くから土器・石器が出土することで知られ，昭和31年に岩手大学草間俊一教授によって初めて学術調査が実施され，昭和39年には土器変遷を明らかにするための調査が行われた。出土した土器は大館１類（前期初頭）・２類（円筒下層Ｄ式類似土器）・３類（円筒上層Ａ式類似土器）・４類（円筒上層Ｂ式類似土器）・５類（大木７ａ式）・６類（円筒上層Ｃ式類似土器）・７類（大木８ａ－２式）に細分され，特に７類とされた土器は大館町遺跡（報文では大館遺跡）を特色付ける土器としている（草間俊一 1958「盛岡市史」第１分冊１）。

岩手大学主体の発掘調査は昭和48・50・51年にも実施され，調査の結果，多数の縄文時代中期の竪穴住居跡が重複する大規模集落であることが考えられた（岩手大学考古学研究会 1978「大館町遺跡」）。

その後，昭和55年（第１次）以降75次にわたる発掘調査が盛岡市教育委員会によって継続的に行われており，これまでの調査で縄文時代中期中葉から後葉，いわゆる大木８a・８ｂ式期を主体とした竪穴住居群をはじめ，遺跡南端から南西にかけては前期末葉から中期中葉の密度の濃い遺物包含層が確認されている。また，昭和55年度の第１次調査で検出されたＲＡ102竪穴住居跡より大木８ｂ式土器が層位を異にして出土しており，上層（Ｂ層）より隆沈線による渦巻文等を特色とする土器群が（大木８ｂ－２式），下層（Ｄ層）より口縁部に隆沈線による文様帯を持ち体部に沈線による文様を施す土器群（大木８ｂ－１式）が出土するなど土器編年を考えるうえで重要な成果が得られている。

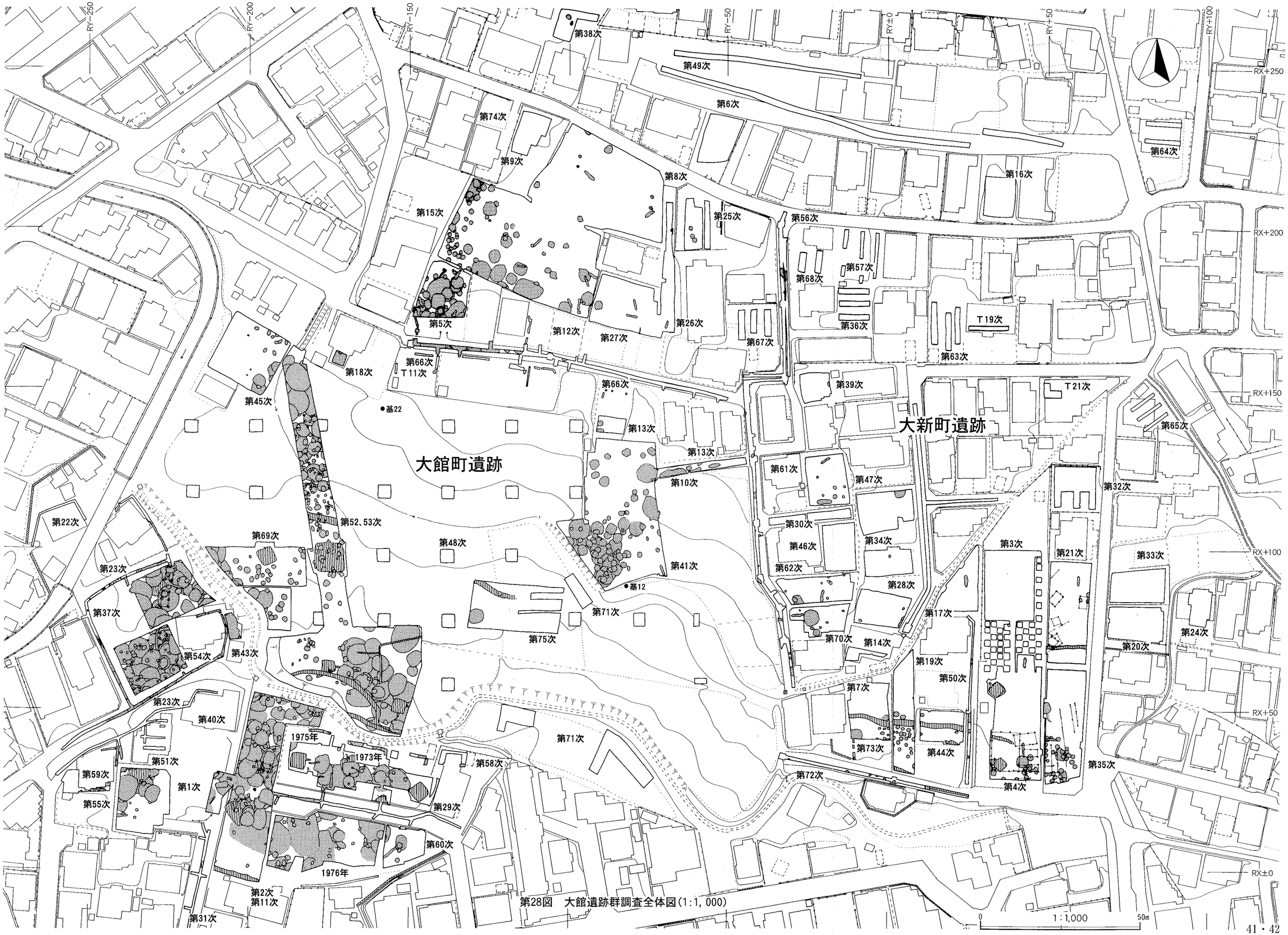
これまでの調査遺構数はおおよそ竪穴住居跡500棟余，竪穴20棟余，掘立柱建物跡15棟，土坑500基余である。これらの成果から大館町遺跡は北上川上～中流域における拠点的な集落跡であることが考えられ，その重要性から平成12年度に岩手県指定史跡に指定されている。

地　形　大館町遺跡が立地する滝沢台地は，洪積段丘に相当する岩手山起源の大石渡岩屑なだれ堆積物（滝沢泥流）を基盤とした火山性砂台地（滝沢台地）で，滝沢台地南縁には西より大館堤遺跡（縄文時代早期～中期・弥生時代・古代）・大館町遺跡（縄文時代早期～中期・古代）・大新町遺跡（縄文時代草創期～後期・古代）・小屋塚遺跡（縄文時代早期～後期・古代）・前九年Ⅰ遺跡（縄文時代早期～中期・古代）・前九年Ⅱ遺跡（縄文時代中期・古代）・宿田遺跡（縄文時代早期・続縄文・古代）・館坂遺跡（旧石器時代？・縄文時代早期）・安倍館遺跡（縄文時代草創期～中期・続縄文・中世）など旧石器時代から中世にかけての遺跡が立地している。

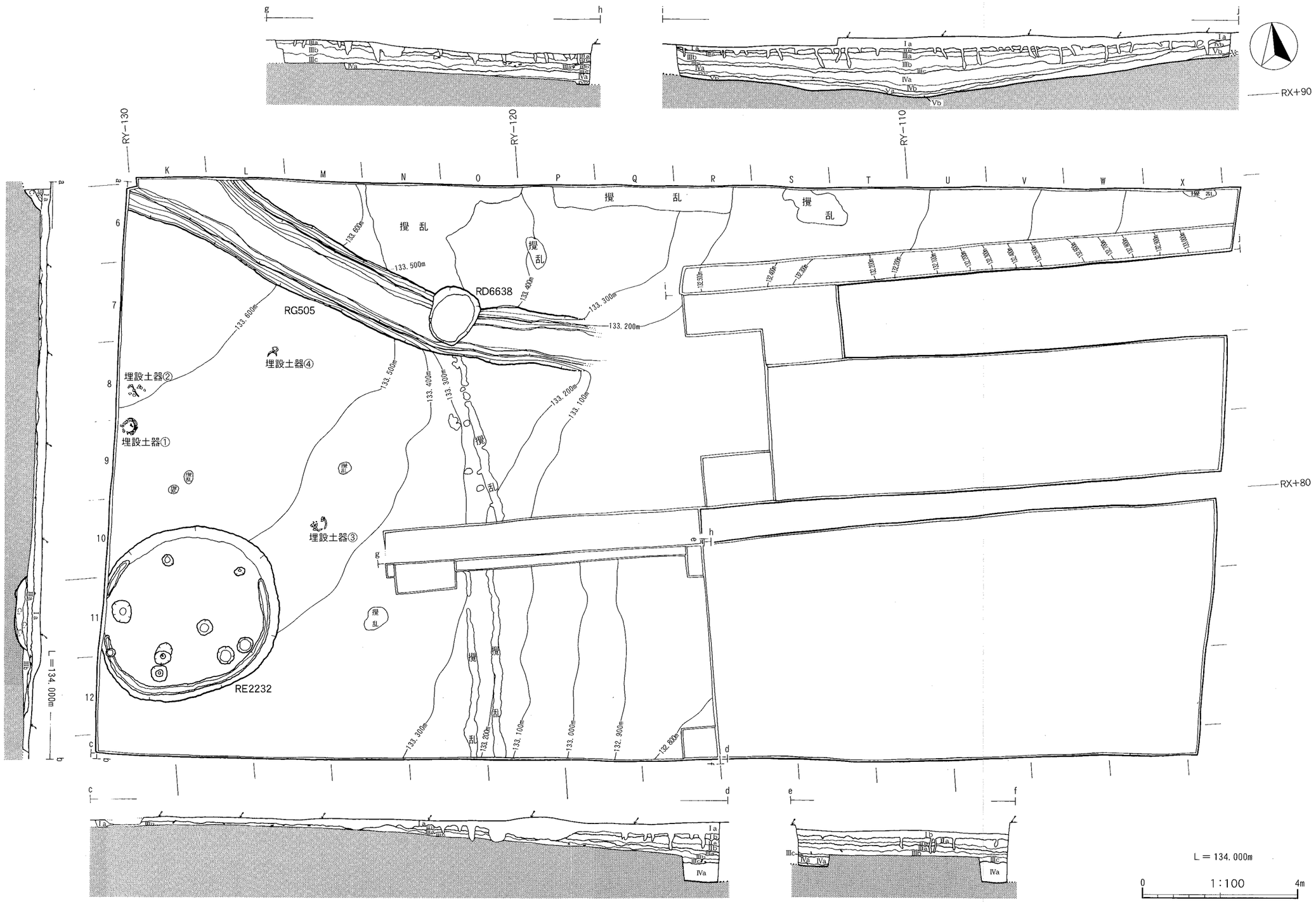
台地縁辺下に発達する沖積段丘面には稲荷町遺跡（古代末～中世・近世）・里館遺跡（中世）など比較的新しい時代の遺跡が立地する。

地　質　滝沢台地上部は厚い火山灰で覆われており，下層より外山火山灰・渋民火山灰・分火山灰が堆積する。大館町・大新町遺跡で遺構・遺物が確認されるのは，最上部の堆積物となる分火山灰層中からであり，分火山灰層は主に岩手山・秋田駒ヶ岳に噴出起源を持つ火山灰で構成される。

分火山灰層は，下層の十和田起源による八戸火山灰（層厚１～２cm）から表土直下までの堆積土を総称している。大館町・大新町遺跡では第Ⅰ層（表土・表土下に堆積する黒色土）・Ⅱ層（黒色・黒褐色土主体－生出スコリア含）・Ⅲ層（暗褐色土主体）・Ⅳ層（黒褐色土主体－赤褐色スコリア含）・Ⅴ層（暗褐色土主体）・Ⅵ層（褐色土主体－上位より柳沢軽石・小岩井軽石・八戸火山灰）の６層に大別され，遺構・遺物が確認されているのは，Ⅵ層上部（縄文時代草創期）より上位の層からである。



第28図　大館遺跡群調査全体図(1:1, 000)



第29図　大館町遺跡第75次調査区全体図

2　調査成果

（1）縄文時代の遺構・遺物

遺　構　縄文時代の遺構は，竪穴跡（ＲＥ2232），土坑（ＲＤ6638），埋設土器４基及び縄文時代中期から弥生時代中期にかけての遺物包含層が検出された。ＲＥ2232竪穴跡の埋土Ａ・Ｂ層からは大木８ｂ式土器を主体とする遺物が出土し，Ｂ・Ｃ層，床面直上からは大木７ｂ～８ａ式を主体とする遺物が出土している。調査は，層位確認のために設定したトレンチ以外はⅢ層上面で終了させているため，下部の遺構分布状況は不明である。遺構の壁やトレンチで観察した限り，竪穴住居跡等の遺構は確認されなかった。

埋設土器　埋設土器は調査区西半部で４基確認されている（埋設土器１～４）。時期は縄文時代中期中葉大木８ａ式のものである。これらの埋設土器については検出のみとし，精査は行わなかった。

ＲＥ２２３２竪穴跡（第30図）

時　期　中期中葉　　**平面形**　不整円形

規　模　南北上端4.29m・下端3.94m，東西上端4.70m，下端4.35m。検出面からの深さは0.40～0.47mをはかる。　**重複関係**　なし　　**掘込面**　Ⅲｂ層上面　　**検出面**　Ⅲｂ層上面

埋　土　自然堆積によるものと考えられるが，Ａ２層・Ｂ２層付近より土器片が集中して出土したことから，埋没過程において遺物の廃棄が度々あったことが考えられる。埋土は大きくＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ層に大別され，各層はさらに細分される。

Ａ層－黒褐色土を主体とする層で，３層に細分される。Ａ１層はスコリア粒・炭化物を少量含み，Ａ２層は粒～塊状の暗褐色土と少量の炭化物を含み，Ａ３層は粒～塊状の暗褐色土を含む層である。

Ｂ層－暗褐色土を主体とする層で，３層に細分される。Ｂ１層は粒～塊状の黒褐色土を含み，Ｂ２層は粒～小塊状の黒褐色土と多量の炭化物を含む層である。Ｂ３層はスコリア粒を多量に含む小塊状の黒褐色土と多量の炭化物を含む層である。

Ｃ層－黒褐色土を主体とする層で，３層に細分される。Ｃ１層は粒～塊状の暗褐色土と少量の炭化物を含む層である。Ｃ２層は小塊状の暗褐色土とスコリア粒を少量含む層である。Ｃ３層は粒～塊状の暗褐色土・粒状の褐色土・多量の炭化物を含む層である。

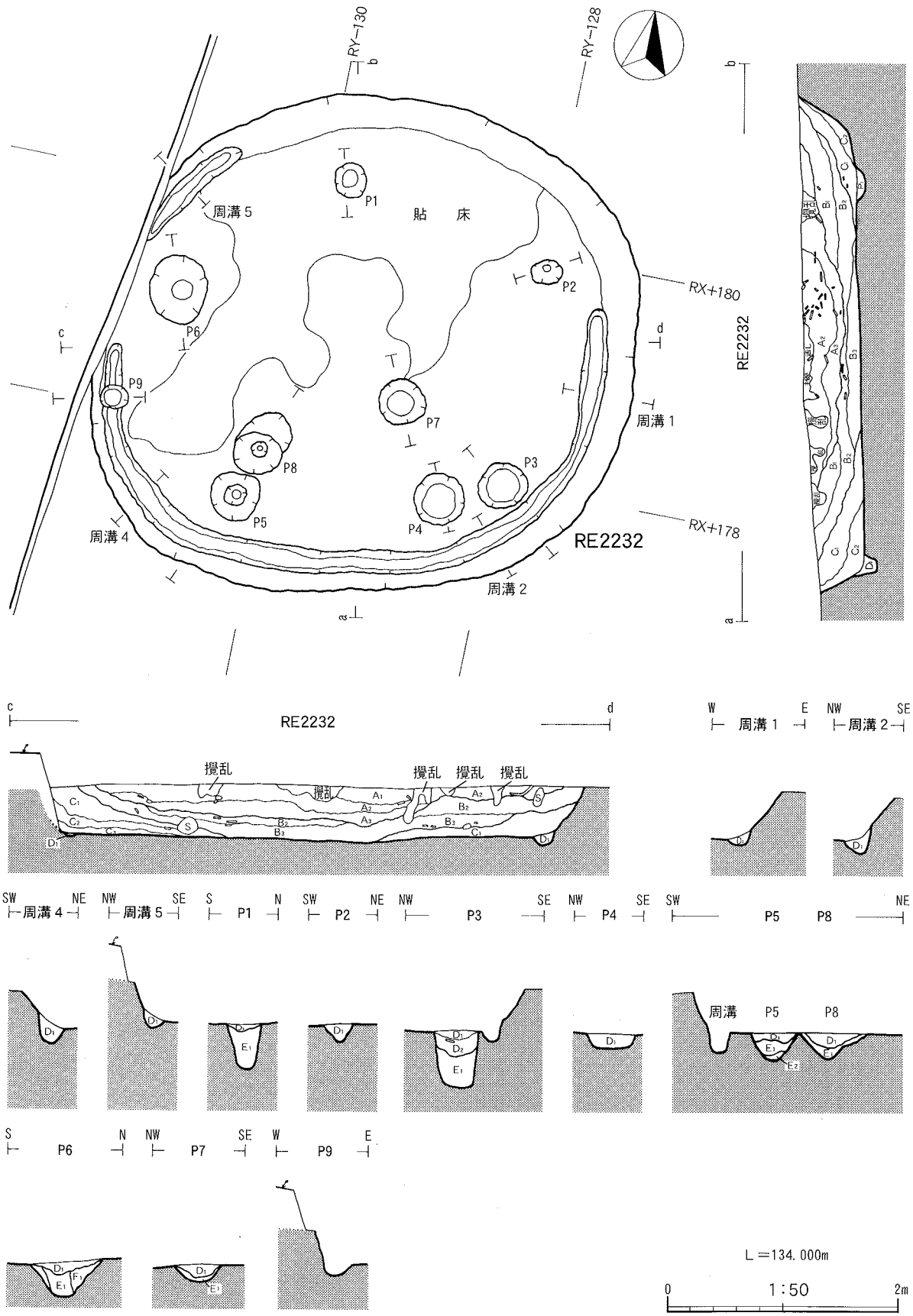
Ｄ層－Ｐ１～９に堆積する埋土である。主体となるのはスコリア粒を含む褐色土であるが，Ｃ層で観察された暗褐色土が多量に含まれる。

Ｅ層－Ｐ１・３・５～８下部に堆積する黒褐色土である。粒状の褐色土を含み，全体的に軟らかく締まりのない層である

壁の状態　直立ぎみに外傾して立ち上がる。

床の状態　ほぼ平坦で，竪穴中央付近から北壁にかけて褐色土・暗褐色土・黒褐色土による混合土が５～10㎜程の厚さで拡がり，その面は硬く締る。

ピ　ッ　ト　周溝及びＰ１～９が検出された。周溝は竪穴南壁下を中心に巡らされているが，北壁下付近では認められなかった。深さは0.05～0.15m程で，埋土はスコリアを含む褐色土・暗褐色土・黒褐



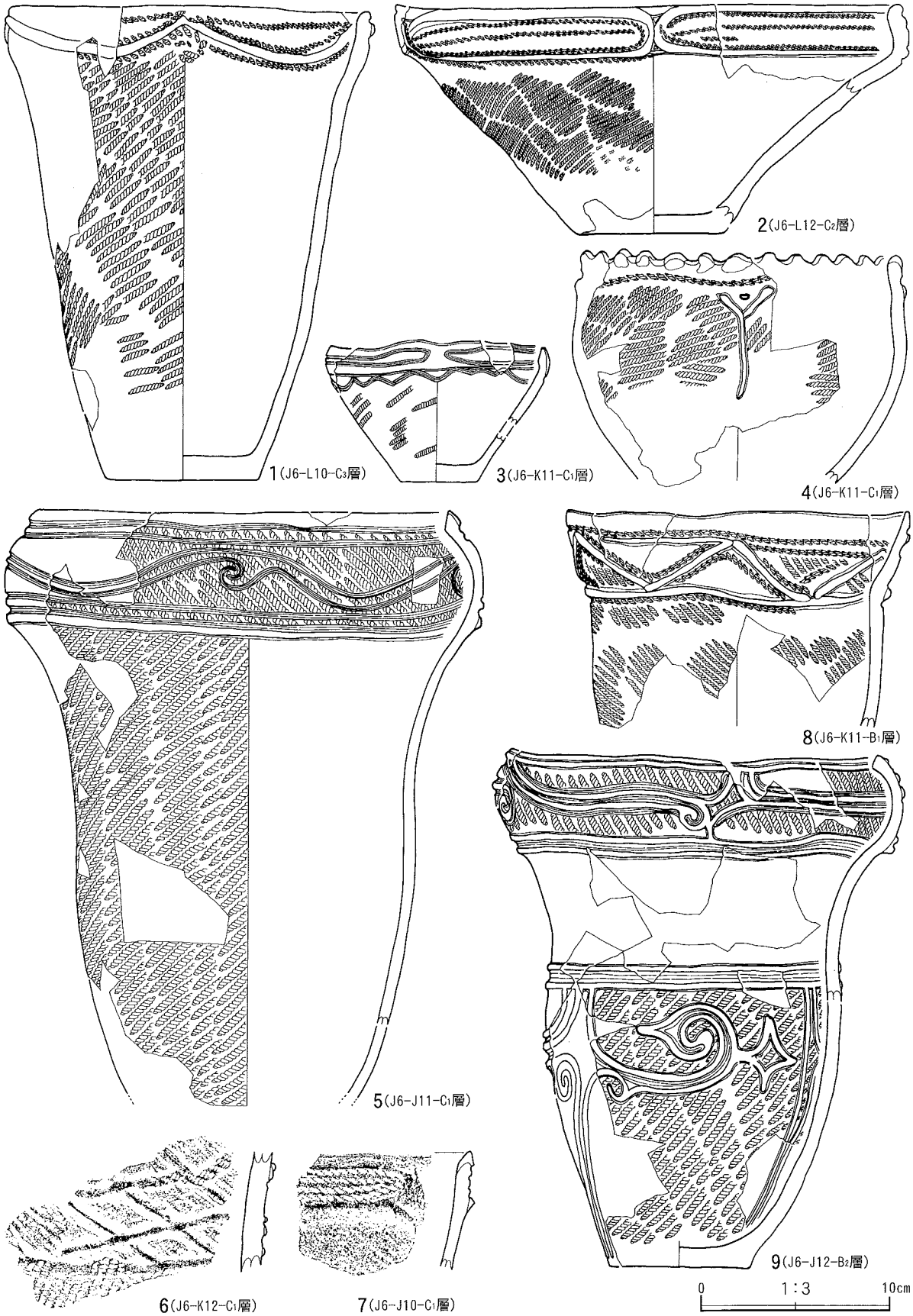
第30図　RE2232竪穴跡

色からなる混合土が堆積する。ピットは９口検出されたが，Ｐ１・３以外は掘込みが浅い。各ピットの深さは，Ｐ１－0.40m・Ｐ２－0.07m・Ｐ３－0.51m・Ｐ４－0.07m・Ｐ５－0.23m・Ｐ６－0.24m・Ｐ７－0.07m・Ｐ８－0.23m・Ｐ９－0.05mである。

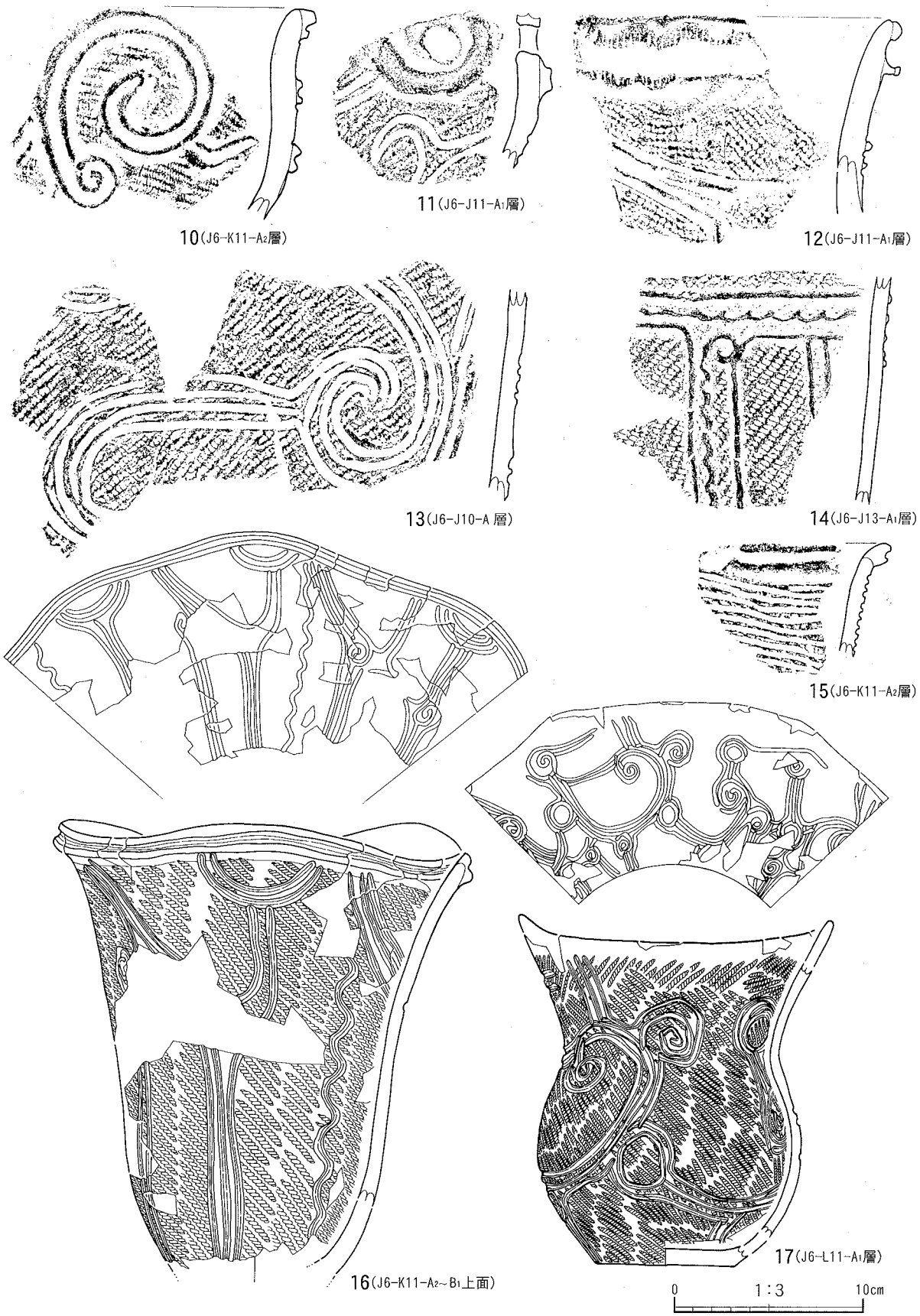
遺物の出土状況　Ｃ・Ｂ層からは大木８ａ－１？・２式の土器群が出土し，Ｂ・Ａ層からは大木８ｂ式を中心とした土器群が出土した。

出土遺物　**土器（第31図１～第32図17）**　１は頸部があまり屈曲しないキャリパー形深鉢で，口縁部の文様帯には隆線による波状文と原体圧痕が，波状文の波頂下には原体圧痕による渦巻文が施される。体部には単節縄文が斜位に施される。２は口縁部が直立する浅鉢で，口縁部には原体圧痕が付加される隆線がレンズ状に施される。３は小形の浅鉢で口縁部には沈線によるレンズ状の文様が施され，直下には鋸歯状文が施される。４は口縁部がやや窄まる深鉢である。口唇部は小波状を呈し，口唇下には一条の原体圧痕が施され，体部にはＹ字状の隆線が貼付される。５は沈線による波状文が描かれるキャリパー形深鉢で，波状文頂部には小渦巻文が加飾される。６は格子目状に隆線を施す深鉢で，隆線上には縄文が施される。７は深鉢口縁部で隆線による文様区割内に原体圧痕が横位に４条施される。８は口縁部が直線的に外傾するキャリパー形深鉢で，原体圧痕が付加される隆線による山形文が横位に施される。９は口縁部・体部に隆線による文様が施されるキャリパー形深鉢で体部には有棘を持つ渦巻文が施される。10はキャリパー形深鉢の口縁部で，口唇の突起部に隆線による大渦巻文が施される。11は孔を持つＣ字状突起を持つキャリパー形深鉢口縁部である。12は口唇下に波状の隆帯を貼付する深鉢口縁部で，隆帯には刻目が施される。13は12と同一個体と考えられるもので沈線による渦巻文が施される。14は深鉢体部で，隆線による小連弧文・渦巻文・懸垂文が施される。15は口縁部に横位の平行沈線を多条施文する深鉢口縁部である。16は口縁部が外反する小形深鉢である。口唇部には横位の隆沈線が施され，口縁部から底部付近にかけて沈線による懸垂文と小渦巻文が施される。17は頸部がくびれ口縁部が外反する小形深鉢である。口縁部から底部にかけて大渦巻文が沈線によって描かれ，周囲にも小渦巻文が描かれる。これらの渦巻文は２条１組の沈線によって連結される。

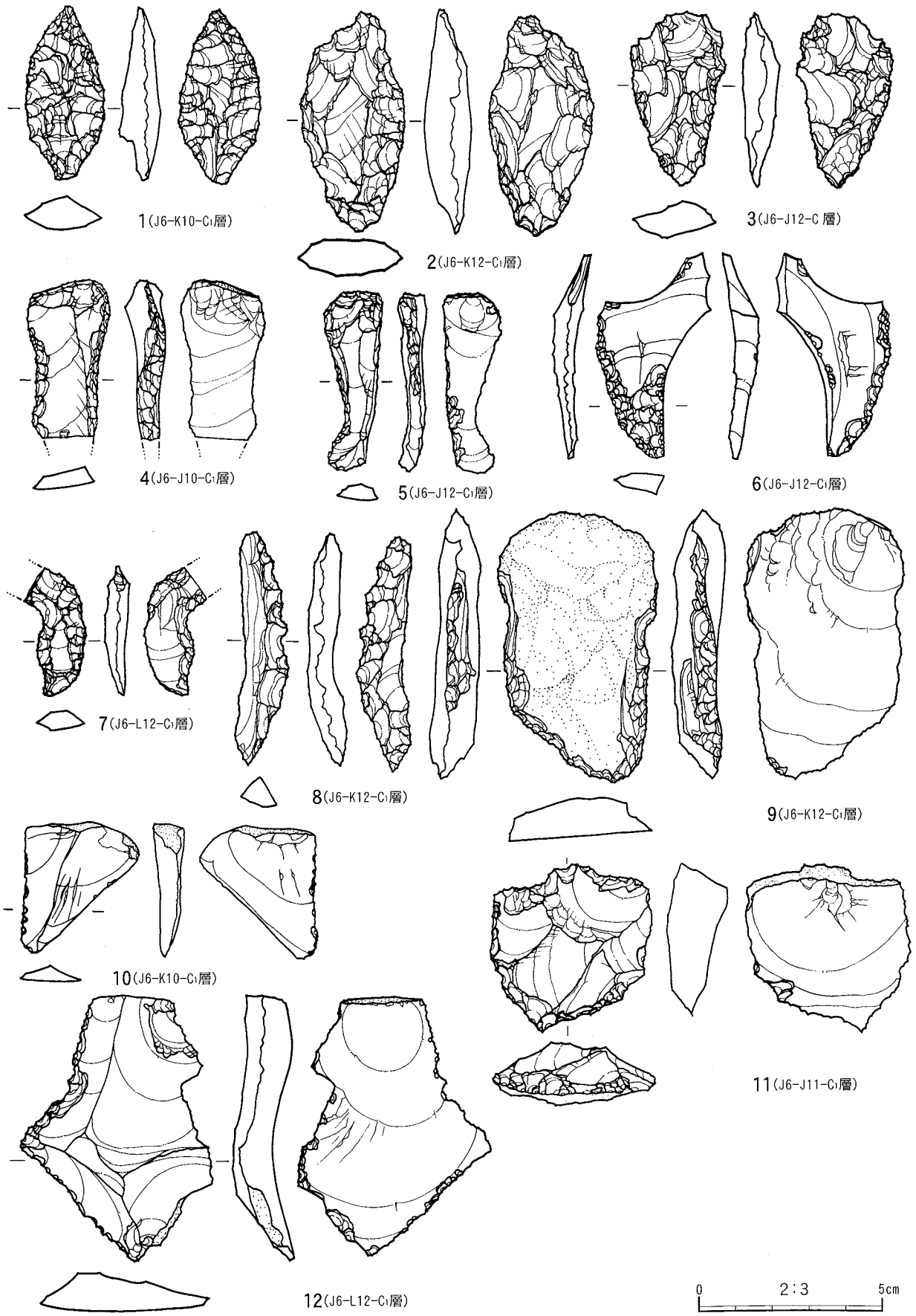
石　　器（第33図１～第37図44）　１は有茎の石槍で，破損後に基部を再加工するものである。２・３は両面調整された削器と考えられる。４・５は縦長剥片の背面両側縁に剥離調整が施される削器で，６は剥片末端部・片側縁に剥離調整が施される削器である。７は異形の両面調整石器である。８は稜のある縦長剥片末端部に微細な調整を施した石錐である。９は礫皮面を残す剥片を加工した掻器で剥片下端を剥離によって丸く加工する。10は側縁に刃こぼれが観察される剥片である。11は背面右側縁・下端に調整剥離が施され，12は背面右側縁に調整剥離が施される削器である。13は薄く細長い石核を利用した削器で，14は腹面下端を尖らせた削器である。15は基部に抉りのある石鏃である。16は縦長の石匙で背面左側縁は45°以上の傾きを持つほか，先端部が棒状に再加工されていることから石匙から石錐へ転用されている可能性がある。17は両面調整された剥片の腹面左側縁・下端に調整剥離を施した削器または掻器である。18は礫皮面を残す石核で，平坦面を作出し目的とする剥片を剥離する。19・20は先端部を突出させる削器で，18は背面右側縁を除く側縁に剥離調整を施し，腹面基部にも剥離を施したものである。21は礫皮面を残す剥片に剥離を施した両面調整石器である。22は側縁に礫皮面を残す切出状の刃部を持つ削器で，全周縁に部分的な剥離調整を施す。23は石箆の基部である。24は背面・腹面に礫皮面を残す半両面調整石器で，



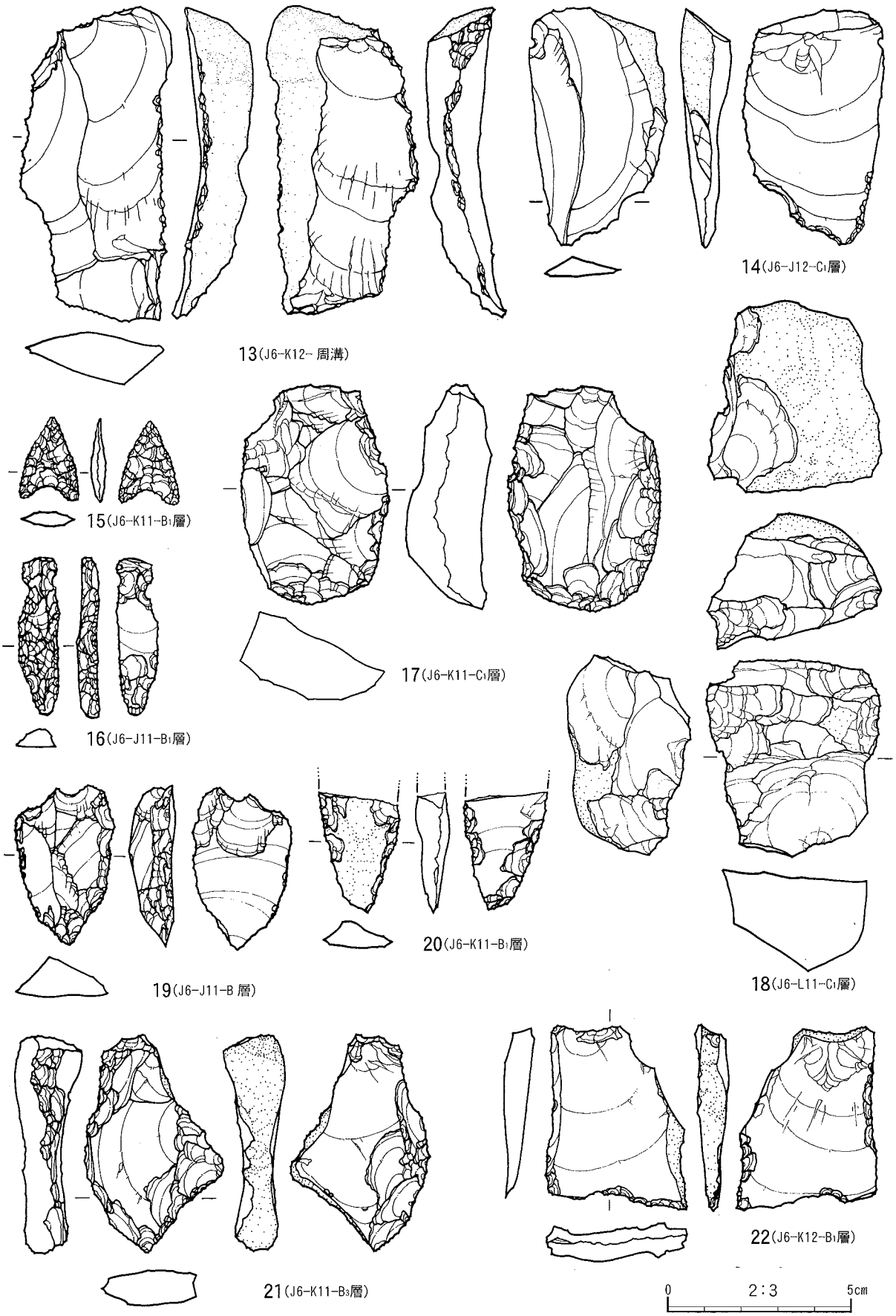
第31図　RE2232竪穴跡出土土器（1）



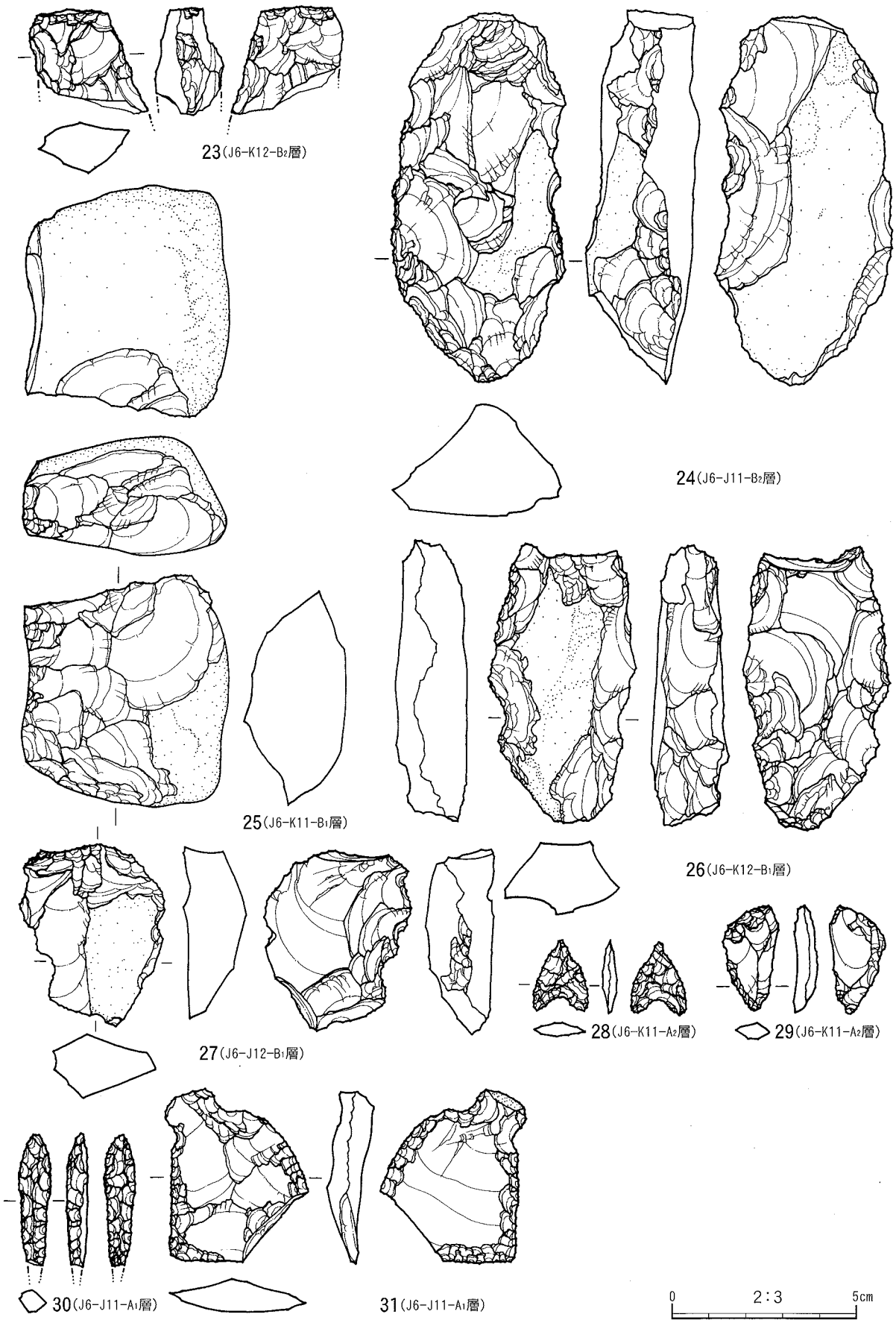
第32図　RE2232竪穴跡出土土器（2）



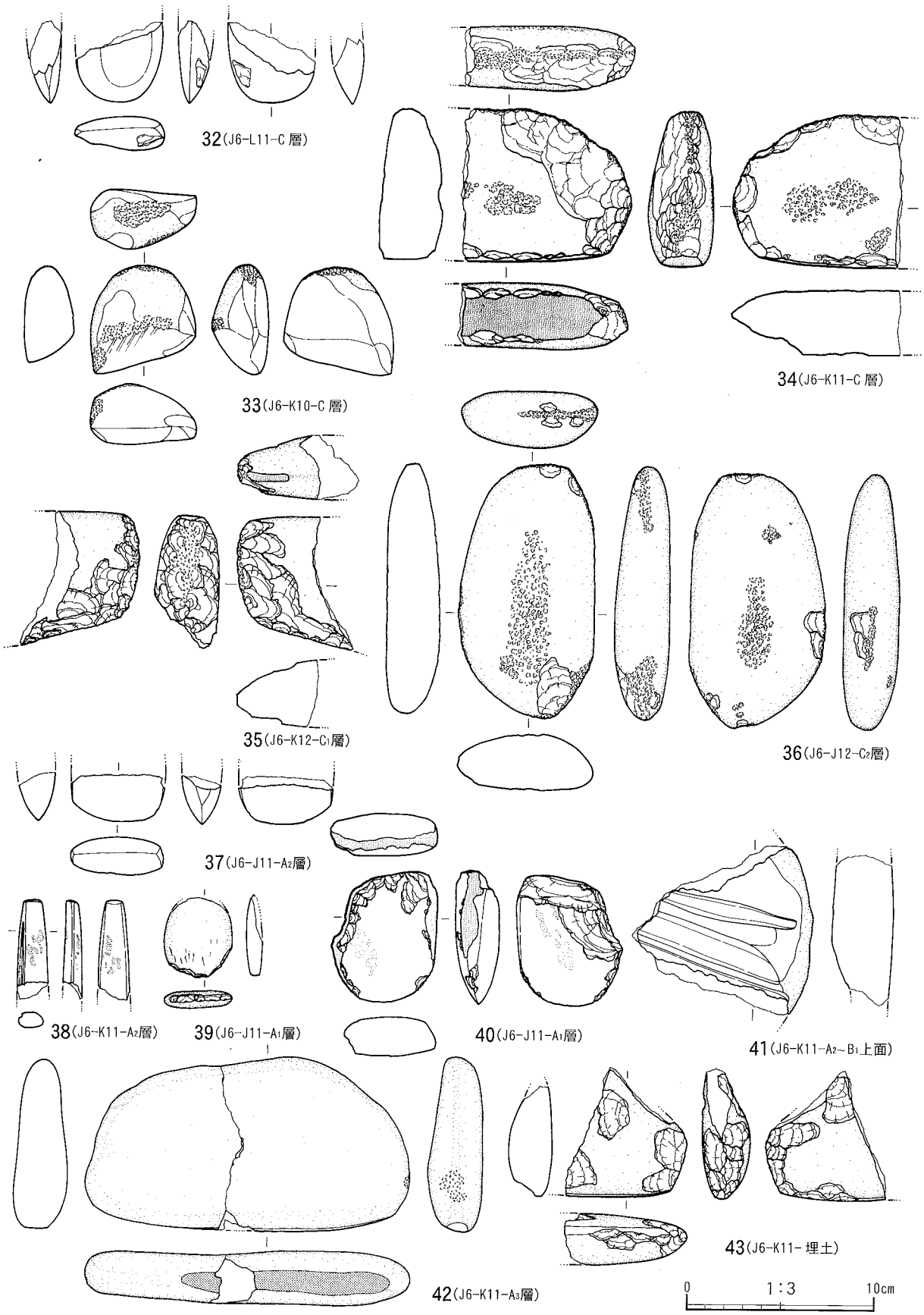
第33図　RE2232竪穴跡出土石器（1）



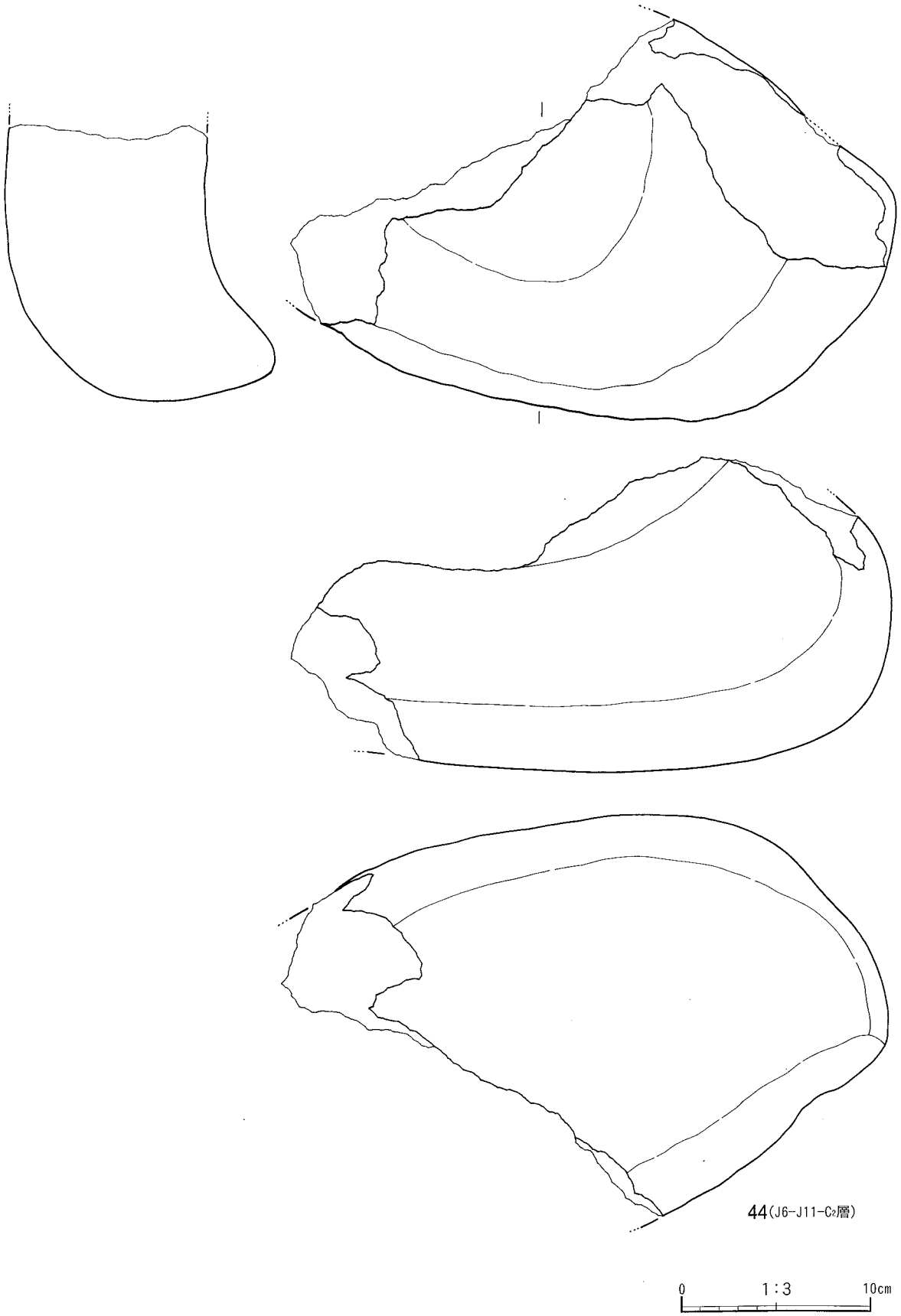
第34図　RE2232竪穴跡出土石器（2）



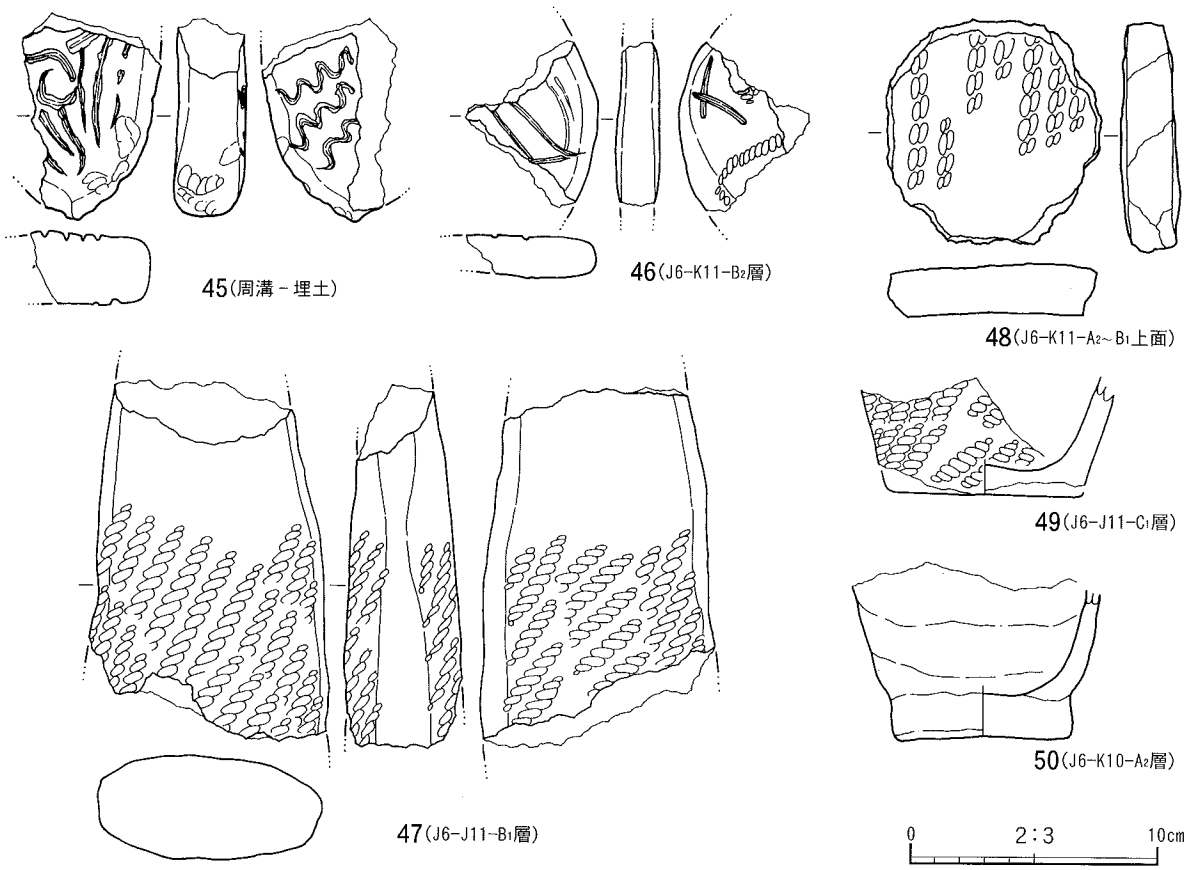
第35図　RE2232竪穴跡出土石器（3）



第36図　RE2232竪穴跡出土石器（4）



第37図　RE2232竪穴跡出土石器（5）



第38図　RE2232竪穴跡出土土製器

背面下端に入念な剥離が施され，大形の掻器または打製石斧の可能性をもつ。25は礫皮面を残す石核である。26は背面に礫皮面を残す半両面調整石器または石核で，背面両側縁は約45°の傾きを持ち，その側面から腹面への剥離を行う。27は腹面左側縁に抉りを持つ石器である。28は抉りのある石鏃で，尖端部は突出する。29は側縁に調整剥離を施した石錐で，30は両面に入念な押圧剥離を施した石錐である。31は石匙で切出状の刃部を持つ。背面・腹面の全周縁に押圧剥離が施される。

32は基部が欠損する磨製石斧である。33は扁平な円礫の一辺に刃部を持つ磨製石斧で，背面に礫皮面を残し，基部・背面頂部に敲打痕が認められる。34は半円形を呈した敲打磨石で約１／２が欠損する。35は端部のみが残存する敲打磨石である。36は両面に敲打痕を持ち，長軸両端に衝撃剥離痕が認められる。37は磨製石斧で刃部のみが残存する。38は刃部が欠損する擦切の磨製石斧で，側縁に擦切痕が残される。

39は円礫端部に剥離が施される礫石器である。40は再加工された磨製石斧である。41は破損した石皿を砥石として転用したものである。42・43は敲打磨石で，42は完形で43は端部のみ残存するものである。44は約１／３が欠損する石皿である。

土 製 品（第38図45～50） 45は板状土偶の脚部下端付近の部位で，表面には沈線による渦巻文等が描かれ，裏面には波状文が数条描かれる。46は板状土偶腰部と考えられる部位で，両面には沈線による文様が描かれる他，裏面には原体圧痕が見られる。47は両端を欠く斧状土製品で，両面には単節縄文が施される。48は土器片を打ち欠いて加工した土製円盤である。49・50はミニチュア土器である。49は単節縄文が施され，50は無文のものである。

ＲＤ６６３８土坑跡（第39図）

時　　期　中期後葉　　**位置**　調査区北部　　**平面形**　不整楕円形

主軸方向　N34° W　　**規模**　長軸上端1.49m・下端1.29m，短軸上端1.28m・下端0.93m。

重複関係　ＲＧ005溝跡に切られる。　　**掘 込 面**　削平　　**検 出 面**　Ⅲａ層上面

埋　　土　Ａ～Ｄ層の４層に大別され，Ａ・Ｂ層はさらに３層に細分される。

Ａ層－黒褐色土を主体とする層で，３層に細分される。Ａ１層は炭化物を少量含み，Ａ２層はスコリア粒，少量の炭化物を含み，Ａ３層は塊状の暗褐色土を含む層である。全体的にやや硬く締まりのある層である。

Ｂ層－黒褐色土と暗褐色土を主体とする層で，３層に細分される。Ｂ１層は黒褐色土を主体に塊状の暗褐色土と粒状の褐色土を含む層である。Ｂ２層は暗褐色土を主体に小塊状の褐色土と多量のスコリア粒を含む層である。Ｂ３層は黒褐色土を主体にスコリア粒を多量に含む層である。

Ｃ層－スコリア粒を多量に含む黄褐色土を主体とする層で，粒～塊状の暗褐色土と少量の炭化物を含む層である。

Ｄ層－スコリア粒を含む黒色土を主体とする層で，塊状の黄褐色土・暗褐色土と少量の炭化物を含む層である。

壁の状態　検出面から底面までの深さは０.41mをはかり，壁は外傾して立ち上がる。

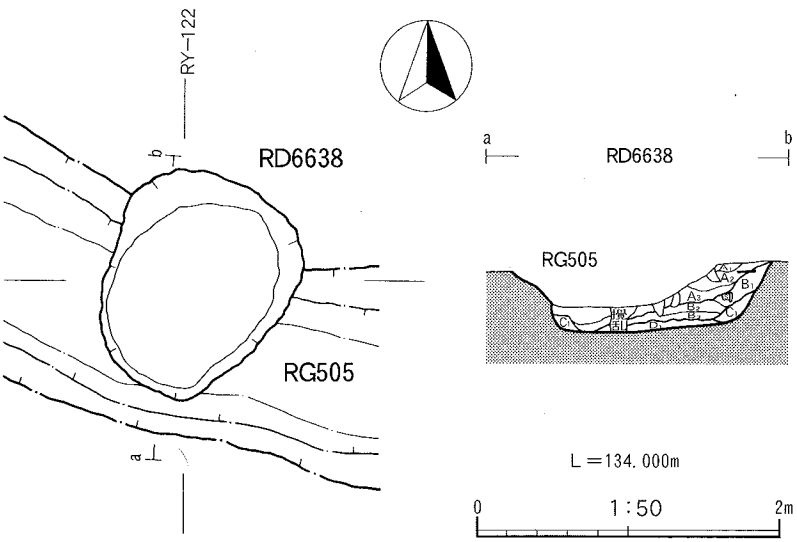
底面の状態　ほぼ平坦

遺物の出土状況　Ａ層を中心に，縄文時代中期後葉の深鉢片が出土している。

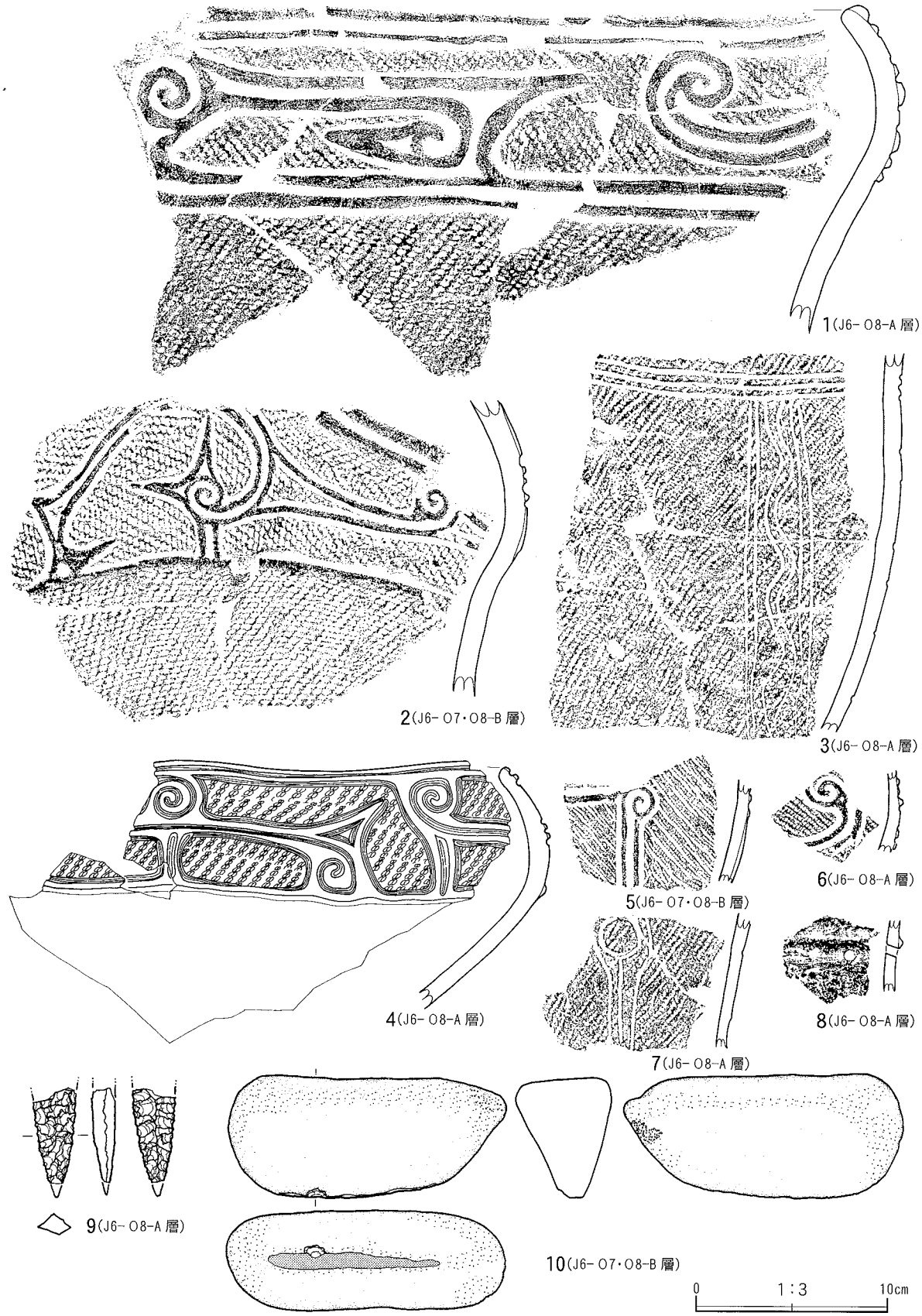
出土遺物（第40図１～10）　１・２はキャリパー形深鉢口縁部で，１の口縁部文様帯には隆線による渦巻文と有棘文が横位に施文される。２は口縁部に突起を持つキャリパー形深鉢と考えられ，突起下に隆沈線による有棘のある大渦巻文が施され，さらに他の渦巻文と連結される。３は深鉢体部片で上部には沈線による横位平行線状文が施され，前述した文様より垂下する懸垂文・縦位の波状文が施される。４は浅鉢で口縁部～体部下半にかけての部位である。口縁部文様帯には隆沈線による小渦巻文が配され，各小渦巻文は横位に連結される。５～７は深鉢体部片で５・６は隆沈線による渦巻文が施され，７は沈線による円文と懸垂文が施されるものである。８は孔を穿つ樽形土器？で上部には横位の隆線が施される。

９は石錐先端部で両面には入念な押圧剥離が施される。

10は断面が三角形を呈し，一辺に磨面を持つ敲打磨石である。磨面の側縁には衝撃によって生じた剥離痕が見られる。



第39図　RD6638土坑



第40図　RD6638土坑出土遺物

（２）古代の遺構

ＲＧ５０５溝跡（第41図）

位　　置　調査区北辺より検出され，溝の形状等から第52次調査で検出されたＲＧ505溝跡の延長部と考えられる。

平 面 形　直線状に東西に延びる。

規　　模　検出された長さは12.08mをはかり，幅は上端1.45～1.89m・下端0.72～1.00mをはかる。

重複関係　ＲＤ6638土坑を切る。　**掘込面**　削平　**検出面**　Ⅲａ層上面

埋　　土　Ａ～Ｃ層の３層に大別され，各層はさらに細分される。

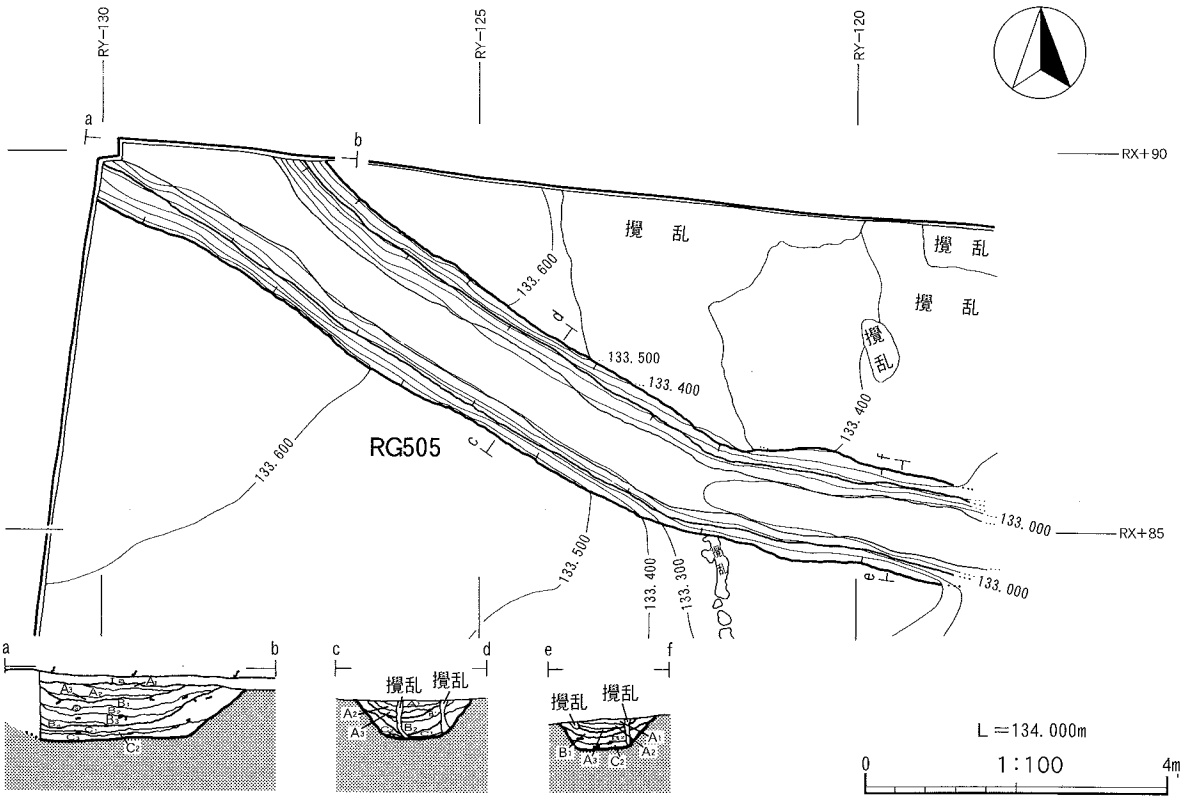
Ａ層－黒色土を主体とする層で，３層に細分される。Ａ１層は粉状の白色火山灰が粒状に含まれ，Ａ２層では塊状となる。Ａ３層は白色火山灰が含まれない。

Ｂ層－黒褐色土を主体とする層で，４層に細分される。Ｂ１層は黒褐色土を主体に塊状の暗褐色土を含む。Ｂ２層は小塊状の暗褐色土と小量のスコリア粒を含む。Ｂ３層は塊状の暗褐色土を多量に含み，Ｂ４層は暗褐色土とスコリア粒を多量に含む層である。

Ｃ層－スコリア粒を多量に含む暗褐色土を主体とする層で，Ｃ１層は塊状の暗褐色土と多量の炭化物を含む層である。Ｃ２層は鉄分の沈殿がみられる暗褐色土で，Ｃ３層は鉄分がさらに浸透して硬くなる層である。

壁の状態　底面より直線的に外傾する。　**底面の状態**　平坦

出土遺物　図示していないが，縄文時代早～晩期・弥生時代前期・奈良～平安時代に相当する土器片が出土している。



第41図　RG505溝跡

（３）遺物包含層出土遺物

調査区内にトレンチ（Ａ～Ｃ）を設定し，層の堆積状況を調査した。調査区西半部（ＲＹ－120以西）は表土下でⅢｂ層が検出されるなど，過去に削平を受けていたことが確認された。

東半部の沢状低地ではⅠ層からⅥ層までの層序が確認され，Ⅰｂ～Ⅱａ層より縄文時代後・晩期，弥生時代前期～中期にかけての土器が少量出土し，Ⅱｂ層からは縄文時代中期後葉の大木８ｂ式土器を中心とした縄文時代中期の遺物が多量に出土した。

Ⅲ層はａ・ｂ・ｃの３層に細分され，全層より縄文時代中期の遺物が多量に出土するが，Ⅲａ層からは大木８ａ式土器を中心とした遺物が比較的多く出土し，Ⅲｃ層では大木７ａ式土器が主体を占めるようになる。Ⅲｂ・ｃ層については調査を層位確認のみにしたため，全体の状況を窺うことはできなかったが，上部からの攪乱も少なく遺物包含層が良好な状態で保存されていることが確認された。

なお，本概報では土器・土製品を掲載し，石器については別途報告するものとした。

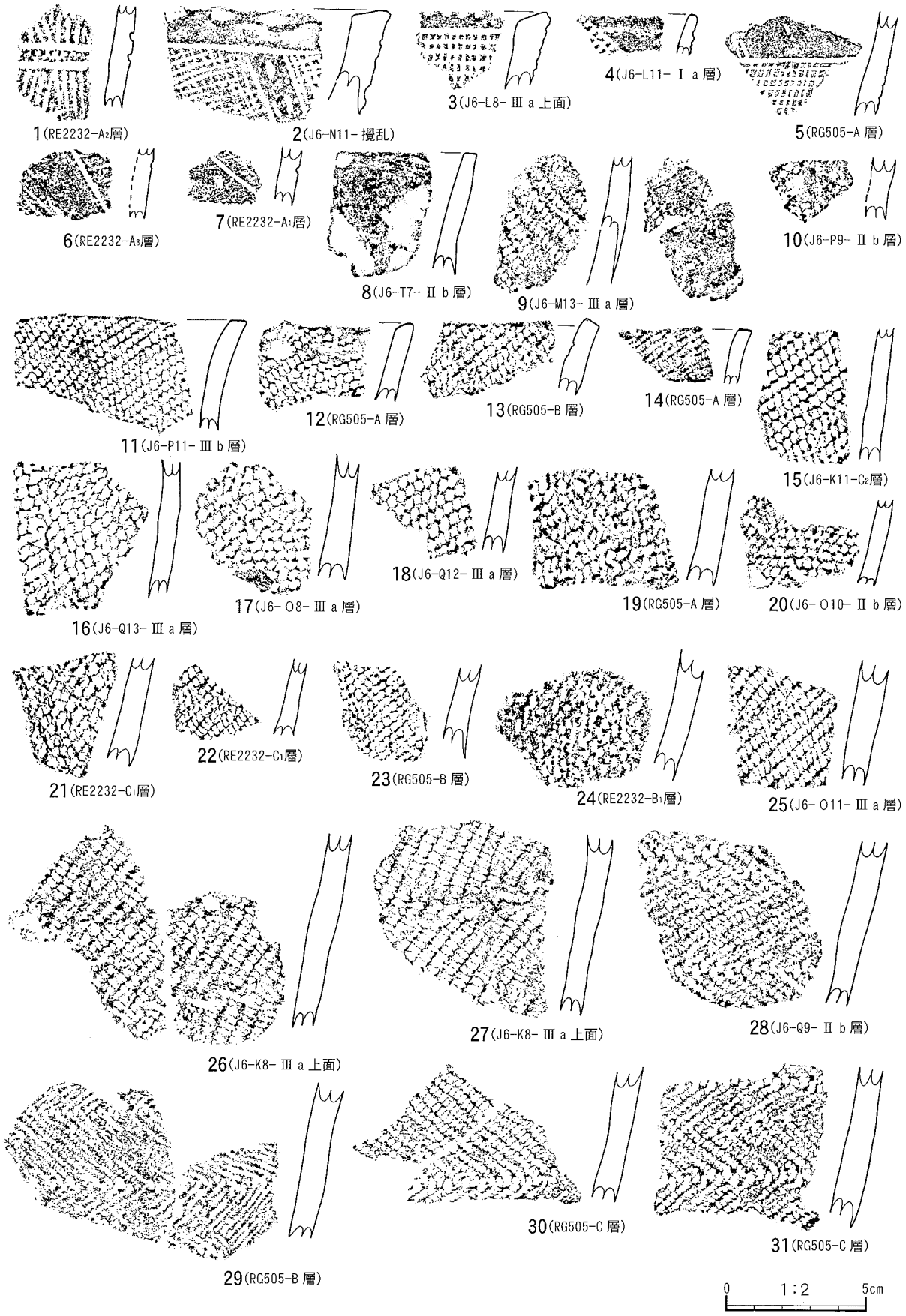
縄文～弥生時代の土器（第42図１～48図94）

早　期　１は日計式に類似する押型文土器で，器面には重層Ｖ字状文と横位の平行沈線が施される。３～９は三戸式に類似する沈線文土器で，帯状格子目文が施される。２～４は口縁部，５～７は体部片である。８は１の土器と胎土・焼成が近似する無文土器である。９は赤御堂式に類似する表裏に縄文が施される土器である。10は９の土器と胎土・焼成が近似する土器である。

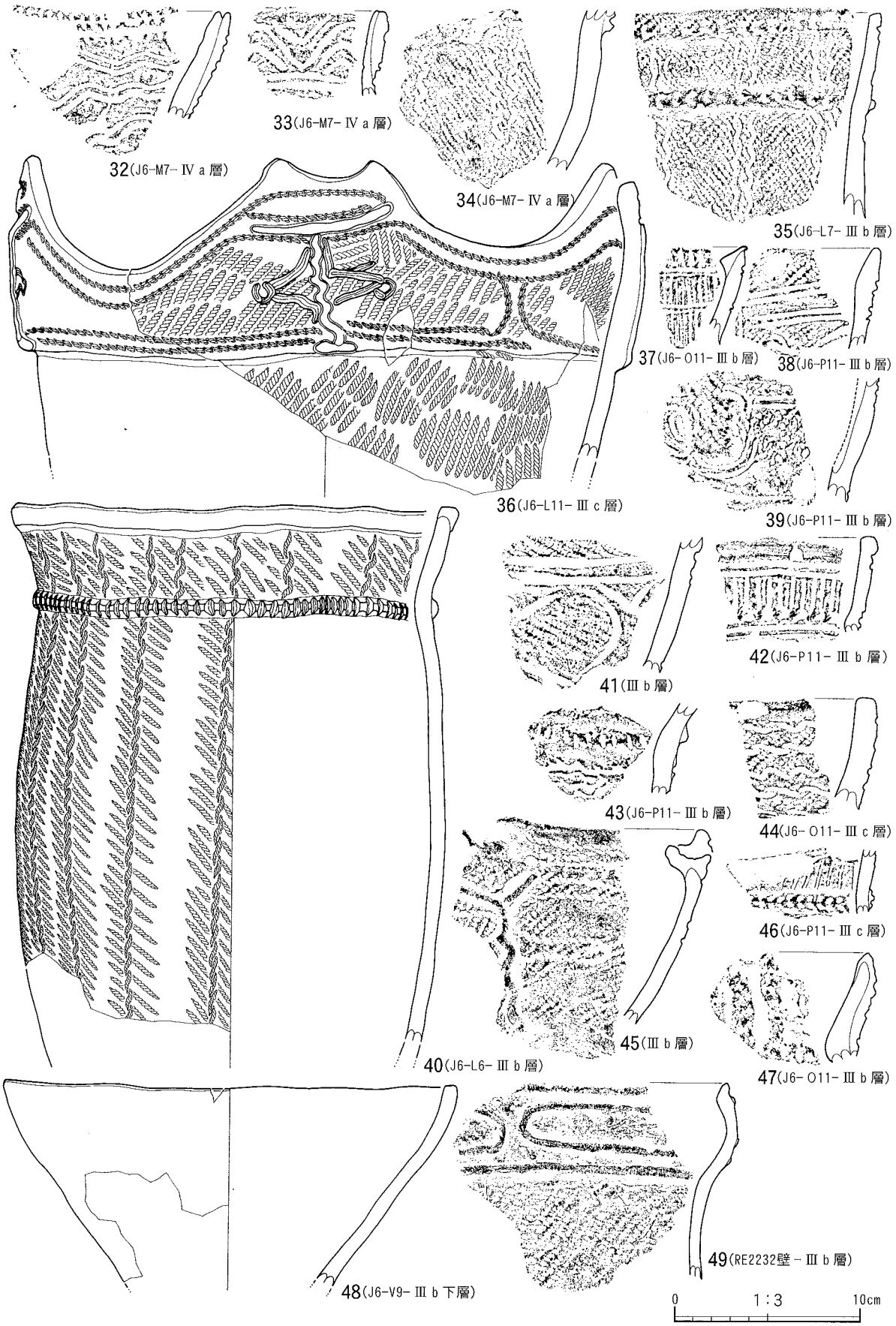
前　期　11～25は胎土に多量の繊維を含む土器群で千鶏Ⅱ式に類似する。11・12・15～24は組紐縄文が施される深鉢で，11・12は口縁部片である。13・14・25は単節縄文が施される深鉢で，13は口縁部片である。26は単節縄文が横位に施され，27～31は羽状縄文が施される深鉢体部片である。32は大木６式に類似する深鉢口縁部片である。口唇部には刻目が施され，口縁部文様帯には２条１組の沈線による波状文が横位に描かれる。

中　期　第75次調査において最も多量に出土した時期のものである。33～35・37～44・46～48・50・51・53は大木７ａ式，36は大木７ｂ式，52は大木８ａ－１式，45・49・54～66は大木８ａ－２式，67・69は円筒上層Ｅ式と関連を持つ大木８ａ－２～８ｂ－１式段階の土器、75は大木８ｂ－１式，70～73は大木８ｂ－２式，74・76は大木８ｂ－３式と考えられる。

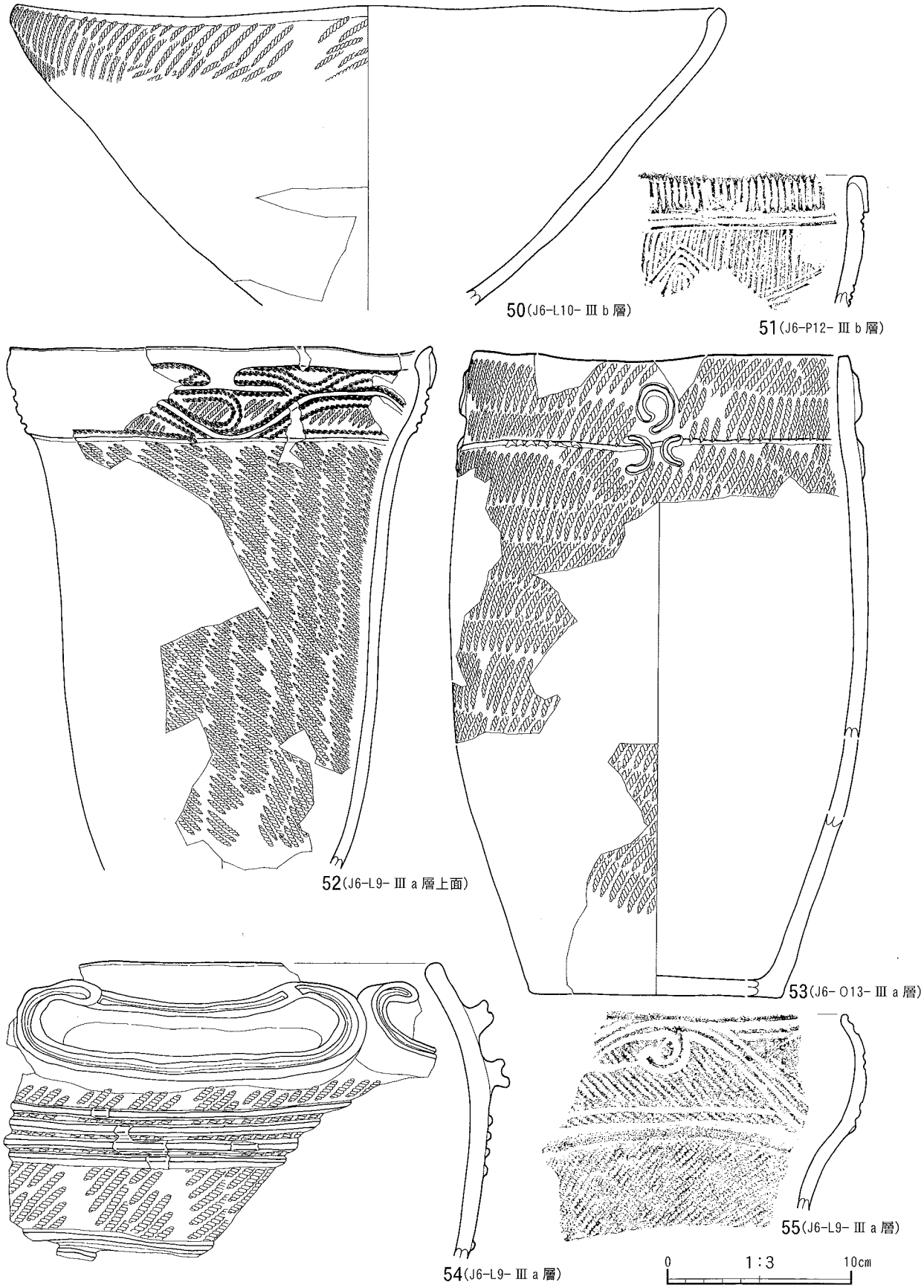
33は沈線による連弧文が描かれる深鉢口縁部である。34・35は隆帯にＣ字状の刺突を施す深鉢である。36は弁状突起を持つキャリパー形深鉢で，突起下に垂下する隆線を貼付し棘状の沈線を施す。37・38は深鉢口縁部片で，37の口唇部には刻目が施される。39は隆線による楕円区画文が施される深鉢である。40は口縁部が外反し体部がやや膨らむ深鉢である。頸部には刻目が施される隆帯が巡らされる。41は沈線による円文が施される深鉢体部片である。42・46は縦位平行沈線が施される深鉢で，43は隆帯に刻目を持つ深鉢頸部である。44は結束縄文が施される深鉢口縁部片で，47は隆線が縦位に２条貼付される深鉢口縁部である。45は口唇部に小把手を加飾する浅鉢で，48は無文の浅鉢である。49は口縁部に隆線による長円文を施すキャリパー形深鉢である。50は口縁部に縄文が施される浅鉢である。51は櫛目による幾何学文が施される深鉢口縁部である。52は原体圧痕で縁取られた隆線による波状文が，55は沈線による波状文が施されるキャリパー形深鉢である。53は体部がやや膨らむ深鉢で，口縁部に隆線による円文？が貼付される。54は連結



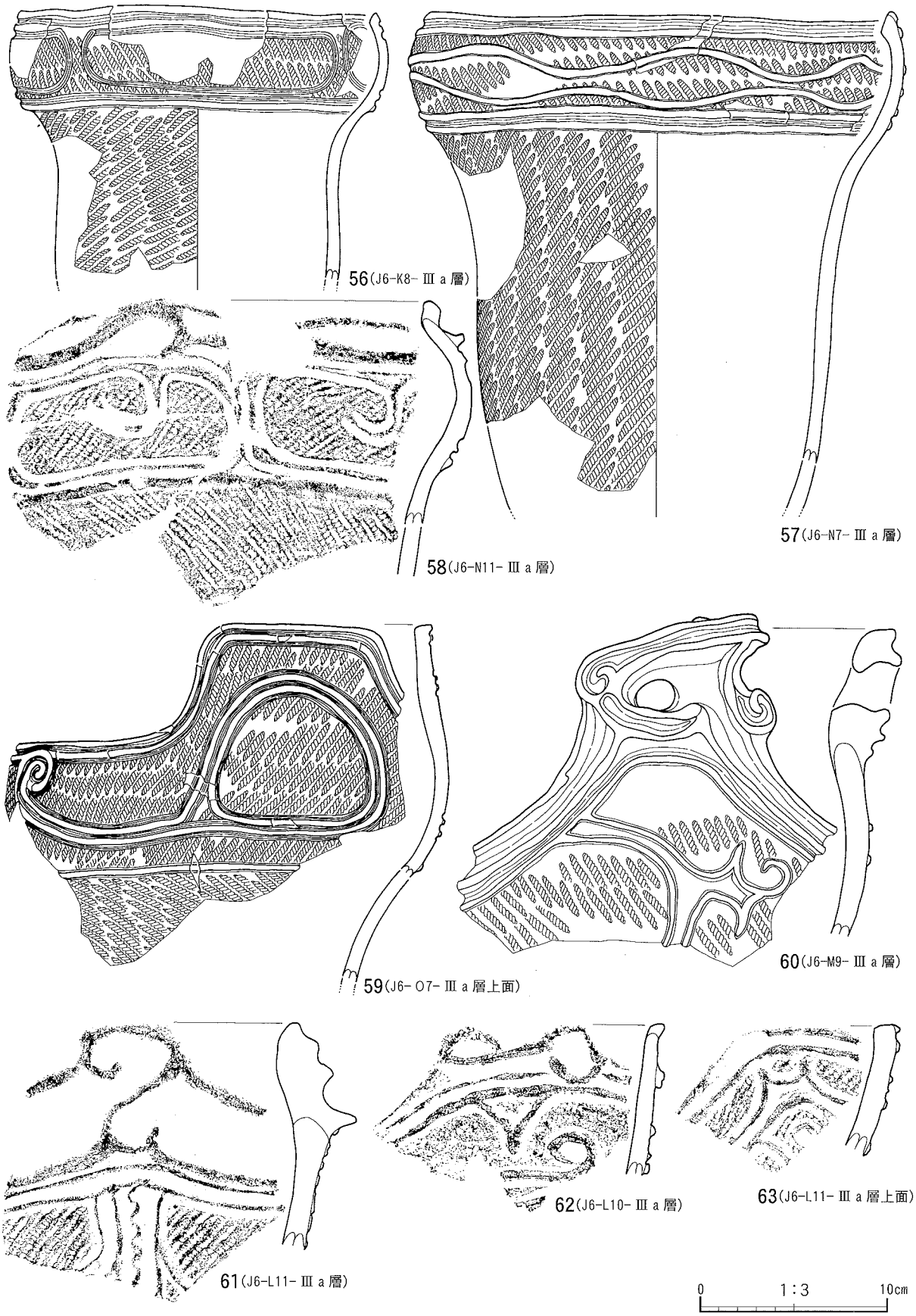
第42図　遺物包含層出土土器（1）



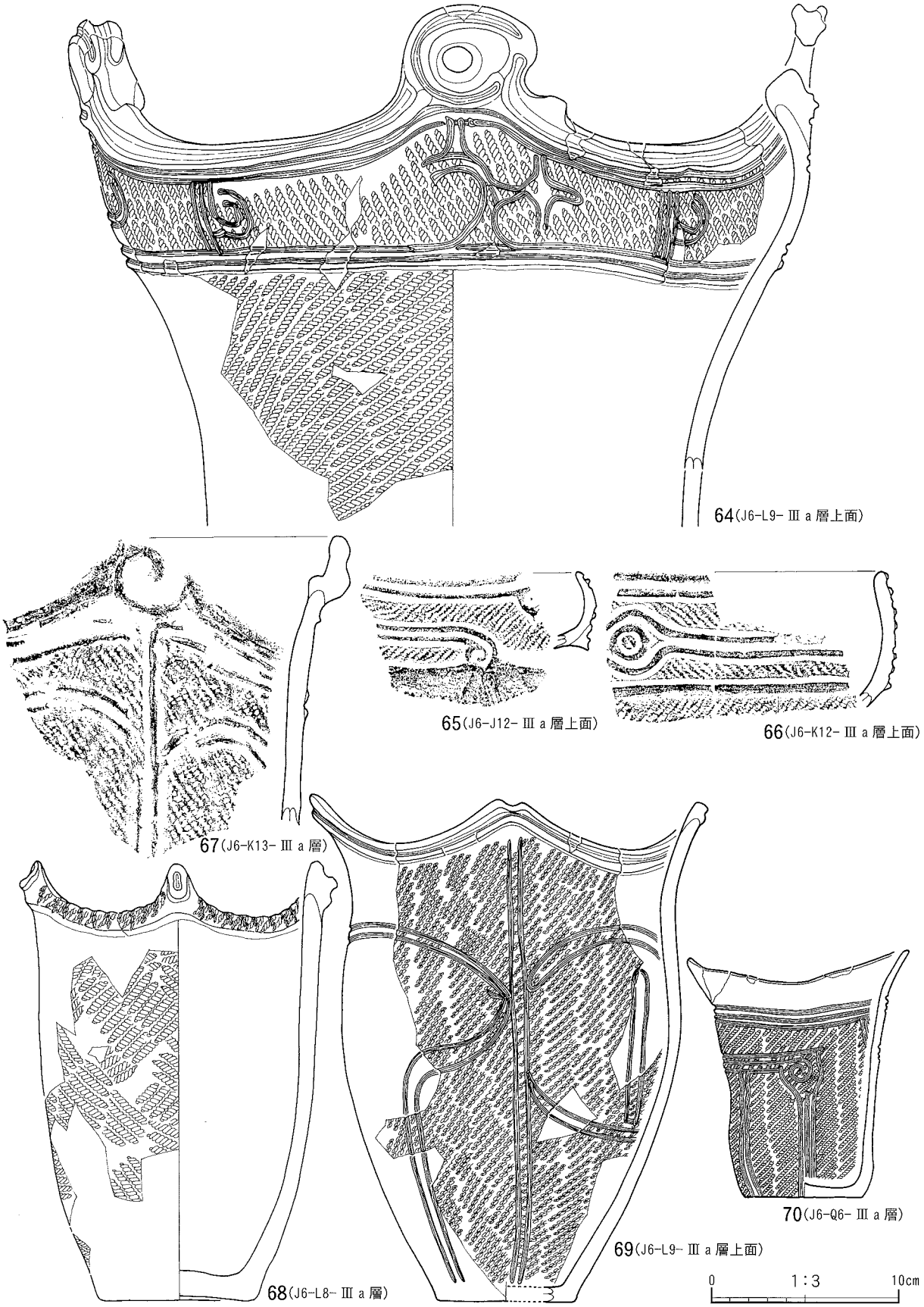
第43図　遺物包含層出土土器（2）



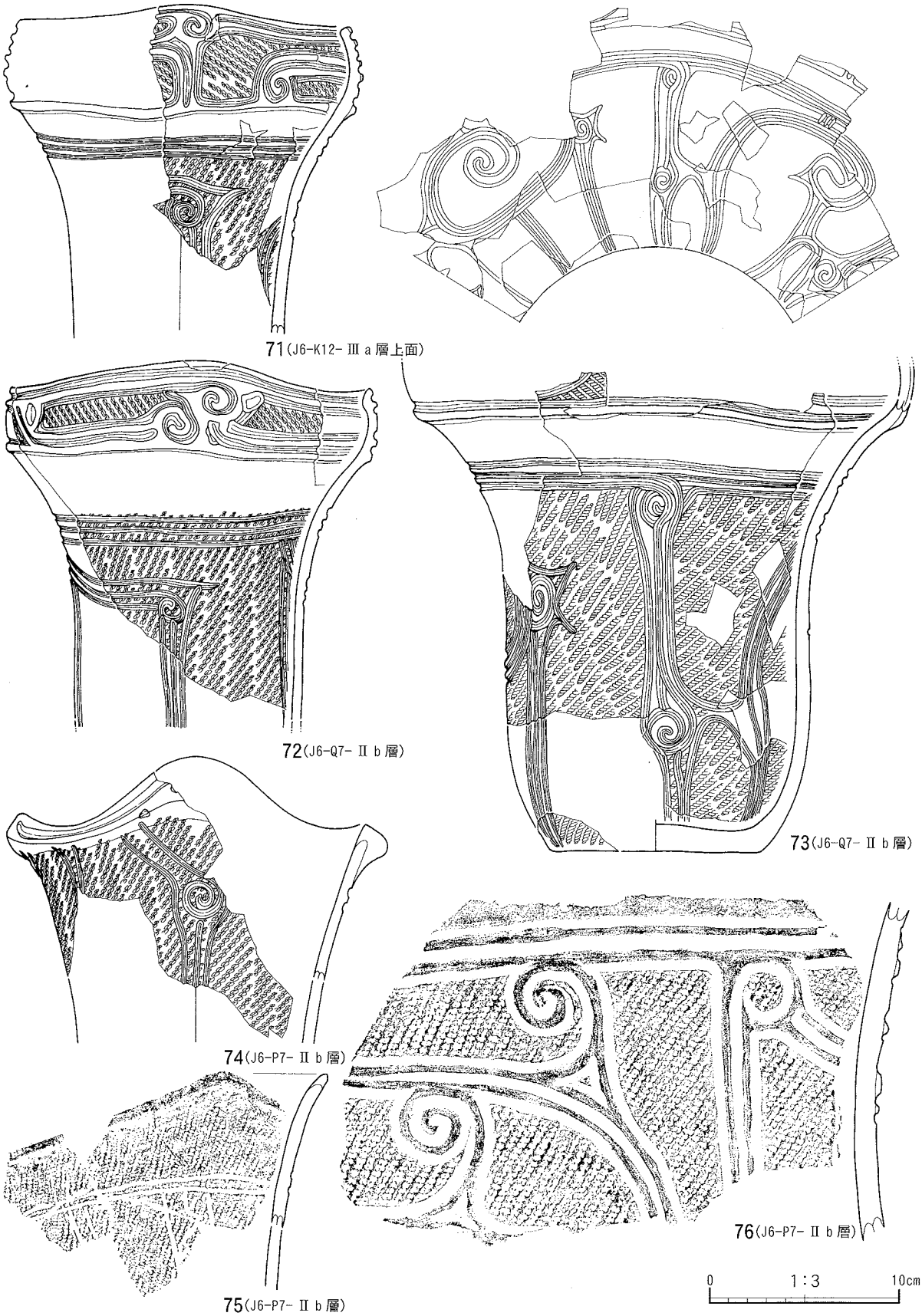
第44図　遺物包含層出土土器（3）



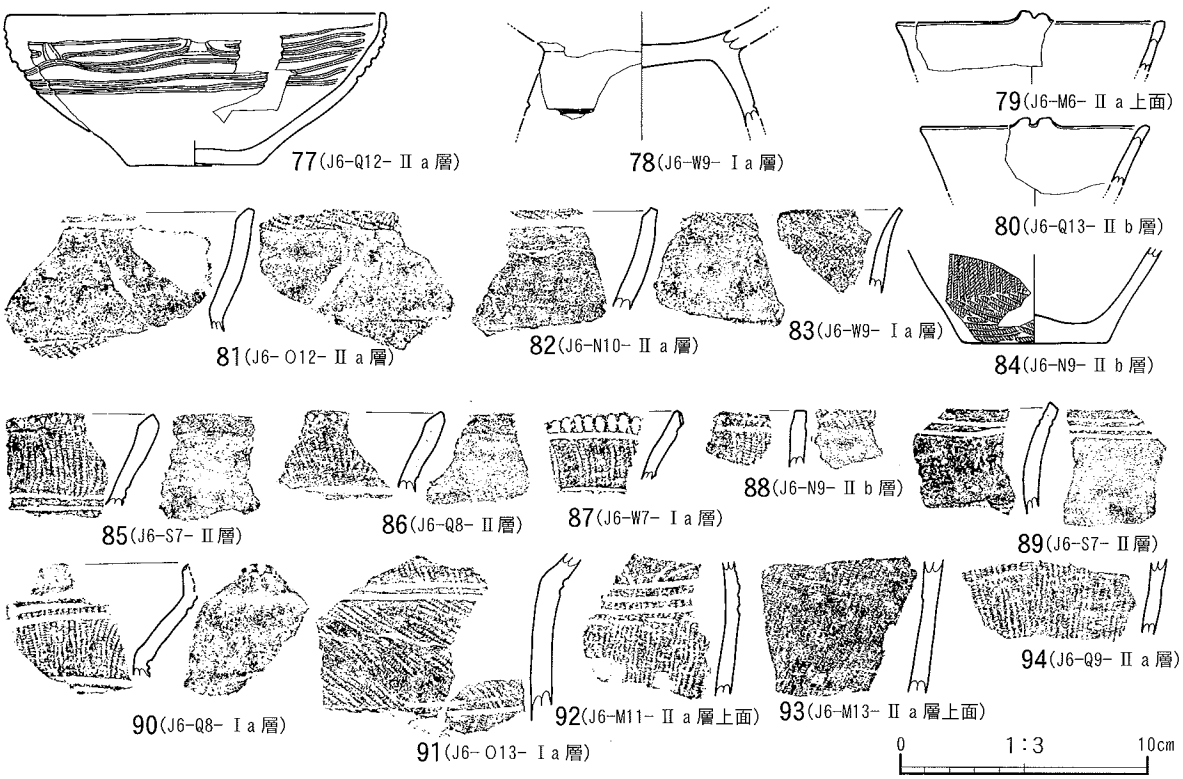
第45図　遺物包含層出土土器（4）



第46図　遺物包含層出土土器（5）



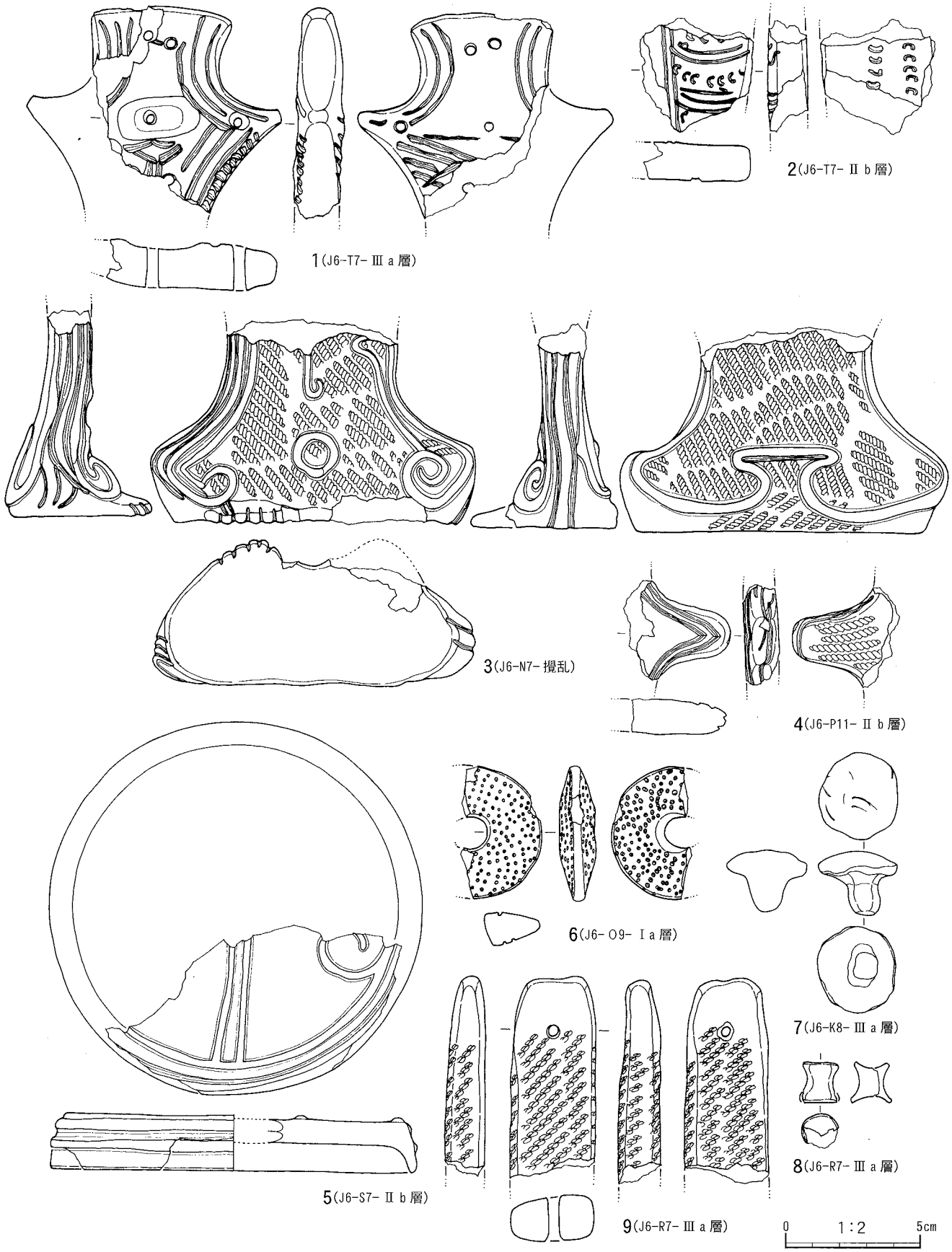
第47図　遺物包含層出土土器（6）



第48図　遺物包含層出土土器（7）

する把手を持つ深鉢口縁部である。56は沈線による長円文，57は隆線による波状文が施されるキャリパー形深鉢である。58は隆沈線による有棘楕円区画文，59は隆沈線で縁取りされる弁状突起，60は孔のあるC字状突起を持つキャリパー形深鉢である。61は縦位のS字状突起，62は横位のS字状突起を持つ深鉢口縁部である。63は弁状突起部に隆線による有棘渦巻文？が施されるものである。64は孔のあるC字状突起を持つキャリパー形深鉢で，口縁部には沈線による有棘文が施される。65・66は隆沈線による小渦巻文・円文が施されるキャリパー形深鉢である。67～69は円筒上層式の影響のある深鉢で，67は隆線，69は沈線による肋骨文が施される。70は口縁部が外反する小形深鉢で，体部には沈線による有棘渦巻文・懸垂文が施される。71～73は口縁部が内湾するキャリパー形深鉢で，口縁部には隆沈線による連結小渦巻文が，体部には沈線による有棘渦巻文・懸垂文が施される。74は大波状口縁を持つ深鉢で，体部には沈線による渦巻文・懸垂文が施される。75は口縁部が大きく外反する深鉢で，体部には横位平行沈線・懸垂文が施される。76は隆沈線による大渦巻文に蕨状の小渦巻文を加飾する深鉢体部である。

弥生時代　77は変形工字文が施される浅鉢である。78は高坏の高台で，横位の平行沈線が施される。79・80は小突起のある無文の小形鉢である。81～83は口縁部に無文帯を持つ甕で，81・82の口唇部内面には縄文が施される。84は縞縄文が施される甕底部である。85・86は同一個体の甕口縁部で，口唇部には小円形の刺突が施され下位には縞縄文・横位平行沈線が施される。87～89は甕口縁部で，87の口唇部には刻目，89の内外面には横位平行沈線が施される。90・91は屈曲部を持つ甕口縁部及び頸部で，横位平行沈線・縞縄文が施される。92は連弧文・横位平行沈線が施される甕体部である。93・94は縞縄文が施される甕体部である。



第49図　遺物包含層出土土製品（1）

土製品（第49図１～９）　１は板状土偶頭部から左腕部にかけての部位で，孔が頭部に２箇所，胴・腕部に各１箇所穿たれる。２は板状土偶胴部で，沈線・竹管による文様が施される。３は胴部から脚部にかけての部位で右足指が表現される。４は板状土偶腕部で，縄文が施される。５は台形の土製品で，台の上面には隆線による渦巻文等が施される。６は微細な刺突が両面に施される環状土製品である。７はキノコ形土製品である。８は土製耳飾と考えられる土製品である。９は全面に縄文が施される斧状土製品の基部である。

（４）調査のまとめ

大館町遺跡は，昭和48・50・51年度に実施された岩手大学による発掘調査や，盛岡市教育委員会による第１～75次に及ぶ発掘調査の結果，長期間（大木７ａ～８ｂ－３式）存続し，中央部に広場や土坑群を持つ拠点集落であることが確認されている。しかし，集落の東縁部については調査例が少なかったために遺構の分布状況や遺物包含層の拡がりが不鮮明であった。そのため，現地表面でも確認できる沢状低地帯と集落が立地する高位面に跨る調査区を設定し，集落東縁部の状況を把握することに努めた。

検出遺構　ＲＥ2232竪穴埋土下層より大木７ｂ～８ａ－１式にかけての過渡的な土器が出土している。しかし埋土の堆積状況を観察した結果、壁際の層（Ｃ１層）に多くの遺物が含まれていたことが明らかになり，ＲＥ2232の埋没過程において壁面付近にあった遺物包含層の遺物が多量に流入したことが考えられた。そのため，床面からの出土土器のない本遺構の明確な構築時期については不明である。その他にもＲＤ6638土坑，埋設土器１～４などの縄文時代の遺構が検出された。

沢状低地帯（遺物包含層）　沢状低地帯（第29図Ａトレンチ）の土層堆積状況を確認した結果，Ａトレンチ下部にはスコリアを多量に含み硬く締る黒褐色土層（Ｖｂ層）や秋田駒ヶ岳に噴出起源を持つ堀切軽石（Ｖａ層），岩手山起源と考えられる黒色火山灰層（Ⅳ層）が順に堆積する。

多量の遺物が含まれるのはⅢｃ～ａ層で，Ⅲ層は全体的に暗褐色を呈し，構成土には黒褐色土・褐色土・分火山灰層下位のスコリア粒などが混合されるほか，多量の遺物・炭化物が含まれるなど集落内での掘削と排土投棄・廃棄が盛んに行われていたことを示す層と考えられる。

Ⅱ層は黒褐色土を主体とする層でａ・ｂの２層に細別され，Ⅱｂ層より大木８ｂ式，Ⅱａ層より少量の縄文時代晩期～弥生時代の土器片が出土する。Ⅱ層はⅢ層のような混合土ではないことから自然堆積によるものと考えられる。遺物についても流入または個体の投棄・廃棄によるもので，排土等など人為的に形成された層ではない。

出土した土器の多くは大木７ａ～８ｂ式に該当するものであった。Ⅲｃ・ｂ層では大木７ａ・ｂ式が出土し，Ⅲａ層より大木８ａ式，Ⅱｂ層より大木８ｂ式が多く出土する傾向が見られた。Ⅲ層とする遺物包含層はこれまで大館町遺跡西～南縁にかけての住居域外より検出されており（第１・２・11・22・29・45・51・60次調査），今回の調査によってさらに東縁まで包含層が分布することが明らかになった。今後は，今回の調査で確認されなかった集落東部の住居域の検出，集落中央部の状況を把握する調査が必要となるであろう。　（神原 雄一郎）

Ⅳ．繋Ⅳ遺跡　（第24次調査）

1．遺跡の環境

（1）遺跡の概要

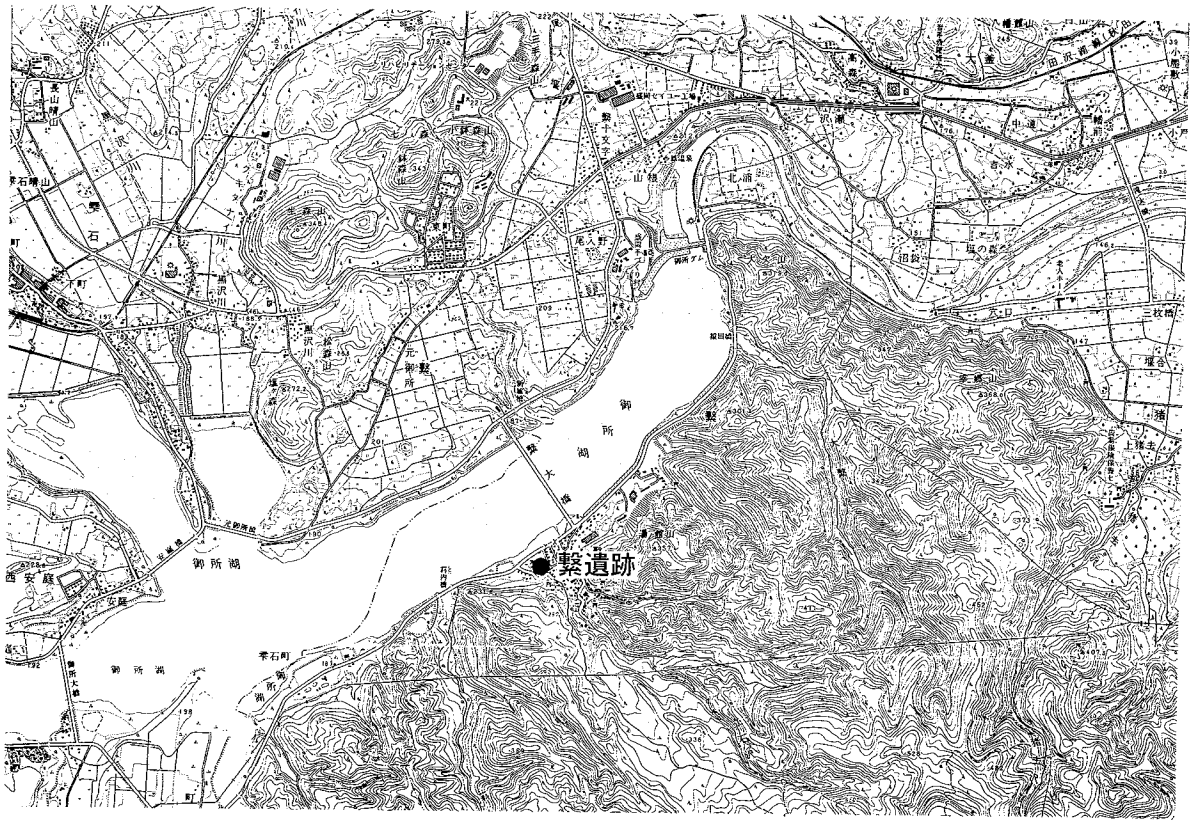
遺跡の位置　繋遺跡は盛岡市の北西部，岩手郡滝沢村，雫石町との境界に近い盛岡市繋字舘市・湯ノ館・萪内沢地内に所在する。盛岡市街地より西に約11kmの地点にあり，古くから温泉地として知られている（第50図）。

遺跡の地形　繋地区は，奥羽山脈から東流する雫石川により形成された雫石盆地東端に位置し，奥羽山脈の東縁に形成される箱ヶ森山地により北上川流域の北上盆地と分離されている。

繋遺跡は，昭和48(1973) 年の御所ダム建設に係る事前の遺跡分布調査により，繋Ⅰ～Ⅶ遺跡に分割されており，繋Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ遺跡は低位段丘上，繋Ⅶ遺跡は山地縁辺，今回報告する繋Ⅳ遺跡は扇状地にそれぞれ位置する。なお，各遺跡の境界は埋没谷や沢などで分けられている。

周辺の遺跡　繋遺跡の位置する雫石盆地，特に御所湖周辺には多くの遺跡が確認されており，前述のダム建設に係る発掘調査により縄文時代を主体とした遺構・遺物が確認されている。

縄文時代　雫石川南岸では，縄文時代早期前半～末葉の遺物が下猿田Ⅱ遺跡で確認され，縄文時代前期初頭の竪穴住居跡が上野遺跡で確認されている。中期中葉になると，繋Ⅴ遺跡において大規模な集落が形成されるが，中期末葉には繋Ⅲ・Ⅴ・Ⅶ，除Ⅱ遺跡で小規模な集落が営まれるようになる。縄文時代後期においては，下猿田Ⅰ，繋Ⅰ遺跡で竪穴住居跡が確認され，萪内遺跡では後期の集



第50図　繋遺跡の位置（1:50,000）

落と墓坑群，鮎の遺構などのほかに縄文時代晩期の竪穴住居跡も確認されている。

雫石川北岸では，塩ヶ森Ⅰ遺跡において中期初頭の大形竪穴住居跡をはじめ，中期中葉の竪穴住居跡が44棟確認されており，対岸の繋Ⅴ遺跡に匹敵する遺構密度の高さである。中期末葉については，広瀬Ⅱ，堂ヶ沢遺跡から竪穴住居跡が確認されている。

弥生時代　弥生時代以降の遺構は少ないながらも確認されている。繋Ⅵ遺跡において弥生時代前期の竪穴住居跡が２棟，中期の土坑墓が１基確認されている。古代においては，平安時代の竪穴住居跡が繋Ⅴ，南ノ又遺跡などから少数であるが確認されている。また，中世では繋Ⅲ遺跡より掘立柱建物跡や竪穴建物跡，方形周溝が廻る墓が確認されている。このほか館市館（繋古館），湯ノ館，萪内館，新城館などの館跡が雫石川を見下ろす山地縁辺に分布している。

古　代

中　世

2　調査成果

（1）これまでの調査

繋遺跡では，昭和26(1951) 年，繋小学校校舎増築工事中に，底部穿孔の埋甕と考えられる縄文時代中期の深鉢形土器が７個体出土しており，現在国指定重要文化財となっている。昭和32(1957) 年に校舎拡張工事に伴う緊急発掘調査，昭和39(1964) 年には岩手大学による学術調査が実施され，縄文時代中期の竪穴住居跡と中期～後期の多量の遺物が出土した。その後，昭和48(1973) 年から８年間にわたり御所ダム建設に伴う発掘調査によって，繋Ⅱ～Ⅵ遺跡が調査されており、繋Ⅳ遺跡では縄文時代の遺物包含層と中世の竪穴建物跡１棟が確認されている。

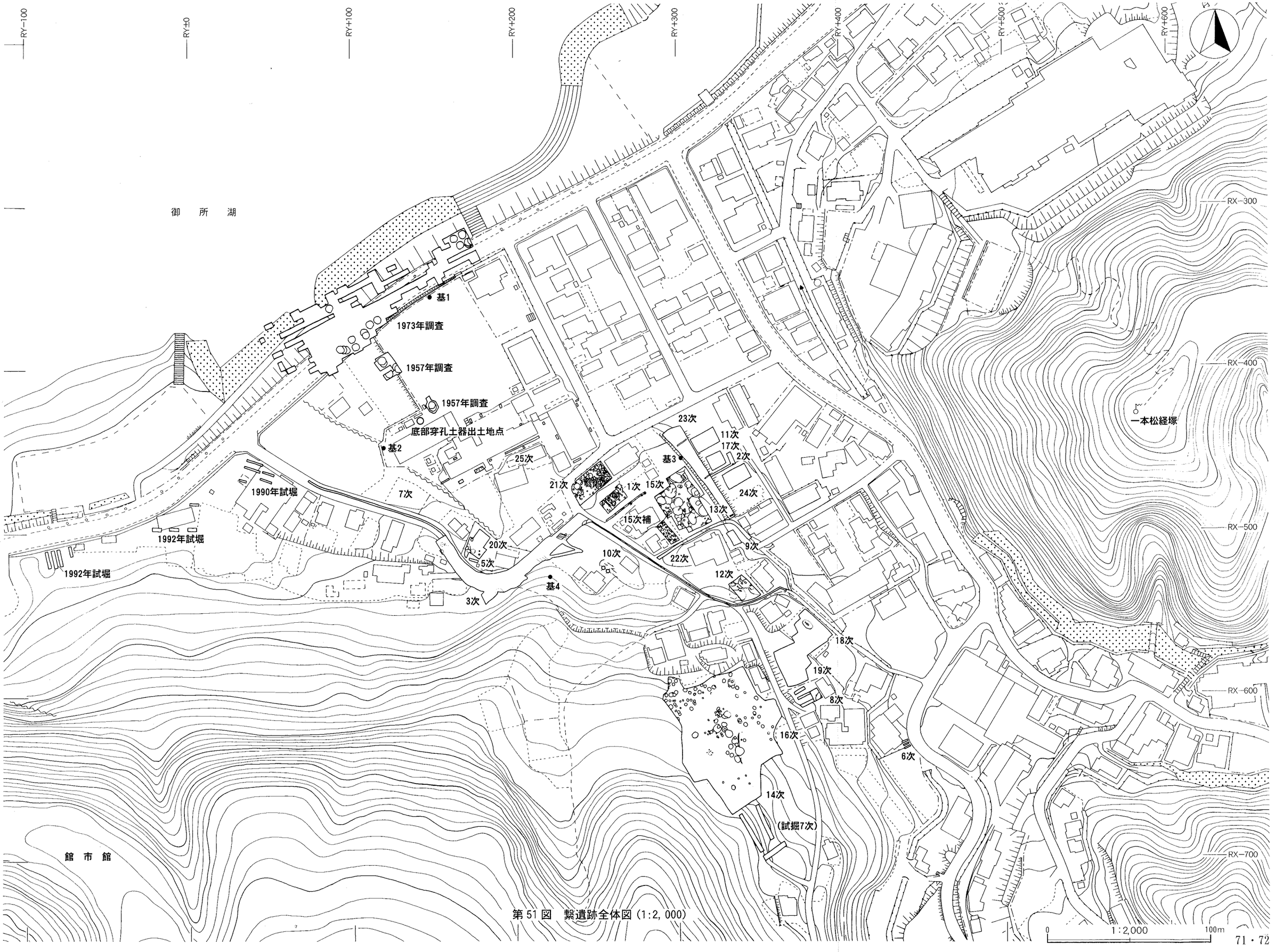
昭和58(1983) 年以降は，当市教育委員会によって住宅建築や道路改良工事などに伴う発掘調査が現在まで25次にわたり実施されている。縄文時代中期の大規模集落である繋Ⅴ遺跡の東側低位に位置する繋Ⅳ遺跡は，繋Ⅴ遺跡からの流入によって形成された遺物包含層や土坑が確認されている（第２･11・17次調査)。

（2）平成14年度の調査

繋遺跡における平成14年度の発掘調査は，繋Ⅴ遺跡第23・25次調査と繋Ⅳ遺跡第24次調査の３件である。そのうち国庫補助事業として実施したのは，個人住宅新築に伴う第24次調査である。

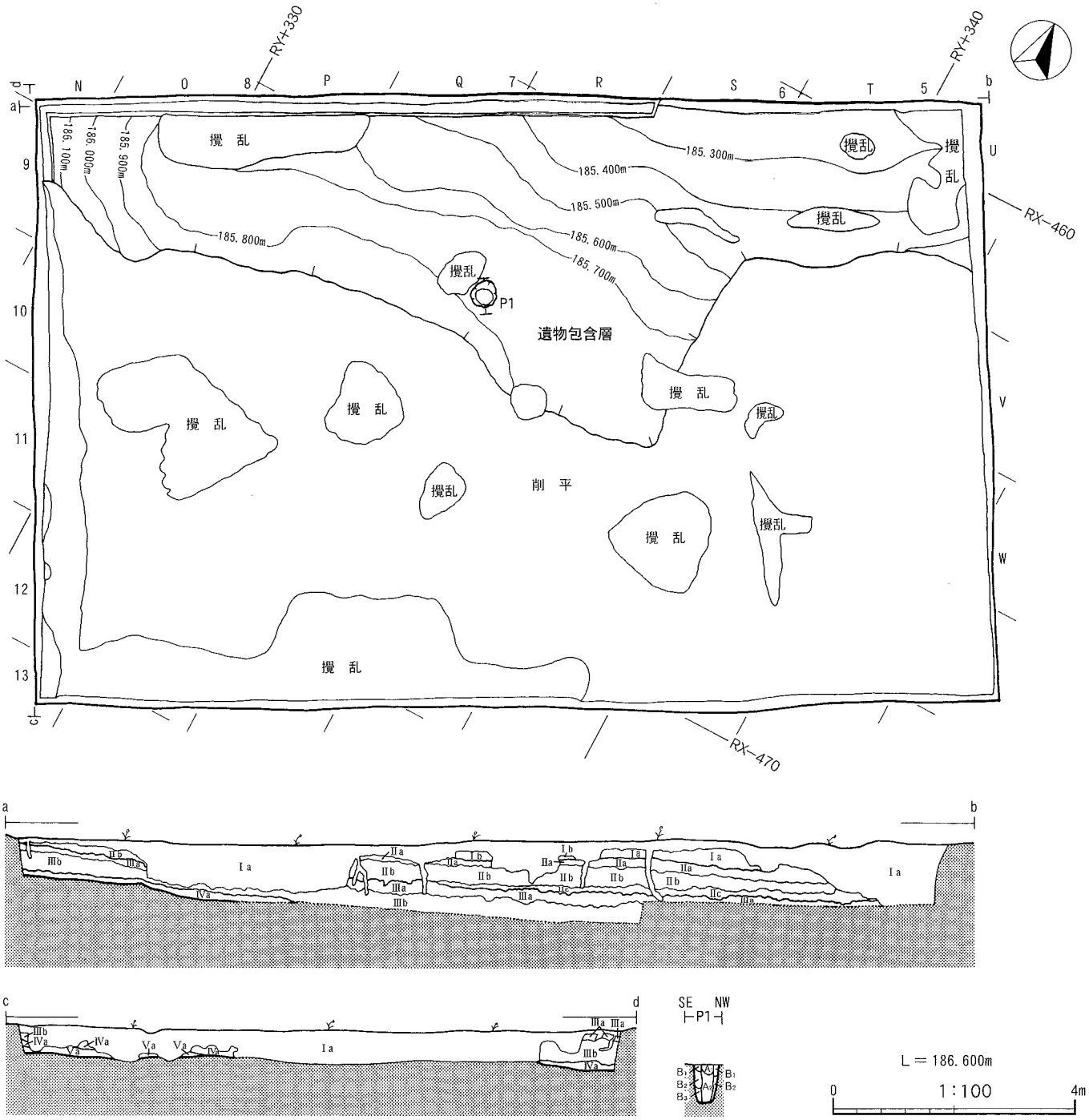
次数	所在地	調査原因	面積	期間	検出遺構・遺物
繋Ⅴ 23	繋字舘市78外	防災道路建設工事	523.3㎡	02.06.24 02.08.09	縄文時代早期～中期の遺物包含層，土坑，埋設土器（検出のみ）
繋Ⅳ 24	繋字舘市79-50	個人住宅建築	158.5㎡	02.07.30 02.08.09	縄文時代早期～後期の遺物包含層
繋Ⅴ 25	繋字舘市114-1外	繋小学校増・改築工事	73.5㎡	02.11.11 02.11.13	縄文時代中期の竪穴住居跡６棟，遺物包含層，中～近世の溝跡１条(検出のみ)

第３表　平成14年度繋遺跡調査成果



第51図　繋遺跡全体図（1:2, 000）

位　置　第24次調査区は，繋Ⅳ遺跡の中央部西に位置し，第２次調査区の南，繋Ⅴ遺跡第23次調査区の東に隣接する（第51図）。調査区は旧住宅の基礎等による削平・撹乱を受けており，特に南部の削平が著しく，旧地形及び包含層があまり残存していなかった。今回の調査では，撹乱層を除去した地山及び漸移層（Ⅳ層）面で遺構検出を行い，調査区中央部北から包含層を掘り込む時期不詳のピット１口，北西部で縄文時代早期～後期の遺物包含層を確認した（第52図）。調査区内は南西から北方向に緩やかに傾斜する地形で，検出面の標高は185.800m前後である。調査は基礎工事掘削深度（地表より約0.80m）まで精査を実施し（一部トレンチ調査），遺構の下半は地下保存とした。調査終了時には調査最終面に約0.05mの厚さで川砂を敷き詰め，土で埋め戻した。



第52図　繋Ⅳ遺跡第24次調査区全体図

3．調査内容

（1）遺物包含層

第24次調査区は，過去の削平などを受けており，旧地形及び包含層の残存状況はあまり良くない。調査区北西部で縄文時代早期～後期の遺物包含層（Ⅱ・Ⅲ層）を確認したのみである。地形は北方向に傾斜しており，遺物包含層もその傾斜に沿って形成されている。包含層の精査は，基礎工事深度が及ぶⅢａ層まで行い，それより下層についてはトレンチ調査を実施した。

遺物包含層からは縄文時代早期～後期の遺物が混在して出土しており，大半の出土遺物は隣接する繋Ｖ遺跡からの流入による二次堆積である。概観すると，Ⅱ層は縄文時代中期前葉～中葉の遺物，Ⅲ層は前期初頭の遺物を多く包含する。

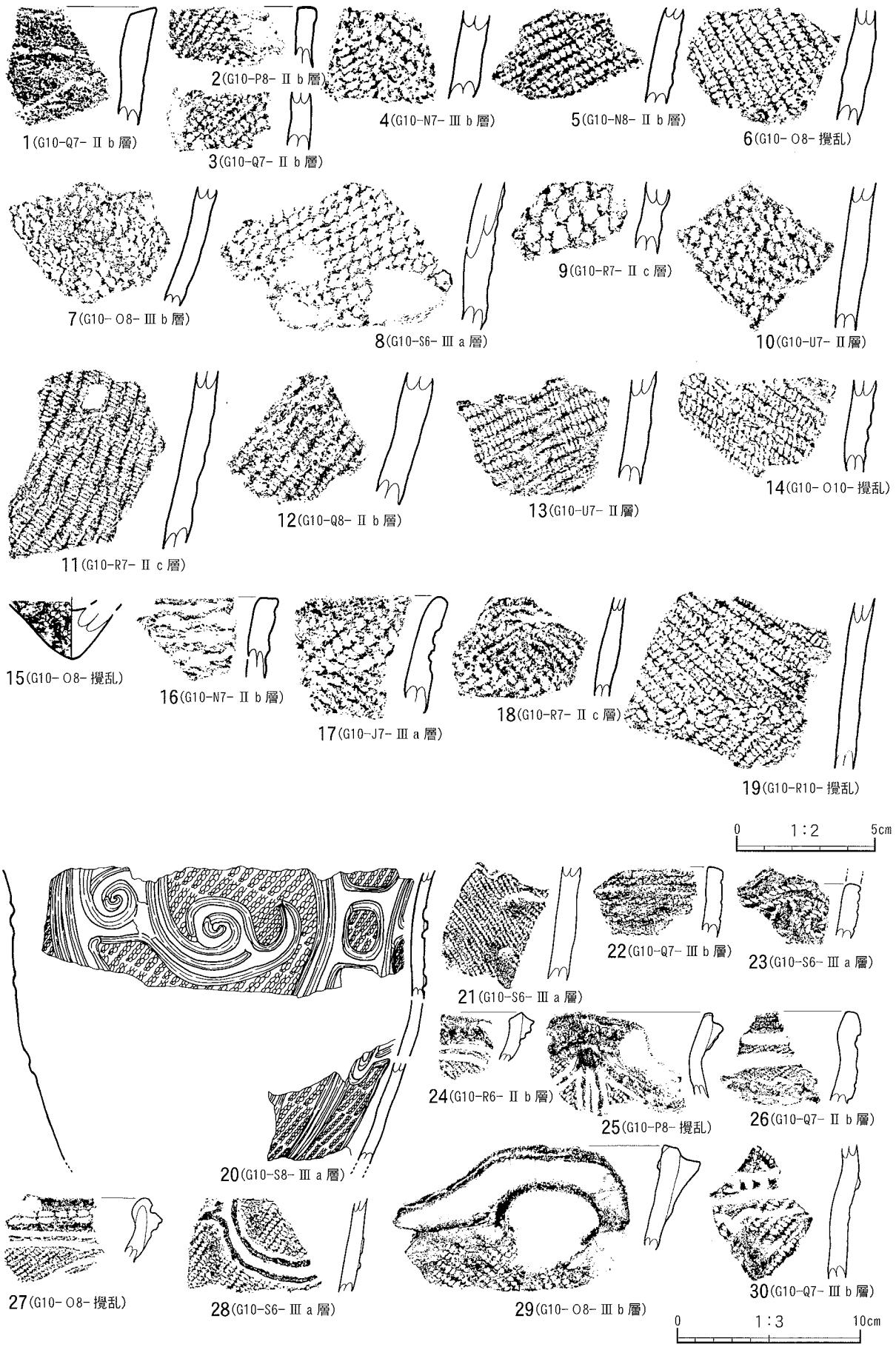
層　位　Ⅰａ・ｂ層－旧住宅による攪乱及び盛土層。Ⅱａ層－暗褐色～褐色土主体で，粒状の黒褐色土・砂礫を少量含む。Ⅱｂ層－褐色土主体で，粒～小塊状のにぶい黄褐色土・暗褐色土にカーボン，砂礫を含む。Ⅱｃ層－暗褐色～褐色土主体で，粉～粒状の黒褐色土，微量のカーボンを含む。Ⅲａ層－黒色土主体で，粒～塊状の暗褐色土を多く含む。Ⅲｂ層－黒色土主体で，粉～粒状の黒褐色土，暗褐色土を微量含む。Ⅳａ層－暗褐色土主体で，粒～塊状の褐色土にスコリア粒を少量含む（漸移層）。Ｖａ層－明黄褐色土主体で，小塊状の暗褐色～褐色土にスコリア粒，砂礫を含む（地山）。

土器（第53図１～30）　１は早期末葉の無文深鉢口縁部片で，口唇部形状が内削ぎになるもので，胎土に

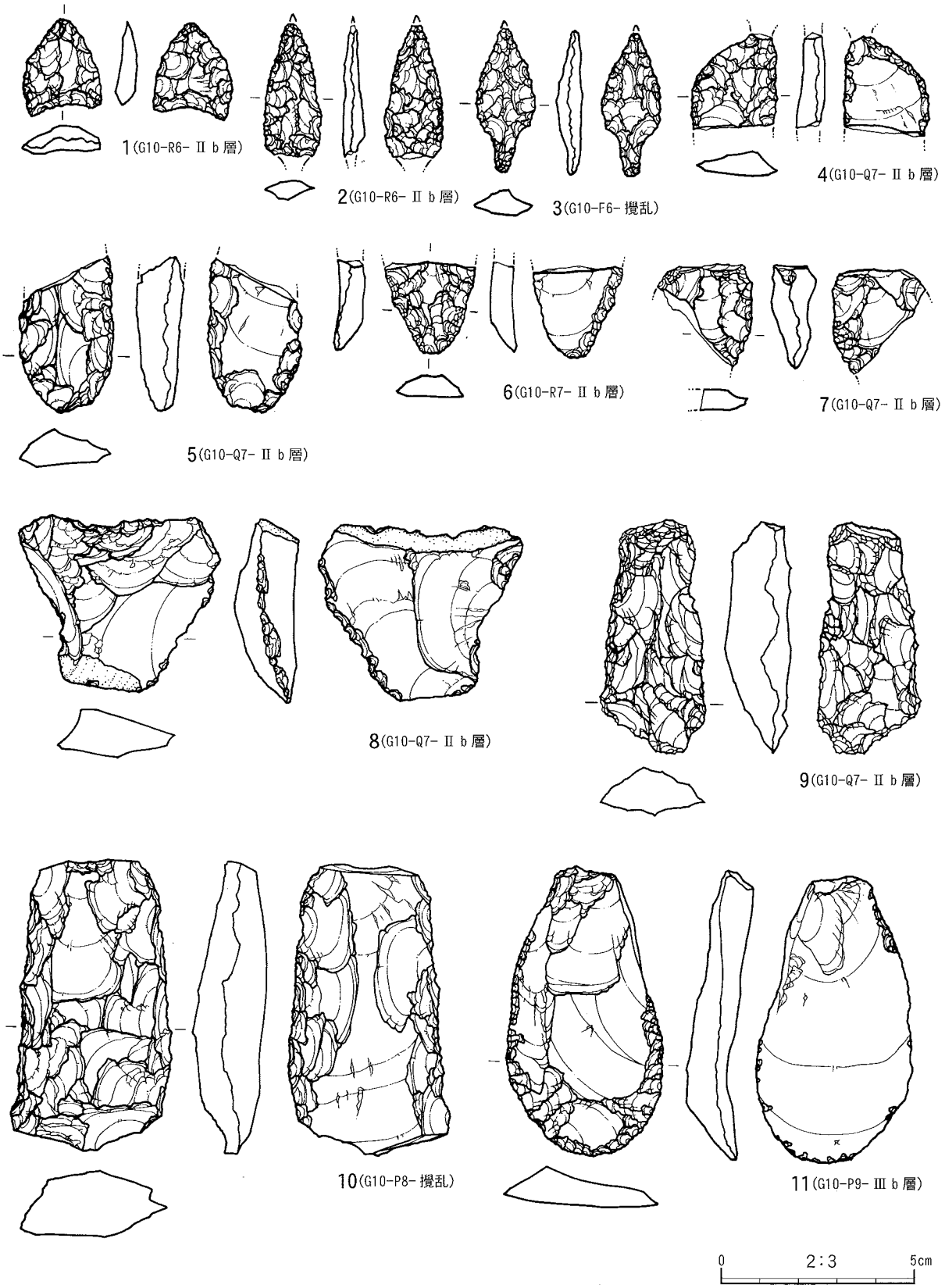
早　期　少量の繊維を含む。２～19は前期初頭の繊維土器群で胎土に少量～多量の繊維を含む。２～６は

前　期　斜行縄文が施文される。２・３は同一個体と考えられ，平坦口縁で斜行縄文（ＬＲ）が施される。４・６は斜行縄文（ＲＬ），５は斜行縄文（ＬＲ）が施される。７～10は条と条の間隔が狭く，節と節が密着する組縄縄文が施文されるものである。いずれも組縄Ａを用いて施文している（註１）。７は底部付近の部位で組縄ℓ４本Ｌ回りが施され，焼きが硬質である。８～10は組縄ｒ４本Ｌ回りが施文される体部片で，９は比較的大きめな節となる原体を用いている。11～15は０段多条単節縄文を施すもので，11～13は横位のＬＲ単節縄文，14は横位のＲＬ単節縄文を施す。15は深鉢尖底部である。16は横位の不整撚糸文を口縁部に施すもので，口唇部形状は平坦である。17～19は羽状縄文を施文するもので，17は横位に非結束羽状縄文（ＬＲ＋ＲＬ）が施される口縁部片で口唇の断面形が丸みをおびる。18・19は結束羽状縄文（ＲＬ，ＬＲ）が横位に施される体部片である。21は前期末の深鉢体部片であり，地文に斜行単節縄文（ＬＲ）を施し，沈線による山

中　期　形文が施される。20・22～30は中期前葉～中葉の土器群である。22は口縁部が平坦に調整され，横位の絡状体圧痕文が施される。23は波状口縁で，口縁に沿って原体圧痕文が施文され，波頂下には原体圧痕による渦巻文を施す。24は浅鉢口縁部で，口縁に沿って連続した縦位の原体圧痕を施し，２条の沈線が施される。25は波状口縁頂部が外反するもので，連続した原体末端圧痕，体部に隆沈線による胸骨文が施文され，外面にタール状の炭化物が付着している。26は平行する２条の沈線，地文に結節縄文（ＬＲ）が施される。27は浅鉢口縁部で，口縁に沿って連続した刺突文と沈線文が施される。28は隆線による有棘大渦巻文が施文される体部片で，器表面は被熱し，



第53図　遺物包含層出土土器



第54図　遺物包含層出土石器

橙色を呈する。29はC字状の装飾をもつ口縁部片で，口縁部内面に１条の隆線が横走する。地文は縦位回転の単節縄文（ＬＲ）が施される。30は深鉢の頸部～体部で，縦位の刻目が加飾される隆沈線と波状沈線が施される。地文は頸部が縦位回転の単節縄文（ＬＲ），体部は縦位回転の単節縄文（ＲＬ）が施される。20は深鉢体部片で，地文に複節縄文（ＲＬＲ）が施され，隆沈線による有棘渦巻文が施文される。内面に少量の朱が付着している。

石　器（第54図１～11）　繋Ⅳ遺跡第24次調査において，遺物包含層より出土した石器（剥片も含む）総数は129点である。半数以上がⅡｂ層からの出土で，大半が剥片である。石材はすべて頁岩である。１～３は石鏃である。１は無茎鏃で基部がやや浅い凹基となり，左右非対称で右側辺は稜の出入りが大きい。２・３は凸基有茎鏃で先端部を欠損している。４はつまみ部と刃部の先端部を欠損した石匙である。一方の側縁が湾曲し，腹面に大きく第１次剥離面を残す。５～８は削器である。５は上半部を欠損しているが，背・腹面のほぼ全周縁に剥離と調整を施す。６も上半部を欠損しており，背面に押圧剥離，腹面右側縁に細かい調整を施す。７は右下半を欠損し，両面に剥離と調整を施している。８は背・腹両面に自然面を残し，腹面左側辺が刃部として使用されている。９・10は両面調整石器である。９は撥形の形態を呈し，背・腹面のほぼ全面にわたって剥離と細かい調整が行われている。10は不整な長方形を呈し，両側縁部を中心に剥離を施す。腹面も両側縁部に剥離が認められるが，第１次剥離面を大きく残す。11は石箆で，素材剥片の末端を刃部とし，弧状に細かい調整を施してある。

４．調査のまとめ

今回の調査では，縄文時代早期～後期の遺物包含層と時期不詳のピット１口を確認した。遺物包含層は様々な時期の遺物が混在し，層位的な遺物の新旧が認められなかった。形成時期については，Ⅱ層は縄文時代後期以降，Ⅲ層は中期中葉以降と考えられる。出土遺物では，破片資料ではあるが，縄文時代中期前葉～中葉（大木７ａ～８ｂ式）をはじめ，前期初頭の早稲田６類式（千鶏Ⅱ式），大木１式の繊維土器が確認された。

また，隣接する繋Ⅴ遺跡第23次調査では遺跡が立地する低位段丘東斜面において，縄文時代早期～中期にかけての遺物包含層を確認している。遺物包含層は早期（Ⅳ層），前期（Ⅲ層），中期（Ⅱ層）の３時期に分かれ，Ⅳ層・Ⅲ層が自然堆積，Ⅱ層が段丘縁からの廃棄行為による人為堆積によって形成されている。層厚は平均1.5mを計り，最も深くなる北西部では約1.8mにも及ぶことが確認調査で判明している（未報告）。この結果，第24次調査で確認された遺物の大半が小破片で，接合関係が極めて少ないということから，繋Ⅴ遺跡が立地する低位段丘の東斜面に形成された遺物包含層が，自然営力などにより一部崩壊し，そこに含まれる遺物が斜面の傾斜に沿って移動し，繋Ⅳ遺跡の立地する扇状地上で２次堆積したと考えられる。

（花井　正香）

註１　高橋亜貴子　1992「東北地方縄文時代前期前葉組縄縄文について」『東北文化論のための先史学歴史学論集』P.P.593～632

V. 上畑遺跡 （第５次調査）

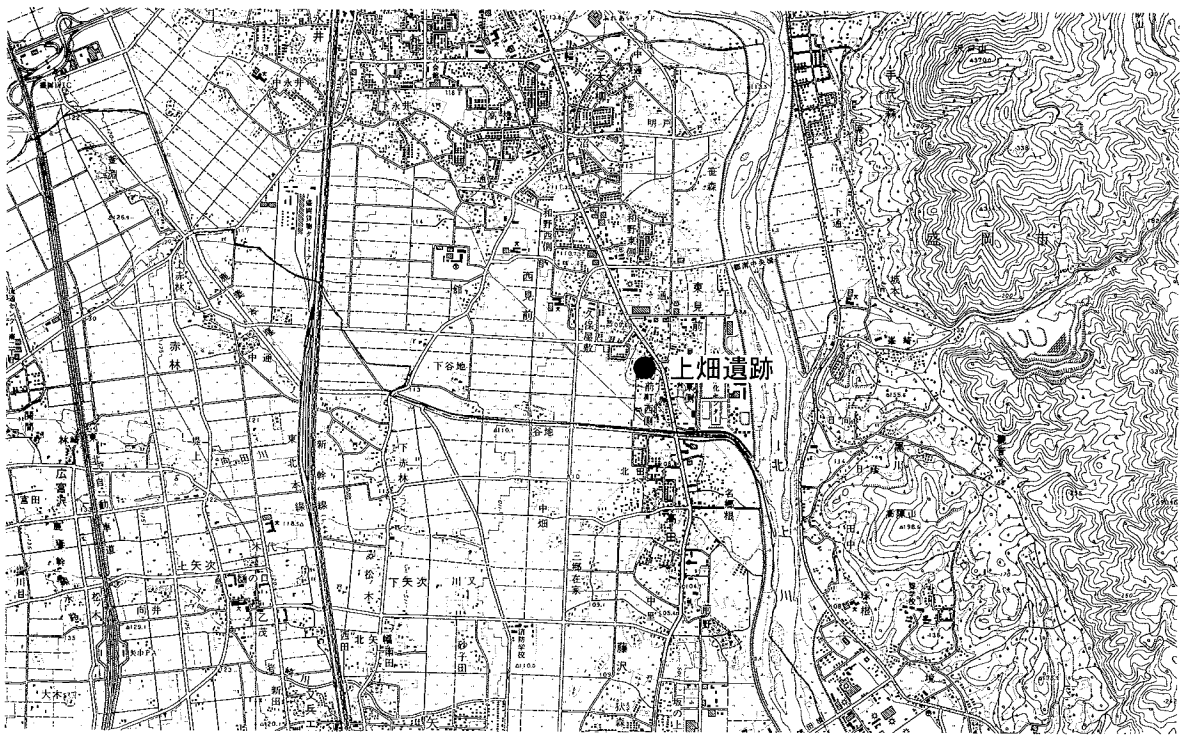
１．遺跡の環境

（１）遺跡の概要

遺跡の位置　上畑遺跡は，ＪＲ盛岡駅より南へ約7.5kmの盛岡市西見前11地割に所在する（第55図）。遺跡範囲は東西約210m，南北約270mと推定される。現況は宅地や水田・畑・果樹園などの農地が主体となっているが，近年宅地化が進んできている地域である。標高は約110.000mをはかる。

遺跡の地形　上畑遺跡は，雫石川と北上川の流路の変換によって形成された沖積段丘上に立地する（第１図）。

周辺の遺跡　雫石川の南岸，北上川の西岸は，幾筋もの沖積段丘が発達しており，数多くの古代（古墳～平安時代）遺跡が立地している。縄文･弥生時代の遺物は散見されるものの主体的なものではなく，遺構の検出例は稀である。古代の遺跡は終末期古墳や奈良～平安時代にかけての集落跡が多く存在する。終末期古墳は，本遺跡北約1.7kmに大道西古墳群，南約1.6kmに藤沢狄森古墳群（7世紀後半代・矢巾町）が立地する。古代の集落遺跡は，南方約600mに高田遺跡（8～9世紀前半・10世紀後葉，矢巾町），北方1.3kmに菖蒲田遺跡（8世紀後半），北方約2kmには盛岡市内屈指の大集落である百目木遺跡，西鹿渡遺跡（8～9世紀代）が立地する。また北西約6kmには志波城跡（803年）および，南方約2kmには徳丹城跡（812年）といった古代城柵が立地する。以上のようにこの地域は，古代より多くの人々が行きかう河川沿いの肥沃な地域であったことがうかがえる。中世の遺跡は，見前館遺跡，見前古館遺跡などの館跡が分布する。見前館は16～17世紀には斯波氏の家臣見前氏の本拠であったとされる。平成10年度の発掘調査では16世紀末～17世紀初頭の唐津産陶磁器が出土している。



第55図　上畑遺跡の位置（1:50,000）

2．調査成果

（1）これまでの調査（第4表・第56図）

第１次調査　上畑遺跡は古くから平安時代の遺物が表面採集できる遺跡として知られていた。第１次調査は宅地造成に伴う試掘調査であり，竪穴住居跡２棟が検出され，翌年度に本調査を実施したもの

第２次調査　である。平安時代の竪穴住居跡や遺跡の北～西端の湿地帯・旧河道を検出した。第２次調査は遺跡のほぼ中央で，アパート建築にかかる事前の試掘調査である。造成工事掘削深度が遺構

第３次調査　検出面に達しないため，遺構は地下保存された。第３次調査は遺跡の西端における農作業小屋新築に伴う調査である。遺構が確認されたが，基礎工事が遺構検出面に及ばないため，遺構は

第４次調査　地下保存された。第４次調査は遺跡の中央南寄りにおいて，アパートの新築工事に伴う試掘調査である。遺構面が損なわれる範囲の本調査を実施し，鍛冶炉をもつ竪穴住居跡が検出された。

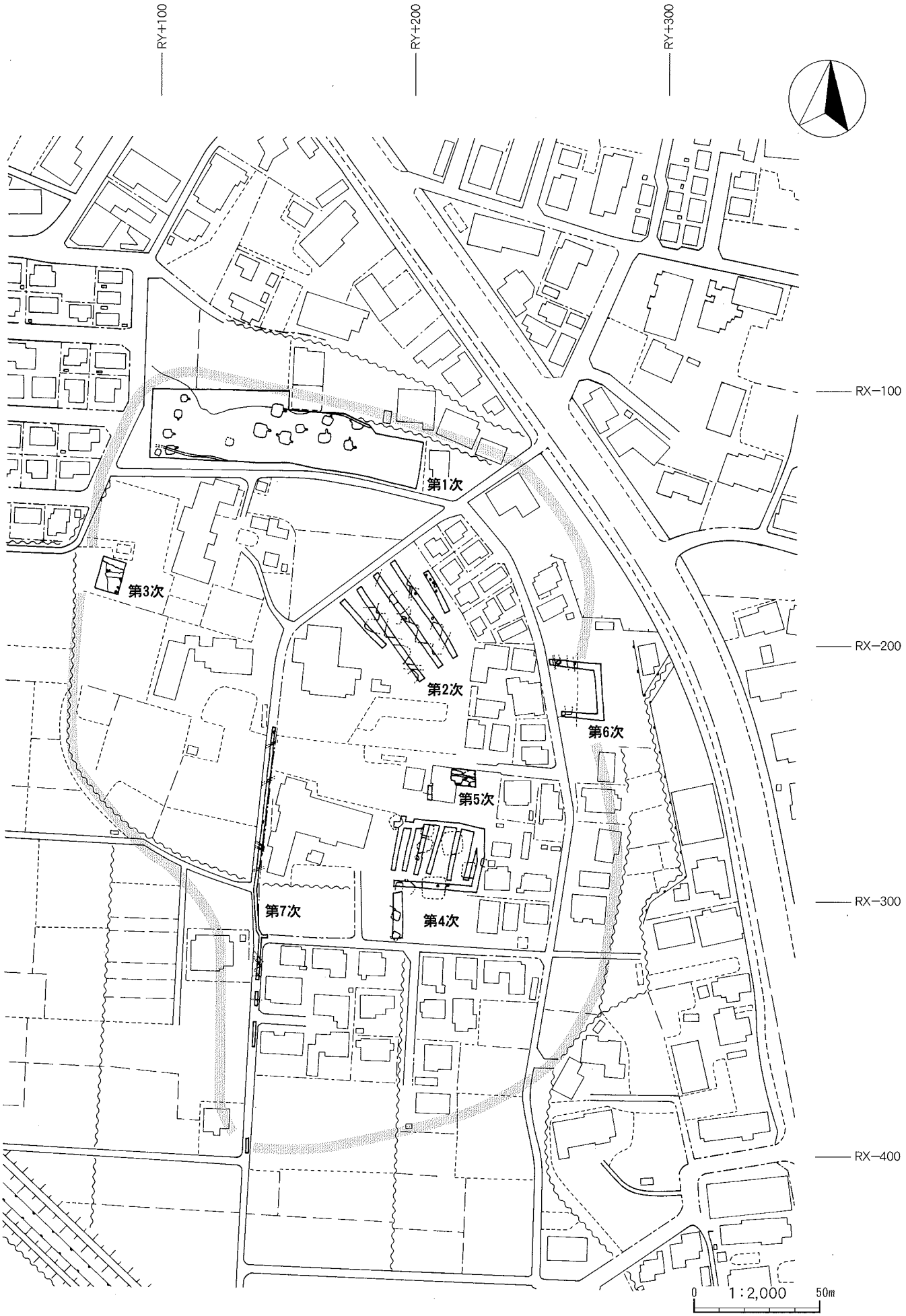
第５次調査　第５次調査は遺跡の中央付近で，個人住宅増改築に伴う試掘調査，及び建築範囲の本調査を実

第６次調査　施した。第６次調査は遺跡東端のアパート新築工事にともなう試掘調査である。遺構面を掘削

第７次調査　する範囲の本調査を実施し，竪穴住居跡や遺跡の東縁と考えられる湿地帯を確認した。第７次調査は遺跡の西側を南北に走る上水道配水管工事に伴う調査であり，竪穴住居跡などが検出された。また，遺跡の南端と考えられる湿地帯を検出した。

次数	所在地	調査原因	面積	期間	主な検出遺構・遺物
1試掘	西見前11地割190番　外	宅地造成	500㎡	99.11.19	平安時代　竪穴住居跡２棟，土師器，須恵器
1			2600㎡	00.04.17 00.05.31	平安時代竪穴住居跡14棟，古代土坑1基，古代溝跡1条，近現代溝跡1条，小ピット，土師器，須恵器
2試掘	西見前11地割24番3の一部　外	アパート新築	344㎡	00.12.26	古代竪穴住居跡17棟，土坑1基，溝跡2条，ピット7口，土師器，須恵器，
3	西見前11地割30-2の一部，31-1,31-2	農作業小屋新築	98㎡	01.09.03	古代　竪穴住居跡2棟，柱穴2口，年代不明溝跡2条，土師器
4	西見前11地割141，65-2，163-1の一部	アパート新築	242㎡	01.11.19 01.12.01	奈良時代竪穴住居跡2棟，平安時代竪穴住居跡6棟，鞴羽口，土師器，須恵器等
5	西見前11地割65-3	住宅増築	79.5㎡	02.05.16 02.06.17	平安時代竪穴住居跡6棟，古代土坑2基，古代以降土坑1基，古代以降溝跡1条
6試掘	西見前11地割210，211	アパート新築	113㎡	02.09.10	古代竪穴住居跡6棟，土師器，縄文土器
6			133㎡	02.10.15 02.10.30	平安時代竪穴住居跡5棟，年代不明溝跡1条，ピット3口，土師器
7	西見前11地割地内	上水道配水管敷設	90.4㎡	02.10.23 02.11.18	平安時代竪穴住居跡，奈良時代竪穴住居跡，溝跡，土坑，小ピット，旧河道等

第４表　上畑遺跡調査成果



第 56 図　上畑遺跡全体図（1:2, 000）

（２）平成14年度の調査

平成14年度は５・６・７次調査の３地点を実施した。

このうち，第５次調査区は第４次調査区の北側，遺跡のほぼ中央に位置し，個人住宅増改築にともない国庫補助事業として実施したものである。建築範囲の試掘調査を実施したところ，竪穴住居跡を複数検出した。協議の結果，基礎底面が遺構面を損なうことが避けられないため，本調査を実施することになった。検出した遺構は平安時代の竪穴住居跡６棟，平安時代の土坑２基，古代以降の土坑１基，古代以降の溝跡１条，小ピット１口である。遺構面は以前の住宅基礎によって部分的に大きく撹乱されていた。調査区は東区と西区に分け実施し，調査面積は計79.5㎡，調査区内の標高は107.500m前後である。調査期間は試掘調査が平成14年５月16日，本調査が同年５月27日から６月17日までである。（第57図）

３．遺構・遺物

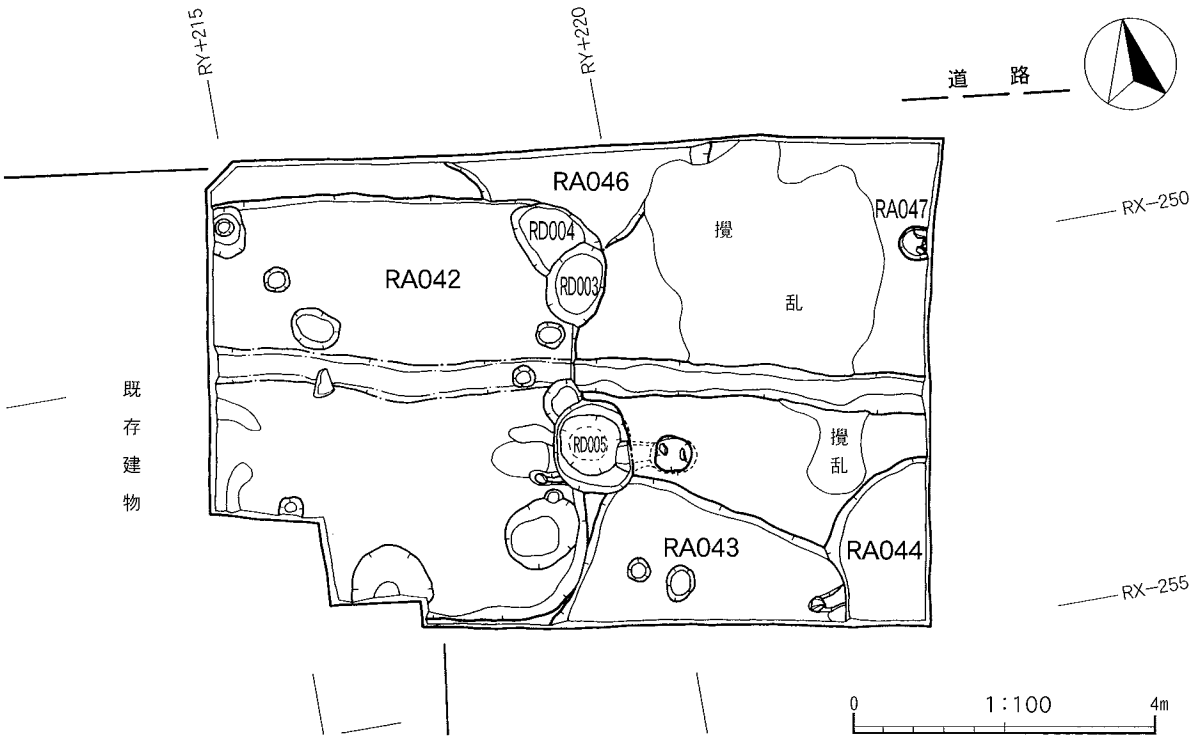
（１）東区の調査－古代の遺構・遺物

ＲＡ０４２竪穴住居跡（第58・59図）

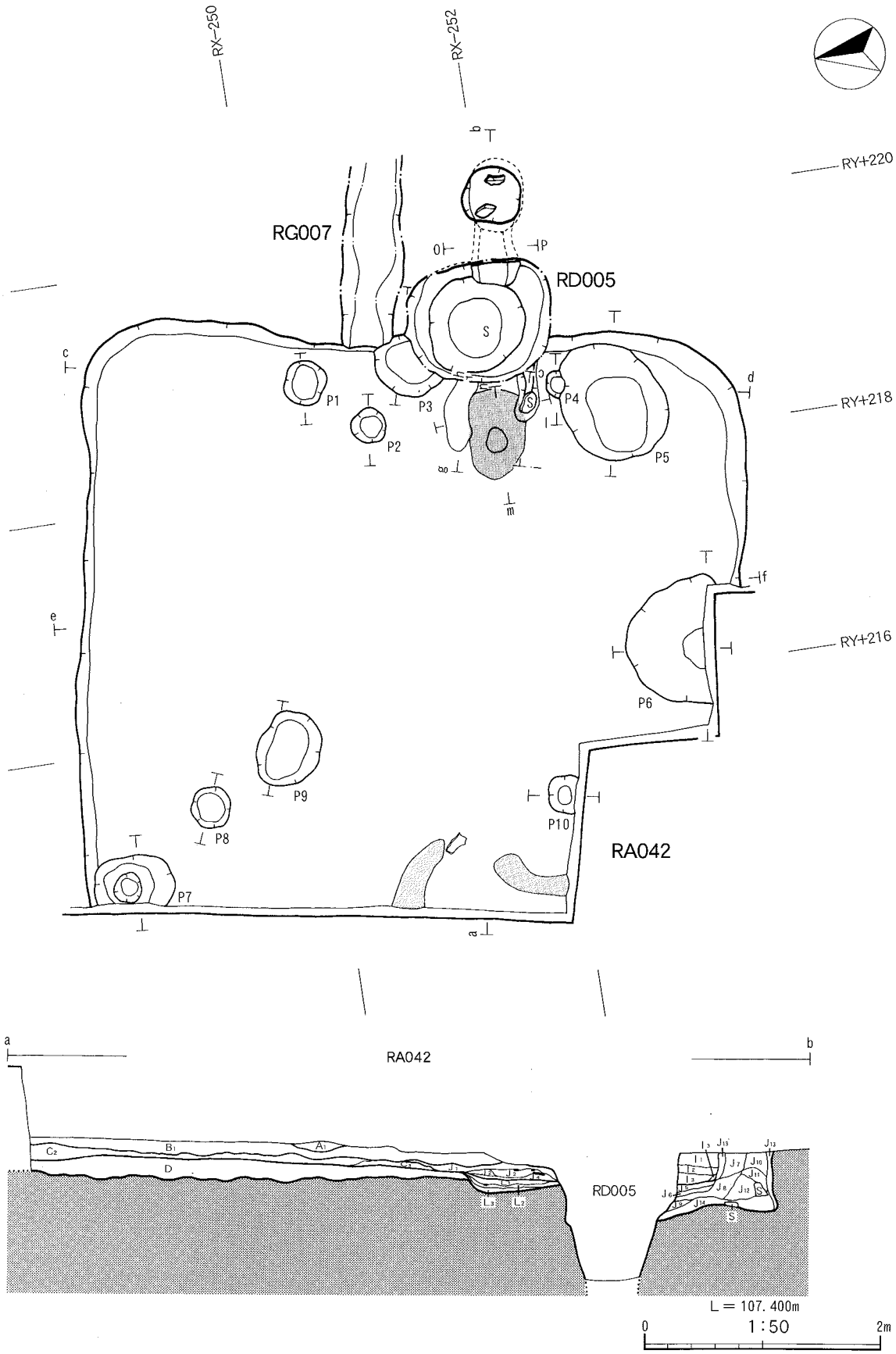
位　置　調査区中央　**平面形**　方形と考えられる。　**主軸方向**　Ｅ９°Ｎ

規　模　東西4.98m以上，南北5.56m　**掘込面**　削平　**検出面**　表土直下褐色シルト層上面

重複関係　ＲＤ005土坑・ＲＧ007溝跡に切られ，ＲＡ043竪穴住居跡を切る。



第 57 図　上畑遺跡第５次調査区全体図（東区）



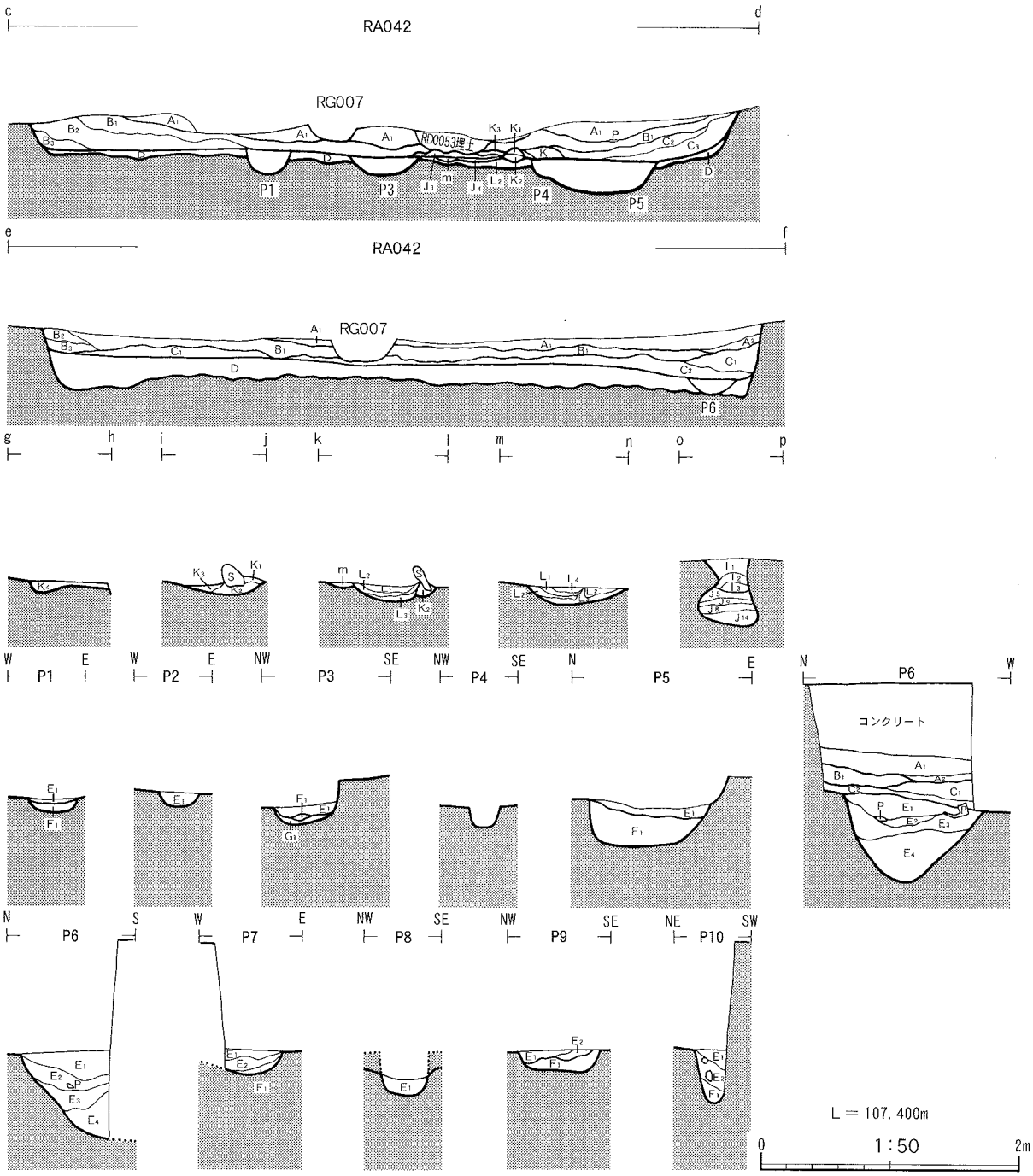
第 58 図　RA042 竪穴住居跡（1）

埋　　土　埋土は自然堆積で，層相よりＡ～Ｄの４層に大別できる。Ａ層は黒褐色土を主体とし褐色土を粉～粒状に含む。炭化物粒も若干混入する。Ｂ層は暗褐色土を主体とし，粉状の褐色土や炭化物粒・焼土粒を含む。Ｃ層は壁面崩壊土と考えられ，暗褐色土と褐色土の塊で構成される。炭化物と焼土を粒～塊状に含む。Ｄ層は床面構築土で褐色土を主体に暗褐色土や黒褐色土を粉状に含む。

壁の状態　外傾気味に直立する。検出面から床面までの深さは0.17～0.46mである。

床の状態　床は層厚0.07～0.28mほどの床面構築土（Ｄ層）上面で，ほぼ平坦である。床面から10口のピットを検出した。西寄りには焼土塊を２ヶ所に検出した。

か ま ど　東壁中央やや南寄りに検出した。煙道部はＲＤ005土坑に大きく壊されている。掘込式の煙道を

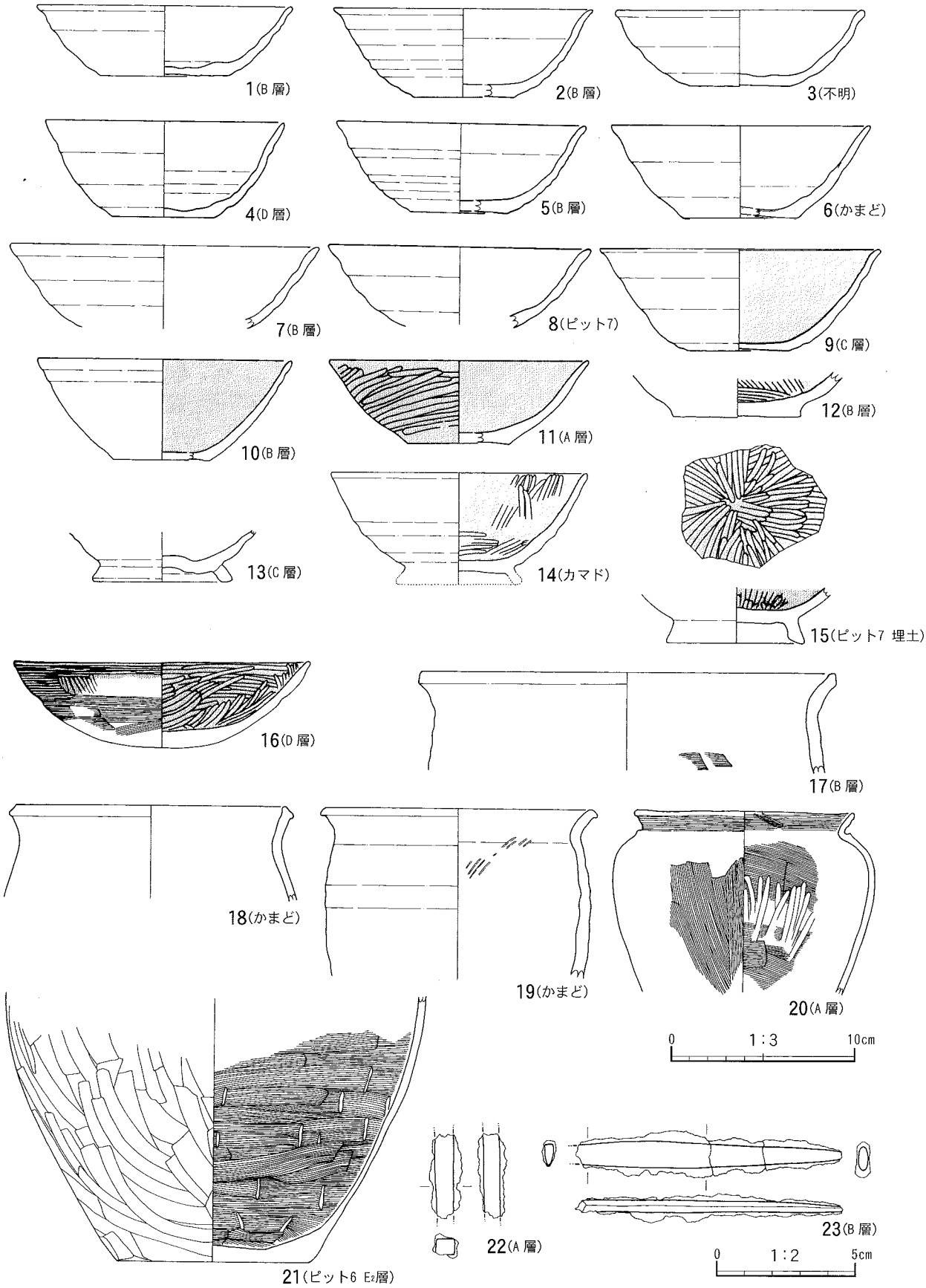


第59図　RA042竪穴住居跡（2）

持ち，天井部も一部残存していた。煙道底面は床面より深く，地山シルト層である。煙出部はややオーバーハングするピット状を呈する。残存部分の規模は煙出先端までの長さが0.98m以上，幅0.32～0.48m，検出面からの深さは0.43～0.57mをはかる。煙道内堆積土は天井構築土（Ｉ層）と流入堆積土（Ｊ層）に分層される。Ｉ層は褐色土を主体とし暗褐色土や黒褐色土，炭化物粒，焼土粒を粉～ブロック状に含み硬くしまる。Ｉ層下面は煙道の天井面にあたり，熱を受け焼土化している。Ｊ層は暗褐色土を主体とし，黒褐色土や褐色土，焼土粒，炭化物粒を含む。かまどそでは両方とも流出しており，残存状況は極めて悪い。北側のかまどそでは暗褐色の基底部構築土（Ｋ４層）のみが検出された。南そでは暗褐色土と褐色土からなる構築土（Ｋ１～３層）が検出された。また，先端には長さ約0.3m，幅約0.15mの自然石がやや内傾して直立する。そで構築の芯材として用いられていたと考えられる。残存部分の規模は，北そでが長さ0.60m，幅0.17～0.20m，南そでが長さ0.46m，幅0.14～0.18mをはかる。火床面は両そでの間に楕円形に確認された。長径0.77m，短径0.46mほどをはかる。赤褐色焼土層・焼土浸透層がおよそ0.14mの厚さで形成されており，中心部の直径約0.19mは特に強く熱を受け，硬く焼け締まり，青灰白色をおびている。

ピット　床面より10口（Ｐ１～10）検出した。Ｐ４・８・９・10は柱穴を構成するものと考えられる。住居床面からピット底面までの深さは0.10～0.42mをはかる。Ｐ２・５・６・７は貯蔵穴と考えられ，埋土中より土器片が多数出土している。特にＰ７は白色粘土塊が出土しており，粘土を貯蔵していた可能性もある。Ｐ１・３の用途は不明である。

出土遺物（第60図） １は回転ヘラ切り無調整の須恵器坏である。体部下端には手持ちヘラ削り調整が施されている。２～８は回転糸切り無調整のあかやき土器坏である。９～12は土師器坏である。９・10はロクロ整形糸切り無調整の土師器坏である。やや摩滅しており内黒処理が飛んでいる。11は土師器坏で外面ヘラミガキ調整，内面は内黒処理が摩滅し飛んでいる。胎土には雲母が混入している。12は底部から体部まで残存する非ロクロ整形土師器坏である。底部には木葉痕がある。内部はやや摩滅しているが，ヘラミガキ，内黒処理が施されている。13はあかやき土器高台付坏である。全体的に摩滅している。14・15は土師器高台付坏である。14は脚部を欠損する。底部は回転糸切り後ヘラナデ調整，内面は内黒ヘラミガキの調整が施されている。15は体部下半から底部が残存する。底部は回転糸切り，内面は内黒ヘラミガキ調整。16はＤ層出土の土師器坏である。丸底で体部中ほどに弱い段を持つ。外面は一部黒色，ヘラミガキの後ヨコナデ，内面は内黒処理ヘラミガキの調整が施されている。17～20はあかやき土器甕である。17は口縁部から体部上部のみ残存，内外面ともに摩滅するが，内面にはヨコナデの調整が施されている。19は口縁部から体部中程まで残存し，内面はやや摩滅しているが，ロクロ整形後ハケメの調整が施されている。20は土師器甕である。口縁部が外傾し，肩に弱い段がつく。体部は外面にヘラナデ，内面にヘラナデの後ヘラミガキの調整が施されている。21は須恵器甕である。体部下半から底部が残存し，全体的に薄手で，ゆがみがみられる。外面はヘラケズリ，内面はヘラナデを施す。22は断面形が長方形を呈する棒状の鉄製品で，釘か鏃の可能性がある。23は切先端と茎を欠損する鉄製の刀子である。



第 60 図　RA042 竪穴住居跡出土遺物

ＲＡ０４３竪穴住居跡（第61図）

位　　置　調査区南東　　**平 面 形**　方形と考えられる。　　**主軸方向**　不明

規　　模　南東－北西3.56m以上，南西－北西2.18m以上　　**掘 込 面**　削平

検 出 面　表土直下褐色シルト層上面　　**重複関係**　ＲＡ042・044竪穴住居跡に切られる。

埋　　土　埋土は自然堆積であり，層相よりＡ～Ｄの４層に大別できる。Ａ層は暗褐色土を主体とし黒色土と褐色土を粉～粒状に含む。Ｂ層は暗褐色土に褐色土，黒褐色土，炭化物粒を少量含む。Ｃ層は壁面崩壊土と考えられ，黒褐色土にブロック状の褐色土や炭化物粒や焼土粒を含む。Ｄ層は床面構築土である。褐色土を主体に粉状の暗褐色土と炭化物粒を少量含むものである。

壁の状態　上半部は崩壊したものと考えられるが，緩やかに外傾し立ち上がる。東壁はＲＡ044竪穴住居跡に，西壁の一部はＲＡ042竪穴住居跡，北西角はＲＤ005土坑に壊されている。検出面から床面までの深さは0.21～0.37mほどである。

床の状態　床面は層厚0.08～0.17mほどの床面構築土（Ｄ層）上面であり，ほぼ平坦である。床面から２口のピットを検出した。

か ま ど　東壁に，北側のそでと火床面の一部を検出した。南そでは調査区外に存在するものと考えられる。煙道や煙出部はＲＡ044竪穴住居跡に壊されている。北そでの先端には直径約22cmほどの扁平な自然石がかまど構築材として置かれている。北そでの構築土（Ｋ層）は褐色土に少量の暗褐色土と炭化物粒を含むもので，残存している規模は，長さ0.54m，幅0.12～0.26mほどである。火床面は北そでの南側に径約0.22mの不整円形の焼土として確認される。層厚0.06mほどの赤褐色焼土層と焼土浸透層（Ｌ層）からなる。

ピ ッ ト　床面より２口（Ｐ１・２）検出した。Ｐ１は暗褐色土と褐色土の埋土中に，炭化物粒や焼土粒，土器片を含むもの。Ｐ２の埋土は暗褐色土に褐色土や黒色土に土器片を含む。柱穴を構成するものかは不明である。

出土遺物（第62図）　１・２は須恵器坏である。１は底部ヘラ切り無調整，２は糸切り無調整。３はあかやき土器甕である。口縁～体部上半まで残存。頸部から口縁部にかけて外反し，口縁端は角をもつ。タタキ調整が施されている。表面は全体的に摩滅している。

ＲＡ０４４竪穴住居跡（第61図）

位　　置　調査区南東隅　　**平 面 形**　方形と考えられる。　　**主軸方向**　不明

規　　模　東西1.84m以上，南北2.12m以上　　**掘 込 面**　削平

検 出 面　表土直下褐色シルト層上面　　**重複関係**　ＲＡ043竪穴住居跡を切る。

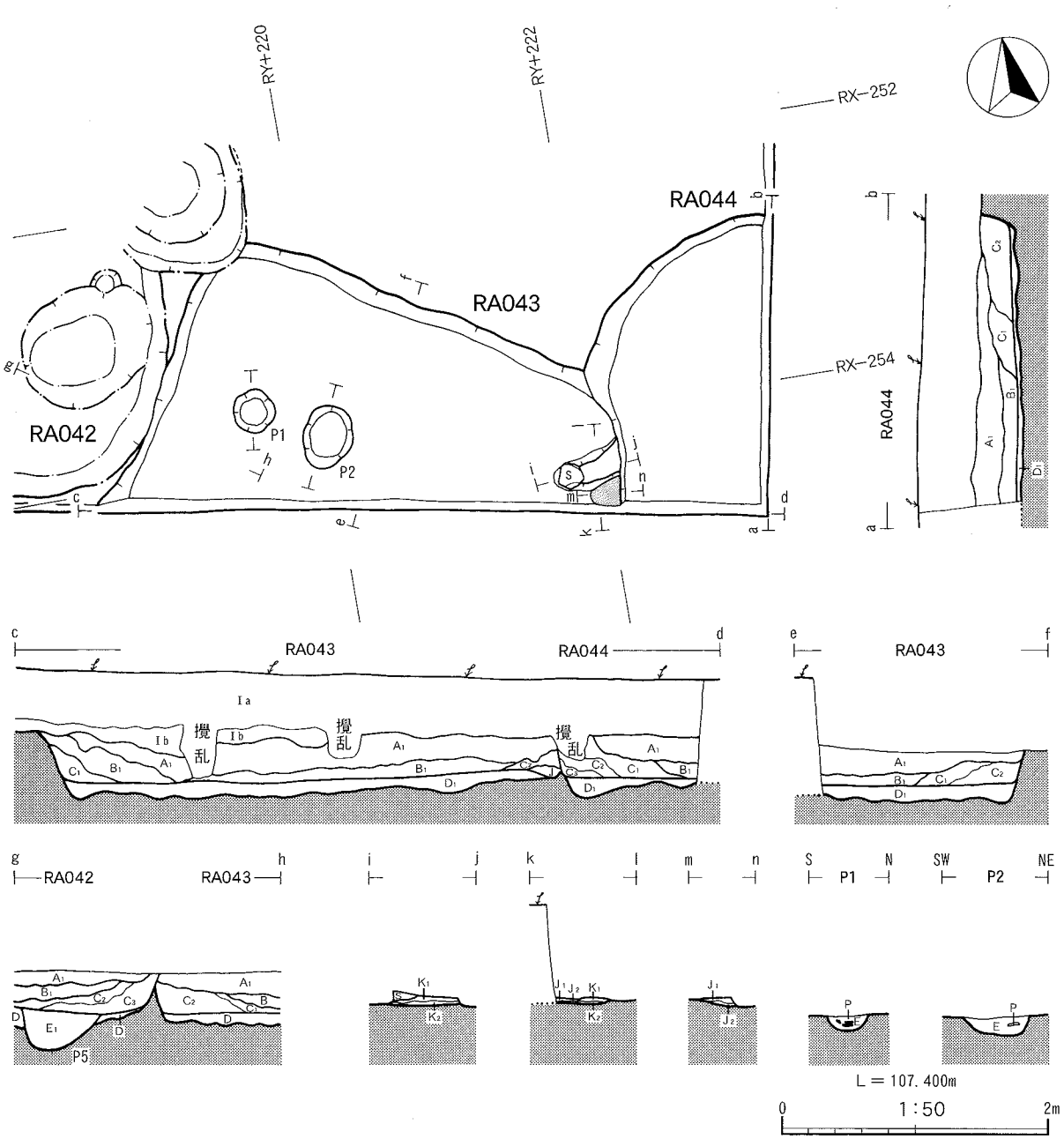
埋　　土　埋土は自然堆積である。層相よりＡ～Ｄの４層に大別できる。Ａ層は暗褐色土を主体とし褐色土を粉～粒状に含む。炭化物粒や焼土粒も少量混入する。Ｂ層は暗褐色土に褐色土，黒褐色土，炭化物粒を少量含む。Ｃ層は壁面崩壊土と考えられ，褐色土を主体に，ブロック状の暗褐色土や炭化物粒や焼土粒を含む。Ｄ層は床面構築土である。褐色土を主体に粉状の暗褐色土と炭化物粒，焼土粒を少量含むものである。

壁の状態　若干外傾するがほぼ直立する。検出面から床面までの深さは0.18～0.20mを測る。

床の状態　床面は層厚0.04～0.14mほどの床面構築土（Ｄ層）上面であり，ほぼ平坦である。

か ま ど　調査区外に存在するものと考えられる。　　**ピ ッ ト**　なし

出土遺物（第63図） 埋土および床面より土師器・須恵器・あかやき土器が出土している。１は須恵器坏である。口縁部から底部まで１／３ほど残存する。底部は回転糸切り無調整。内面と割れ口に煤が付着している。２は口縁部から体部上半が残存するあかやき土器甕である。口縁部は短く外反し先端は直立する。３は土師器甕である。非ロクロ整形で口縁部は緩やかに外反し，ヘラで２条の沈線が施されている。４は土師器甑である。外面はヘラケズリ調整が施されるが，摩滅している。



第 61 図　RA043・044 竪穴住居跡

ＲＡ０４６竪穴住居跡（第64図）

位　　置　調査区北側　　**平 面 形**　方形と考えられる。　　**主軸方向**　不明

規　　模　南西－北東2.90m以上，南東－北西2.10m以上　　**掘 込 面**　削平

検 出 面　表土直下褐色シルト層上面　　**重複関係**　ＲＡ042竪穴住居跡，ＲＤ002・003土坑に切られる。

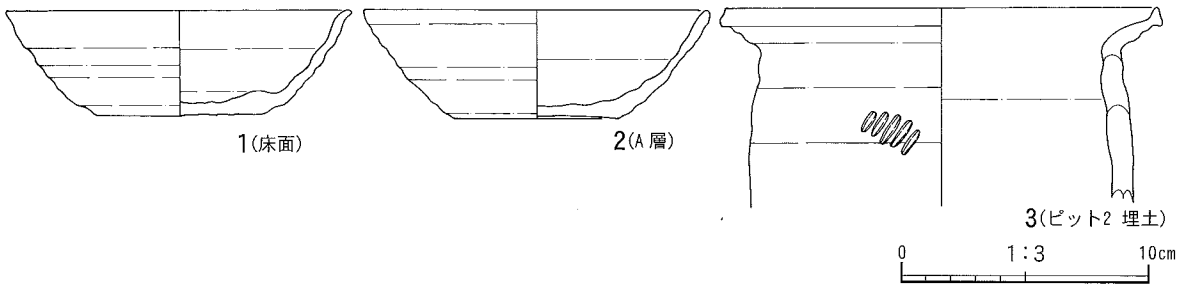
埋　　土　自然堆積で層相よりＡ～Ｄの４層に大別できる。Ａ層は暗褐色土を主体とし少量の炭化物粒と褐色土を粉～粒状に含む。Ｂ層は暗褐色土に褐色土，黒褐色土，炭化物粒，焼土粒を含む。Ｃ層は黒褐色土を主体とし，粉～粒状の褐色土と暗褐色土，および炭化物粒や焼土粒を含む。Ｄ層は床面構築土である。褐色土を主体とし，わずかに粉状の暗褐色土と炭化物粒を含む。

壁の状態　撹乱をひどく受けているが，緩やかに外傾し，立ち上がる。南角はＲＡ042竪穴住居跡，ＲＤ003土坑に切られている。検出面から床面までの深さは，0.06～0.23mを測る。

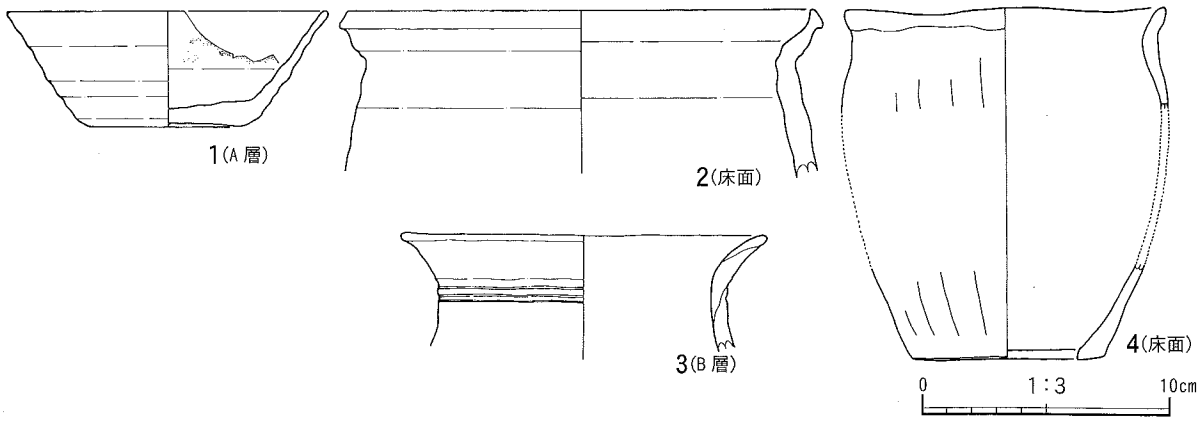
床の状態　層厚0.03～0.10mの床面構築土（Ｄ層）上面であり，ほぼ平坦である。

か ま ど　調査区外に存在するものと考えられる。　　**ピ ッ ト**　なし

出土遺物（第65図）　１・２はあかやき土器坏である。３はロクロ使用土師器坏である。底部は糸切り後回転ヘラ削り再調整，内面は黒色処理ヘラミガキ調整が施される。



第 62 図　RA043 竪穴住居跡出土遺物



第 63 図　RA044 竪穴住居跡出土遺物

ＲＡ０４７竪穴住居跡（第64図）

位　　置　調査区北東　　**平 面 形**　不明　　**主軸方向**　不明

規　　模　不明　　**掘 込 面**　削平　　**検 出 面**　表土直下褐色シルト層上面

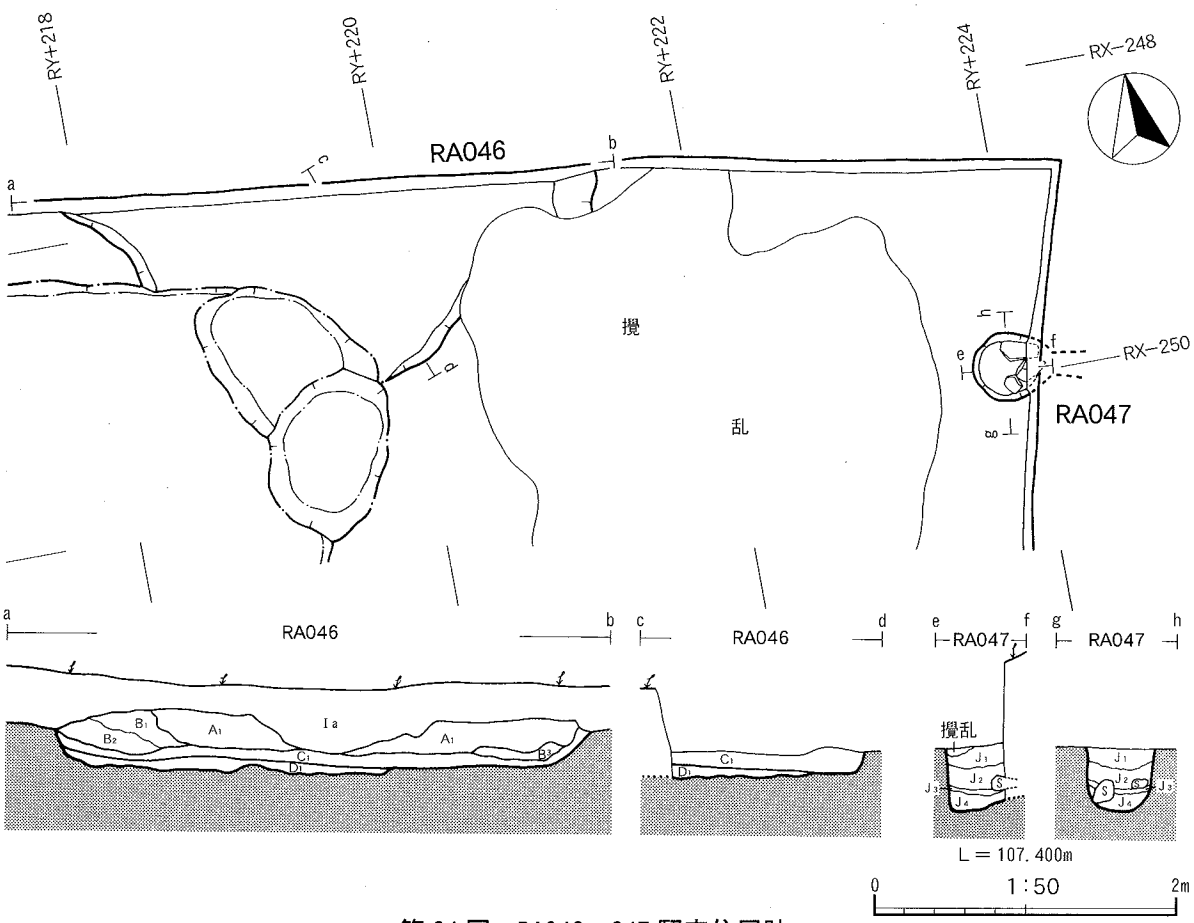
重複関係　なし

埋　　土　自然堆積の煙出内流入堆積土（Ｊ層）である。J_1・J_2・J_4層は褐色土を主体に粉状の暗褐色土，焼土粒，炭化物粒を含む。J_3層は黒褐色土を主体に褐色土と焼土粒を若干含む。また，埋土中に径0.20～0.35ｍほどの自然礫が含まれる。

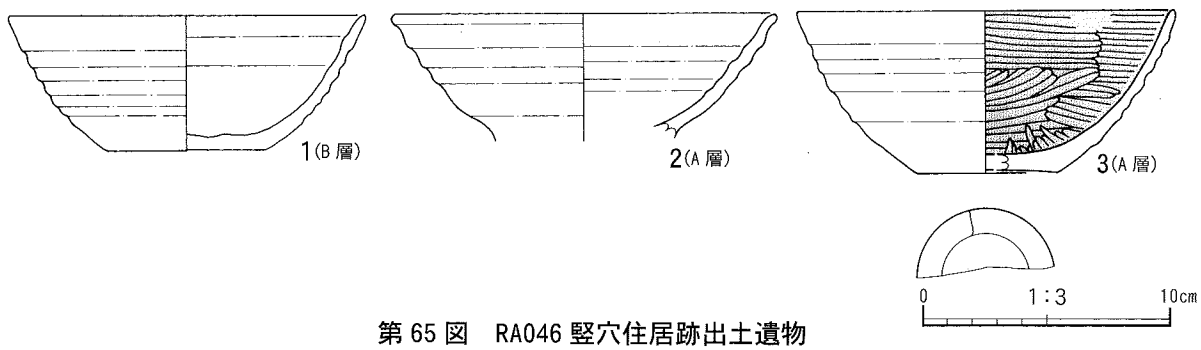
壁の状態　不明　　**床の状態**　不明

か ま ど　煙出部のみを検出した。煙出部は東西0.38ｍ以上，南北0.45ｍほどの楕円形のピット状を呈する。煙道はくり抜き式で東へ延びる。

出土遺物　図示できなかったが，煙出部埋土中より軽石が出土している。



第64図　RA046・047竪穴住居跡



第65図　RA046竪穴住居跡出土遺物

ＲＤ００３土坑（第66図）

位　　置　調査区北　　**平 面 形**　不整楕円形　　**主軸方向**　N23° E

規　　模　長軸上端1.14m，短軸上端0.78m，長軸下端0.80m，短軸下端0.59m

掘 込 面　削平　　**検 出 面**　表土直下褐色シルト層上面

重複関係　ＲＡ042竪穴住居跡に切られ，ＲＡ046竪穴住居跡とＲＤ004土坑を切る。

埋　　土　自然堆積でＡ～Ｃの３層に大別できる。Ａ層は褐色土を主体に粉状に暗褐色土と炭化物粒を含む。Ｂ層は暗褐色土を主体に黒褐色土粒，粘土粒，炭化物粒や径0.5～1.0cmほどの焼土粒を含む。Ｃ層は褐色土に若干の暗褐色土粒，炭化物粒，焼土粒を含む。

壁の状態　壁高0.24～0.47mほどで，北壁は外傾しつつ立ち上がり，その他はほぼ直壁である。

底の状態　皿状で，底面は褐色シルト層地山面である。

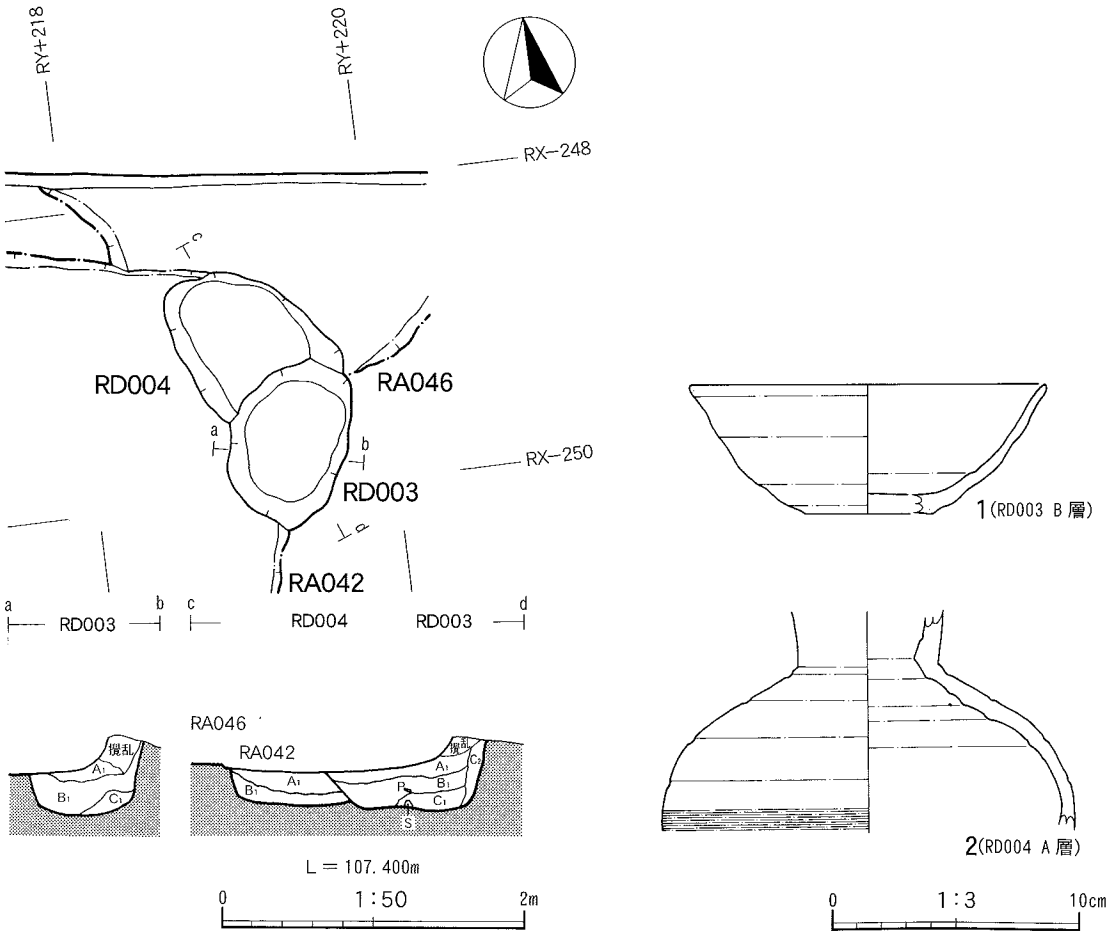
出土遺物（第66図１）　１はあかやき土器の坏である。口縁部から底部まで１／５ほど残存している。外面下部に黒班がみとめられ，墨書の可能性もあるが判読できない。他にも図示できなかったがＢ層より須恵器坏，あかやき土器坏，土師器坏・甕の小破片が出土している。

ＲＤ００４土坑（第66図）

位　　置　調査区北　　**平 面 形**　不整楕円形　　**主軸方向**　N26° W

規　　模　長軸上端0.82m以上，短軸上端0.86m，長軸下端0.77m以上，短軸下端0.74m

掘 込 面　削平　　**検 出 面**　表土直下褐色シルト層上面



第66図　RD003・004土坑，出土遺物

重複関係　ＲＡ042竪穴住居跡，ＲＤ003土坑に切られ，ＲＡ046竪穴住居跡を切る。

埋　　土　自然堆積でＡ・Ｂの２層に大別できる。Ａ層は暗褐色土に粉状の褐色土と炭化物粒を僅かに含む。Ｂ層は褐色土に粉状の黒褐色土と炭化物粒を含む。

壁の状態　壁高0.11～0.18mほどで，ほぼ直壁である。

底の状態　皿状で，底面は褐色シルト層地山面である。

出土遺物（第66図２）　２は須恵器長頸瓶である。頸部～体部上半までおよそ１／８残存している。体部中程には回転ヘラケズリ調整が施されている。胎土，焼成ともに良好である。その他に図示できなかったがＡ層より土師器坏の小破片が３点出土している。

（２）東区の調査－古代以降の遺構・遺構外遺物

ＲＤ００５土坑（第67図）

位　　置　調査区中央　　**平 面 形**　不整楕円形　　**主軸方向**　N16°Ｅ

規　　模　長軸上端1.22m以上，短軸上端1.04m，長軸下端0.44m，短軸下端0.46m

掘 込 面　削平　　**検 出 面**　表土直下褐色シルト層上面

重複関係　ＲＡ042竪穴住居跡を切る。

埋　　土　人為堆積でＡ～Ｃの３層に大別できる。Ａ層は２層，Ｂ層は２層に細分できる。Ａ層は黒褐色土に塊状の褐色土，小礫，焼土粒を含む。Ａ層下面にはこぶし大の礫が混入する。Ｂ層は暗褐色土に褐色土の塊や３cmほどの小礫を含む。Ｂ層の下層には，炭化した藁や灰が薄く堆積する。Ｃ層は粘性のある褐色土を主体に，粒～塊状の暗褐色土や白色粘土粒，炭化物粒が含まれる。

壁の状態　壁高1.20m以上。壁面中程にテラスを持つがほぼ直壁である。

底の状態　底面まで精査を行っていないため不明。

出土遺物（第67図１）　埋土上層（Ａ・Ｂ層）より多くの須恵器・あかやき土器・土師器の坏や甕の磨滅した小破片が出土している。ＲＡ042竪穴住居跡埋土から混入したものと考えられる。１は土師器の坏である。口縁部から体部にかけて１／５ほど残存している。ロクロを使用し，内面黒色処理が施されているが，とんでいる。内外面口縁部付近に炭化物が付着している。

ＲＧ００７溝跡（第67図）

位　　置　調査区中央　　**平 面 形**　ほぼ直線に東西にのびる。　　**主軸方向**　N16°Ｅ

規　　模　検出した総延長は1.22m。幅は上端1.04m，下端0.44mほどである。

掘 込 面　削平　　**検 出 面**　表土直下褐色シルト層上面

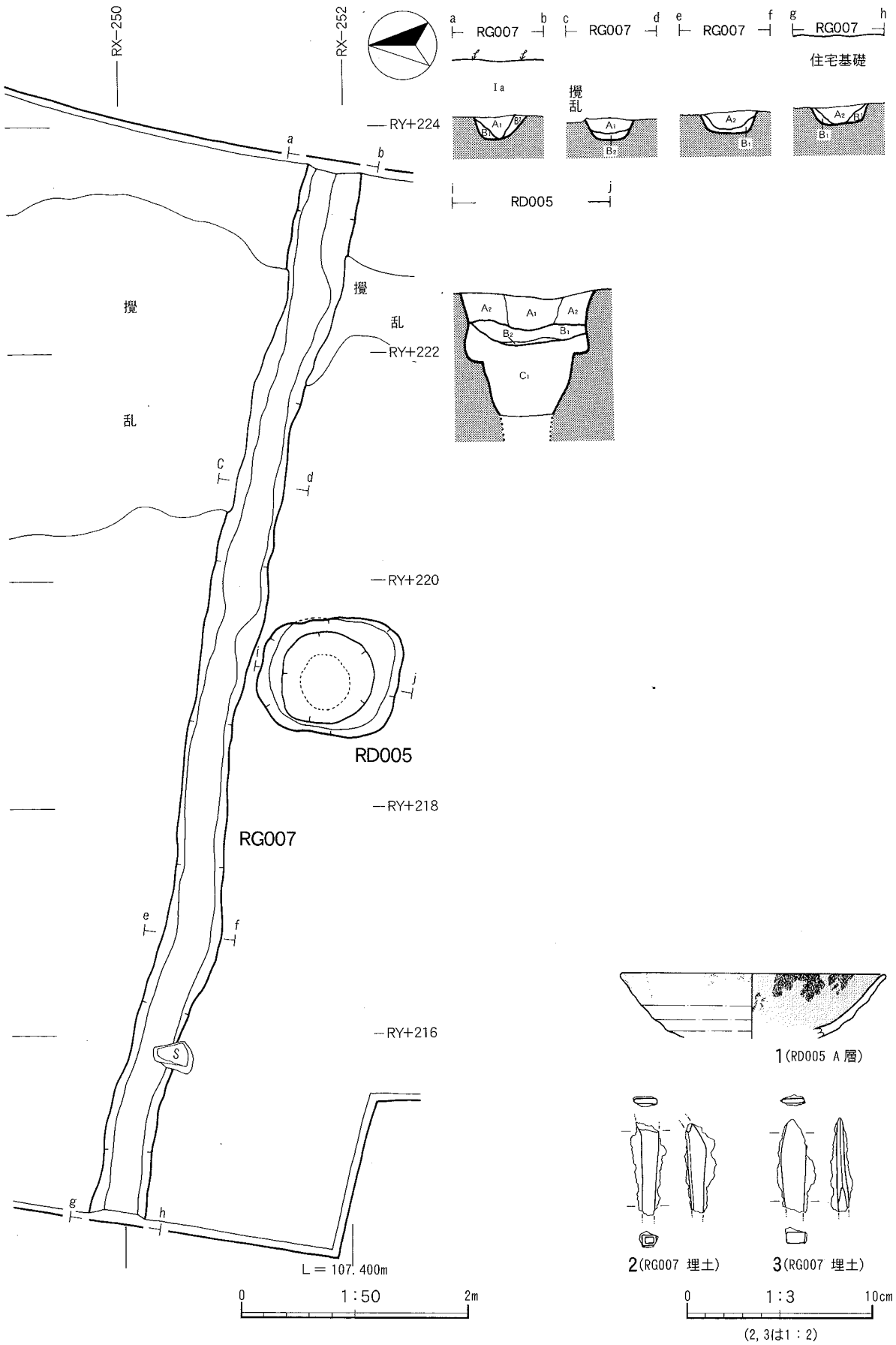
重複関係　ＲＡ042竪穴住居跡を切る。

埋　　土　自然堆積でＡ・Ｂの２層に大別できる。Ａ層は暗褐色土に褐色土を粉～粒状に含み，僅かに炭化物粒，焼土粒が混入する。Ｂ層は暗褐色土に粒状の褐色土を含む。

壁の状態　壁高0.12～0.19m。外傾気味に直立する。

底の状態　ほぼ平坦であるが，僅かに西へ傾斜している。床面は褐色シルト層地山面である。

出土遺物（第67図２・３）　埋土中より多くの須恵器・あかやき土器・土師器の坏や甕の磨滅した小破片が出土している。ＲＡ042竪穴住居跡埋土から混入したものと考えられる。２・３は埋土中から出土した鉄製品である。２は切先と茎が欠損した槍鉋である。茎は断面形が長方形を呈する。３は刀子の切先と考えられる。



第67図　RD005土坑，RG007溝跡，出土遺物

遺構外出土遺物（第70図１～４） 表土および撹乱土中より，須恵器・あかやき土器・土師器破片が出土している。１～４はすべて撹乱中より出土している。１は須恵器の蓋である。口縁部のみが残存する。２はＲＡ046東側撹乱中より出土した完形の土師器小型長頸瓶である。口縁部は短く外反し，頸部はほぼ直線，体部は中程が最大径をはかり球形を呈する。外面はヘラミガキ，口縁部内側はヨコナデの調整が施されている。３は土師器甕の底部である。底部外面に川砂が付着しており，いわゆる砂底土器である。砂は周縁部を除き全面に付着する。４は須恵器大甕の破片である。頸～体部上半のみ出土している。外面にはタタキ内面はナデ，頸部にはヨコナデの調整が施され，自然釉が付着している。胎土に若干の砂粒を含むが，焼成はよい。

（３）西区の調査

ＲＡ０４５竪穴住居跡（第68図）

位　置　調査区北寄り　**平面形**　方形と考えられる。　**主軸方向**　不明

規　模　東西0.84m以上，南北2.98m以上　**掘込面**　削平

検出面　表土直下褐色シルト層上面　**重複関係**　なし

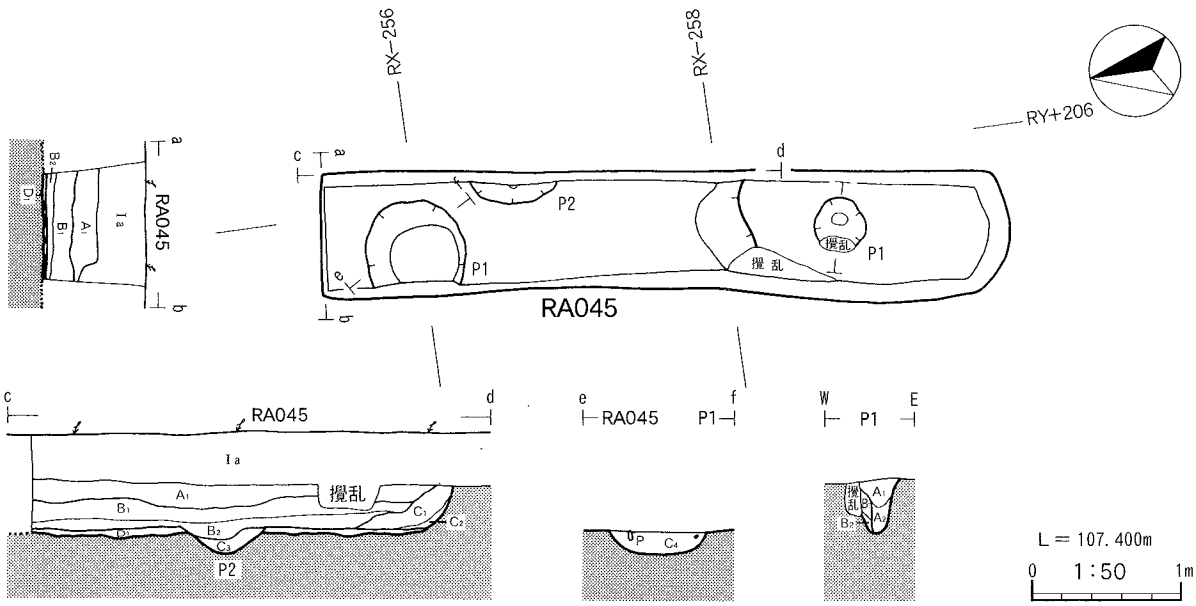
埋　土　自然堆積で層相よりＡ～Ｄの４層に大別できる。Ａ層は黒褐色土を主体とし褐色土，炭化物粒，焼土粒を含む。Ｂ層は黒～暗褐色土に粉～粒状の褐色土，炭化物粒，焼土粒を含む。Ｃ層は壁面崩壊土と考えられ，黒褐色土を主体とし，粉～粒状の褐色土を含む。Ｄ層は床面構築土である。褐色土を主体とし，粉状の暗褐色土を含む。

壁の状態　撹乱を受けているが，ほぼ直壁である。壁高は0.06～0.23mを測る。

床の状態　層厚0.02～0.08mの床面構築土（Ｄ層）上面であり，ほぼ平坦である。

かまど　調査区外に存在するものと考えられる。

ピット　床面より２口（Ｐ１・２）検出した。Ｐ１は径0.7mほどの不整円形の平面形を呈するものと考えられる。底面は皿状で，壁面は緩やかに外傾し立ち上がる。埋土は暗褐色土に粉～粒状の褐色土と焼土粒・炭化物粒を含むものである。Ｐ２は大半が調査区外に位置するため詳細は不明だが，径はおよそ0.7m以上をはかるものと考えられる。埋土は黒褐色土に褐色土を僅かに含むものである。Ｐ１・２ともに性格については不明である。



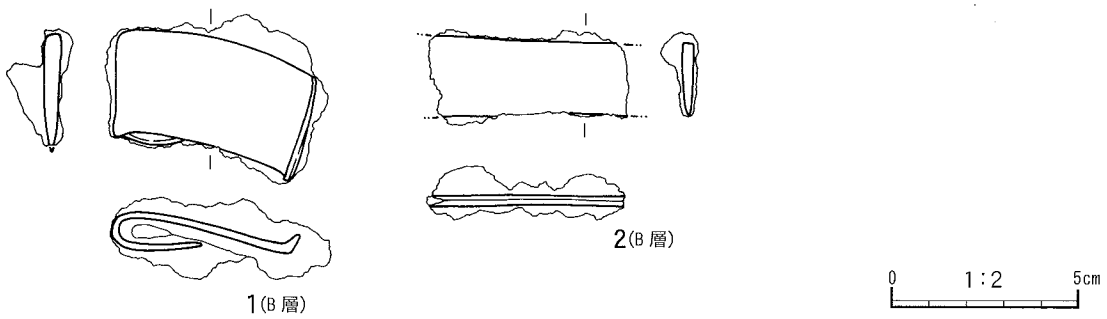
第68図　西区全体図，RA045竪穴住居跡，ピット

出土遺物（第69図１・２） 埋土中より須恵器，あかやき土器，土師器の坏・甕の小破片が出土している。須恵器やあかやき土器の量は少なく，土師器が主体的である。多くが小破片のため図示できなかったが，土師器の坏はロクロ整形，内面黒色処理，ヘラミガキの調整を施したものが多く見受けられる。土師器の甕の外面はヘラケズリ，内面はハケメの調整を施すものが多い。１・２はＢ層より出土した鉄製品である。１は鎌である。刃部を欠損した柄に装着する基部のみ残存。２は刀子の刃部である。

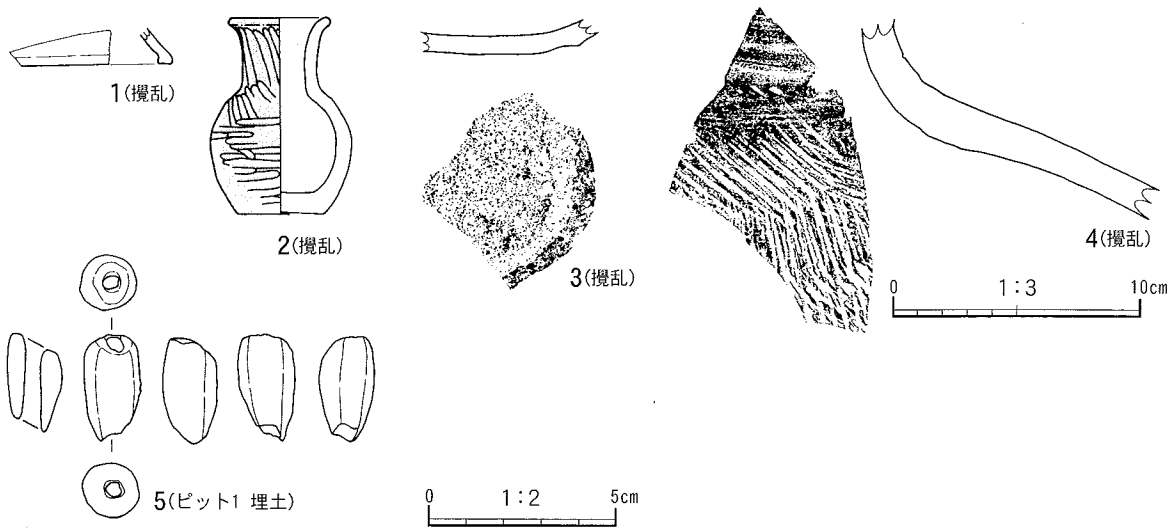
ピット（第68図）

西区調査区南寄りに１口（Ｐ１）検出した。撹乱を受けているが，平面形は円形を呈し，直径0.44m，検出面からの深さが0.34mをはかる。埋土の状況より柱穴跡と考えられるが，年代や建物の詳細は不明である。

出土遺物（第70図５） 西区調査区中央西側の撹乱より，土錘が１点出土した。先端が若干欠損しているが，ほぼ完形である。全長2.8cm，最大幅1.6cm，穿孔径0.4～0.45cmをはかる。



第69図　RA045竪穴住居跡出土遺物



第70図　西区ピット，遺構外出土遺物

4．調査のまとめ

今回の調査では，平安時代の竪穴住居跡６棟，平安時代の土坑２基，古代以降の土坑１基，古代以降の溝跡１条，小ピット１口を検出した。

竪穴住居跡　竪穴住居跡の規模は，ＲＡ042竪穴住居跡が一辺5.5m以上，床面積が30㎡以上を測る大型のものであるが，それ以外の住居跡はいずれも一辺約３ｍほどのものであると考えられる。また，かまどが確認できたものはＲＡ042・043のみである。ＲＡ042のかまどはＥ９°Ｎでほぼ東向き，ＲＡ043のかまどは大部分がＲＡ044との重複と調査区外への広がりによって不明だが，ほぼ東向きと考えられる。かまど構築はそでの先端に自然石を用い粘性土を使って構築してある。

出土遺物　出土遺物について概観する。須恵器・あかやき土器の坏は，回転糸切り無調整のものが主体的であり，若干のヘラ切りのものが含まれる。器形は底部から口縁部にかけて直線的なものも若干含まれるが，ほとんどのものは緩やかに内湾するものである。土師器坏は大半が回転糸切り無調整で，内面に黒色処理とヘラミガキの調整が施される。須恵器甕は破片だけではあるが大型のものが出土している。胎土に若干の砂粒を含むが焼成の良いものと，内部が赤褐色を呈し薄手のものが出土している。いずれにも胎土内に海綿状骨針は見られない。あかやき土器の甕は，口縁部が短く外反し，口唇が角ばる。土師器甕は口縁部が大きく外反し頸部に段の入るものも見られるが主体的ではなく，口縁部が短く外反し寸胴なものが多く見られる。

時　　期　以上より，今回出土した遺物の年代は９世紀半ば～後半と考えられ，遺構もその時期のものであろう。遺構の重複関係やかまど方向などから数時期の変遷はあると考えられるが，遺物の面から明確な年代差は認められないため，短期間に連続してこの地に住居が営まれていたことがわかる。

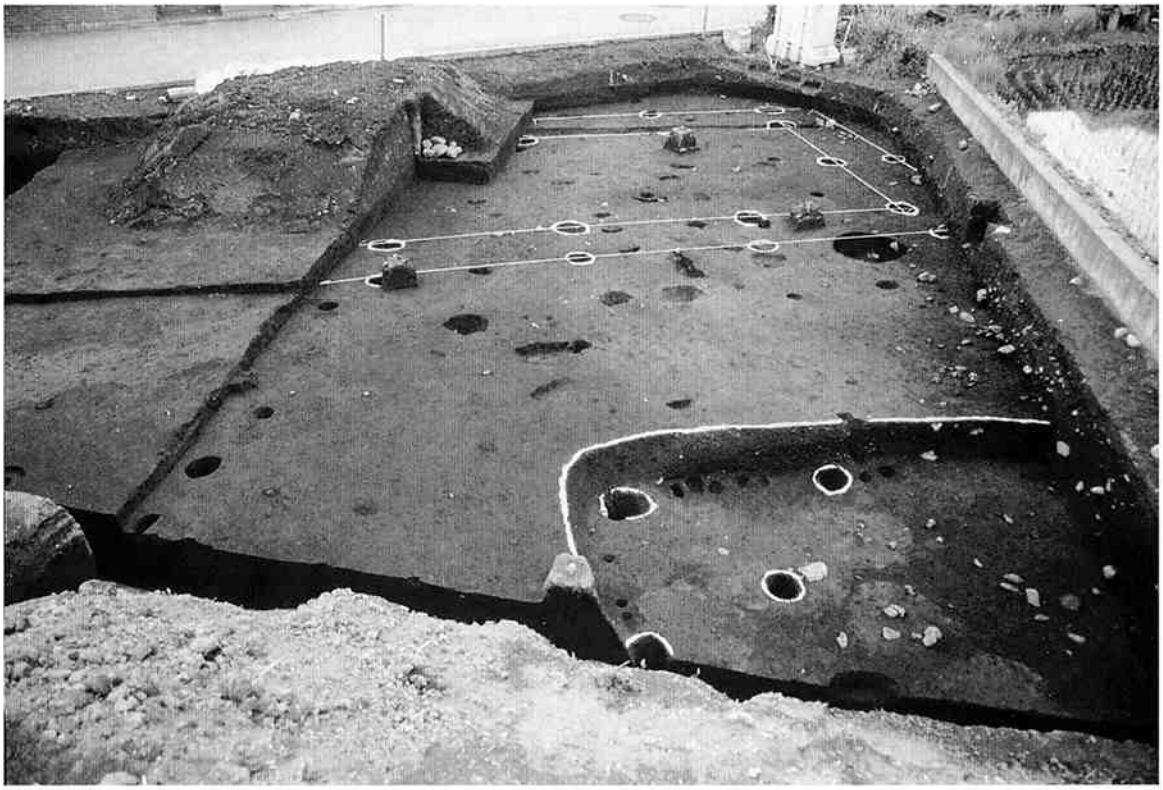
一方，奈良時代８世紀後半代の遺構・遺物は，これまで第４次調査区内でのみ検出されている。今次調査区内でも竪穴住居跡床面構築土などから８世紀後半の遺物が断片的に出土しており，今次調査区付近にも奈良時代の遺構が存在するものと考えられる。現段階においては，奈良時代の集落は遺跡の南寄りに展開していた可能性が高い。

集落様相　この上畑遺跡において検出した９世紀後半の竪穴住居跡は一辺が３～４ｍほどのものが大半で，一辺が５～６ｍ以上を測る大型のものは僅かである。しかし今次調査区の南側に位置する第４次調査区においては，鍛冶炉をともなう一辺が約７ｍを測る９世紀後半の竪穴住居跡が１棟検出されている。９世紀以降，北上川流域の竪穴住居を主体とする集落は住居の小型化・均一化が進み，大型住居の占める割合が減少することが指摘されているが，これは城柵出現以降の社会体制変化とみることができる（註１）。本地域内にも，９世紀後半には台太郎遺跡（盛岡市向中野）や西鹿渡遺跡（盛岡市津志田），百目木遺跡（盛岡市三本柳）をはじめとして数多くの集落が営まれるようになり，竪穴住居数も急激に増加する。あたかも志波城・徳丹城といった古代城柵が９世紀後半に廃絶し，胆沢城にその役割が集約されるのと時期を一にしているかのようにもみられる。社会の安定化にともない城柵が集約されるとともに，集落数が増加してきたと考えられる。上畑遺跡もこの社会の流れの中で営まれた集落のひとつと考えられるが，第４次調査区で検出された住居跡の存在など，調査の蓄積とともに集落の様相を明らかにすることが必要だろう。

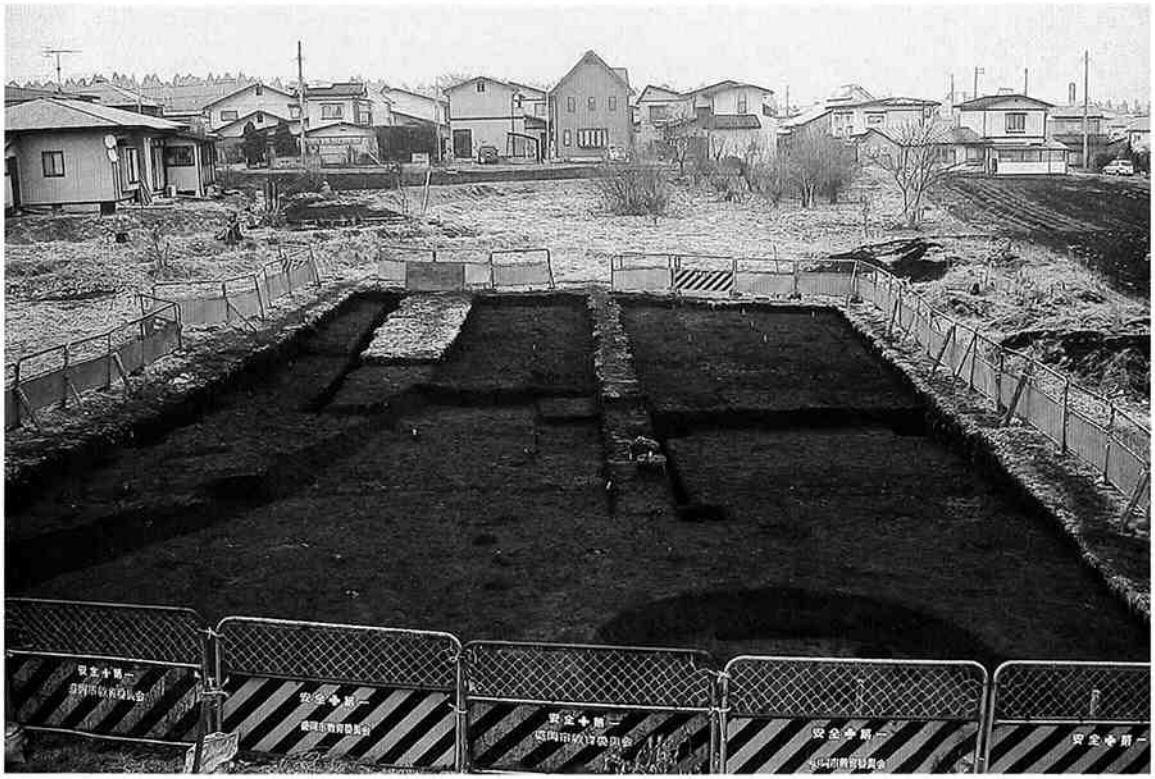
（今野 公顕）

註１　八木光則　2001「城柵の再編」『日本考古学』12

写 真 図 版



落合遺跡第15次調査区全景



大館町遺跡第75次調査区全景

繋Ⅳ遺跡第24次調査区全景

上畑遺跡第５次調査区（東区）全景

報告書抄録

ふりがな	もりおかしないいせきぐん
書名	「盛岡市内遺跡群」
副書名	平成14年度発掘調査概報
巻次	
シリーズ名	
編著者名	花井正香，神原雄一郎，藤村茂克，今野公顕　他
編集機関	盛岡市教育委員会
所在地	〒020-8532　岩手県盛岡市津志田14地割37番2　TEL019-651-4111（内線7354）
発行年月日	2003年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おちあいいせき 落合遺跡	もりおかししもよない 盛岡市下米内一丁目142-2，6	03201		39° 42′ 50″	141° 11′ 03″	第14・15次 2002.04.22～ 2002.05.27	270.9	個人住宅建築
おおだてちょういせき 大館町遺跡	もりおかしだいしんちょう 盛岡市大新町 207-2，209-3の一部			39° 42′ 42″	141° 07′ 01″	第75次 2002.05.08～ 2002.12.20	477.9	範囲確認学術調査
つなぎよんいせき 繋Ⅳ遺跡	もりおかしつなぎあざ 盛岡市繋字 たていち 舘市79-50			39° 40′ 18″	141° 01′ 24″	第24次 2002.7.30～ 2002.08.09	158.5	個人住宅建築
うわばたけいせき 上畑遺跡	もりおかしにしみるまえ 盛岡市西見前11 地割65-4，65-6			39° 37′ 56″	141° 10′ 29″	第５次 2002.05.16， 05.27～06.17	54.0	個人住宅建築
しわじょうあと 志波城跡	もりおかしなかおおた 盛岡市中太田 ほうはっちょう 方八丁86番２			39° 41″ 02″	141° 06′ 47″	第93次 2002.10.07～ 2002.10.11	168.5	史跡現状変更 （個人住宅建替）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
落合遺跡 第14・15次	集落跡	縄文時代	土坑　10 遺物包含層	縄文土器，石器 遮光器土偶	
		古代以降	竪穴建物跡　1 掘立柱建物跡 1 土坑　2 溝跡　1	かわらけ，青磁碗	
大館町遺跡 第75次	集落跡	縄文時代	竪穴跡　1 土坑　1 埋設土器　3 遺物包含層	縄文土器，石器，板状土偶	集落跡及び遺物包含層の東端部を確認。
		古代	溝跡　1	土師器	
繋Ⅳ遺跡 第24次	散布地	縄文時代	遺物包含層	縄文土器，石器	
上畑遺跡 第5次	集落跡	平安時代	竪穴住居跡　6 土坑　2	土師器，あかやき土器，須恵器，土錘	

盛 岡 市 内 遺 跡 群

—平成14年度発掘調査概報—

2003年３月31日 発行

発行　盛岡市教育委員会

〒020-8532　岩手県盛岡市津志田14地割37番２

TEL 019-651-4111（内線7354）文化課

印刷　有限会社　山本印刷

〒020-0004　岩手県盛岡市山岸一丁目8-9